町道関係遺跡

# 堀越丁二本松B地点遺跡

「町道柊木・前滝線緊急地方道路整備事業に伴う埋蔵文化財発掘調査報告書」

# 大胡神社前遺跡
# 養林寺裏遺跡

「町道堀越・上大屋線道路整備事業に伴う埋蔵文化財発掘調査報告書」

# 序　　文

大胡町は、群馬県の県都前橋市の東に接し、赤城山南麓の裾野に位置します。高度成長以後は前橋市のベットタウンとして着実に変貌を遂げ、前橋市と桐生市を結ぶ上毛電鉄から見る車窓も養蚕国の象徴であった桑畑も激減して住宅に変わっています。

本書は、近年に行われた町道建設に伴い事前に発掘調査が行われた三遺跡の報告書であります。堀越丁二本松B地点遺跡では縄文時代の住居跡が見つかり、以前に調査された堀越芝山遺跡の集落址の一部と考えられます。県指定史跡「大胡城跡」の一角である大胡神社前の遺跡では、建物跡や堀底道・神社の参道の一部等が見つかりました。遺物は中世～昭和期に渡り、太平洋戦争時の陶磁器も出土しています。養林寺の北側は大胡氏の館跡と推定されている寺域であり、縄文時代～近世の遺構・遺物が検出されました。

今後、これらの資料が大胡町の歴史の一助として利用され、さらに群馬県の縄文時代～昭和時代の解明に本書が広く活用されることを要望し、序文といたします。

大胡町教育委員会

教育長　松　本　浩　一

# 例　　言

1　本書は、勢多郡大胡町の町道建設に伴い発掘調査された三遺跡の埋蔵文化財発掘調査報告書である。

2　報告する遺跡は「町道柊木・前滝線緊急地方道整備事業」に係わる堀越丁二本松B地点遺跡と「町道堀越・上大屋線道路整備事業」に係わる大胡神社前遺跡・養林寺裏遺跡である。

3　遺跡の名称は、小字に大字を併記して呼称する。「堀越丁二本松B地点遺跡」は、本遺跡の北方で発掘調査された「堀越芝山遺跡」があり、同遺跡の一部と考えられる。尚、「堀越芝山遺跡」は字芝山でなく字丙二本松に所在することが判明した。「堀越芝山遺跡」を「丙二本松遺跡」と訂正し、不注意をお詫びする。

3　発掘調査は、大胡町教育委員会が直営で実施したものである。

4　本書の作成は、編集・執筆を大胡町教育委員会　山下歳信が行った。

5　発掘調査によって出土した遺物は、大胡町教育委員会文化財事務所に付設する収蔵棟で管理・収蔵されている。

6　発掘調査の実施および本書を作成するについて、下記の機関・諸氏にご指導・ご協力を賜った。記して感謝の意を表したい。(順不同、敬称略)

大胡町役場建設課　養林寺　技研測量株式会社　須賀工業　谷藤保彦　関根慎一
笠原仁史　新井喜昭　中島直樹　水谷好雄

7　発掘調査作業員及び整理作業員は次のとおりである。(敬称略)

若林俊次　大原きみ子　勅使川原幸枝　石井よね　小沢チヅエ　石川節子
荒井愛子　萩原秀子　井上美代子　小林　勝　荒井春夫　大野京子　松倉菊江
斎藤　準　山下雅江　鈴木久美子　内藤典子　五十嵐文江　田村志づ江　北爪珠美
須田章子　水谷貴之

# 凡　　例

1　第1図の遺跡分布図は、大胡町役場発行の10,000分の1を使用した。

2　第2図の位置図は、大胡町役場発行の2,500分の1を使用した。

3　遺構の縮尺は、住居跡1：60、土坑1：30～60とした。
遺物の縮尺は、1：3基本とし、他のものはスケールを付した。

4　遺構図中に記した断面基準線は、標高を示す。

5　遺構図中に示したN方向は、座標北である。

6　縄文土器の胎土内に繊維を含むものは、断面に●を付した。

7　出土遺物の写真は割愛させていただいた。

# 目　次

はじめに
例　言
凡　例
目　次
挿図目次
図版目次
抄　録

第Ⅰ章　発掘調査に至る経緯……1

第Ⅱ章　発掘調査の方法……1

第Ⅲ章　堀越丁二本松Ｂ地点遺跡……2～11
第１節　遺跡の立地と環境……2
第２節　検出された遺構と遺物……3～9
第３節　成果と課題……10～11

第Ⅳ章　大胡神社前遺跡……12～32
第１節　遺跡の立地と環境……12～14
第２節　Ａ地点遺跡
(1)　検出された遺構と遺物……15～24
第３節　Ｂ地点遺跡
(1)　検出された遺構と遺物……25～32
第４節　大胡神社の由緒と景観について……27～31
第５節　成果と課題……32

第Ⅴ章　養林寺裏遺跡……33～61
第１節　遺跡の立地と環境……33～34
第２節　検出された遺構と遺物……34～58
第３節　成果と課題……58～59

# 挿図目次


第１図　遺跡の位置と周辺の遺跡……2
第２図　堀越丁二本松Ｂ地点遺跡位置図……3
第３図　堀越丁二本松Ｂ地点遺跡全体図……4
第４図　１号住居跡・出土遺物……5
第５図　竪穴遺構・出土遺物……7
第６図　土坑・集石土坑、出土遺物……8
第７図　堀越丁二本松Ｂ地点遺跡住居跡分布図…10
第８図　横沢新屋敷遺跡住居跡分布図……10
第９図　堀越中道遺跡住居跡分布図……10
第10図　大胡城跡周辺図……13
第11図　大胡神社前遺跡位置図……14
第12図　大胡神社前遺跡全体図……14
第13図　Ａ地点遺跡全体図……15
第14図　土層図（Ａ－Ａ’）……16
第15図　土層図（Ｂ－Ｂ’）……16
第16図　掘立柱建物跡……16
第17図　柱穴列……17
第18図　１号土坑……17
第19図　２～４号土坑……17
第20図　５号土坑……17
第21図　堀底道遺物出土状況図……18
第22図　土層図（Ｃ－Ｃ’）……19
第23図　土層図（Ｄ－Ｄ’）……19
第24図　出土遺物(1)……21
第25図　出土遺物(2)……22
第26図　出土遺物(3)……23
第27図　出土遺物(4)……24
第28図　Ｂ地点遺跡全体図……25
第29図　西参道石列……25
第30図　土層図（Ｅ－Ｅ’）……26
第31図　土層図（Ｆ－Ｆ’）……26
第32図　土層図（Ｇ－Ｇ’）……26
第33図　出土遺物(1)……28
第34図　出土遺物(2)……29
第35図　出土遺物(3)……30
第36図　前橋市立図書館蔵「大胡城下絵図」……31
第37図　養林寺保管「大胡城絵図」……31
第38図　長善寺保管「大胡城絵図」……31
第39図　近戸神社之景……31
第40図　養林寺裏遺跡全体図……35
第41図　Ｊ１・２号土坑、出土遺物……36
第42図　Ｊ２号土坑出土遺物・包含層遺物……37
第43図　１号住居跡・出土遺物……38
第44図　２号住居跡・出土遺物……38
第45図　３号住居跡・出土遺物……40
第46図　４号住居跡・出土遺物(1)……41
第47図　４号住居跡出土遺物(2)……42
第48図　４号住居跡出土遺物(3)……43
第49図　１号掘立柱建物跡……45
第50図　２号掘立柱建物跡……45
第51図　３号掘立柱建物跡……45
第52図　４号掘立柱建物跡……46
第53図　柱穴・出土遺物……46
第54図　１号溝跡、１・２号溝跡出土遺物……49
第55図　２～10溝跡出土遺物……50
第56図　11～13号溝跡出土遺物……51
第57図　１号井戸、井戸跡出土遺物……52
第58図　土坑・出土遺物……56
第59図　一括遺物(1)……57
第60図　一括遺物(2)……58

# 図版目次


PL1　1．堀越丁二本松B地点遺跡（南より）
　　2．同遺跡全景（真上から）
PL2　1．大胡神社前A地点遺跡（西より）
　　2．同遺跡全景（真上から）
PL3　1．大胡神社前B地点遺跡（西より）
　　2．同遺跡全景（東から）
PL4　1．養林寺裏遺跡（南より）
　　2．同遺跡（真上から）
PL5　1．堀越丁二本松B地点遺跡1号住居
　　2．同炉跡
　　3．同住居小型深鉢出土状況
PL6　1．同遺跡竪穴遺構
　　2．同遺跡J 4号土坑
　　3．大胡神社前A地点遺跡調査前
PL7　1．大胡神社前A地点遺跡土層
　　2．大胡神社前B地点遺跡調査前
　　3．参道跡（西より）
PL8　1．同参道（北より）
　　2．養林寺裏遺跡東部分測量風景
　　3．同遺跡J 1号土坑
PL9　1．同遺跡J 2号土坑
　　2．同遺跡2号住居跡（北より）
　　3．同遺跡3号住居跡（北より）
PL10　1．同遺跡4号住居跡（北より）
　　2．同遺跡4号住居跡遺物出土状況
　　3．同遺跡55・56号土坑

# 抄　録

| | |
|---|---|
| フリガナ | ホリコシテイニホンマツBチテンイセキ　オオゴジンジャマエイセキ　ヨウリンジウライセキ |
| 書名 | 堀越丁二本松B地点遺跡・大胡神社前遺跡・養林寺裏遺跡 |
| 副書名 | 町道整備事業に伴う埋蔵文化財発掘調査報告書 |
| 編集者名 | 山下歳信 |
| 編集機関 | 大胡町教育委員会／〒371-0292　群馬県勢多郡大胡町大字堀越1115番地 |
| 発行機関 | 大胡町教育委員会／〒371-0292　群馬県勢多郡大胡町大字堀越1115番地 |
| 発行年月日 | 平成14年3月30日 |

| 所収遺跡名 | 所在地 |
|---|---|
| 堀越丁二本松B地点遺跡 | 大胡町大字堀越字丁二本松471番地外 |
| 大胡神社前A地点遺跡 | 大胡町大字河原浜字根古屋639-1、640-1番地 |
| 同　B地点遺跡 | 大字河原浜字根古屋636-1、637-1番地 |
| 養林寺裏遺跡 | 大胡町大字堀越字殿町1257-1番地 |

| 所収遺跡名 | 種別 | 主な時代 | 主な遺構 | 主な遺物 |
|---|---|---|---|---|
| 堀越丁二本松B地点遺跡 | 集落 | 縄文時代前期 | 竪穴住居跡<br>竪穴遺構<br>土坑 | 二ッ木式、諸磯c式土器<br>二ッ木式、諸磯c式土器、玦状耳飾り |
| 大胡神社前遺跡 | | 中近世 | 堀底道 | 陶磁器・砥石・焙烙等<br>掘立柱建物跡<br>土坑 |
| 養林寺裏遺跡 | 集落 | 縄文時代中期<br>平安時代<br>中～近世 | 土坑<br>竪穴住居跡<br>掘立柱建物跡<br>井戸・溝<br>土坑 | 加曾利E式<br>甕・高台付碗・灰釉陶器等<br>カワラケ<br>陶磁器・石臼<br>古銭・砥石 |

# 第Ⅰ章　発掘調査に至る経緯

**《堀越丁二本松Ｂ地点遺跡》**

当町建設課より平成９年２月28日付けで町道柊木・前滝線緊急地方道路整備事業に伴う埋蔵文化財の有無を確認する試掘調査の依頼を受け、重機による試掘調査を行った。その結果、平成６年度に大胡町総合運動公園の建設事業に伴う発掘調査を実施した堀越芝山遺跡（改正　堀越丙二本松遺跡）で検出された縄文時代の集落跡の広がりの一部と考えられる住居跡と土坑を確認した。

教育委員会は、本道路整備事業に於ける開発行為により、埋蔵文化財の破壊が想定されることから、開発にあたっては事前に協議を願う意見書を建設課に提出し、事業の進捗に伴い同年の９月16日～30日に発掘調査を実施した。

**《大胡神社前遺跡と養林寺裏遺跡》**

平成10年３月20日に当町建設課より都市企画道路３・４・５号堀越上大屋線緊急地方道路整備Ａ工事（改良）に伴う埋蔵文化財の協議が持たれた。同路線は一部拡幅を伴う改修と新路線の変更が行われる予定があり、協議に基づき４月に大胡城跡の最北の曲輪で大胡神社が鎮座する近戸曲輪と現在大胡幼稚園として使用されている北城（越中屋敷）を区切る大堀切りが想定される大胡神社前遺跡の試掘調査を行った。同地域は現道の北側拡幅部分を対象とした試掘調査であった。この部分には大胡神社の西大門と云われた参道が存在した箇所であり、遺跡の破壊が十分予想される為、発掘調査を実施し、記録保存を図ることで教育委員会と建設課は同意する。発掘調査は平成10年４月からＡ地点、同年10月からＢ地点を実施した。

同一路線上にある養林寺の北側は、大胡神社前から直線とする計画であり、同寺域は大胡氏に関係する館跡と推定されている箇所である。試掘調査により、平安時代以降の遺構を検出した。結果を踏まえ、記録保存の為の発掘調査を平成11年４月から実施した。

発掘調査終了後には、随時土器洗いと図面整理等を行った。報告書の刊行は平成13年度事業として本報告書の発行を行った。

# 第Ⅱ章　調査の方法

調査にあたっては、国家座標Ⅸ系を基準とする５ｍ×５ｍのグリットを設定した。グリット名は堀越丁二本松Ｂ地点遺跡は南東コーナー杭をもってグリット名と呼称した。大胡神社前遺跡も東西方向に算用数字、南北方向をアルファベツトを付し、グリット名は南西コーナー杭をもって呼称し、養林寺裏遺跡は南北方向に算用数字、東西方向をアルファベツトを付し、グリット名は南東コーナー杭をもって呼称した。調査は、試掘結果に基づき縄文時代の遺構確認面付近まで重機により掘削し、ジョレンがけによりプラン確認を図った。

遺構の記録図面は、Ｓ＝１：20を基本とし、必要に応じＳ＝１：10の詳細図で記録した。遺構の記録写真は、35㎜の白黒フィルム及びカラーリバーサルフィルムを用い、完掘後の全体写真は業者に委託してバルーン（気球）により６×６の白黒フィルム及びカラーリバーサルフィルムを用い実施した。

# 第Ⅲ章　堀越丁二本松Ｂ地点遺跡

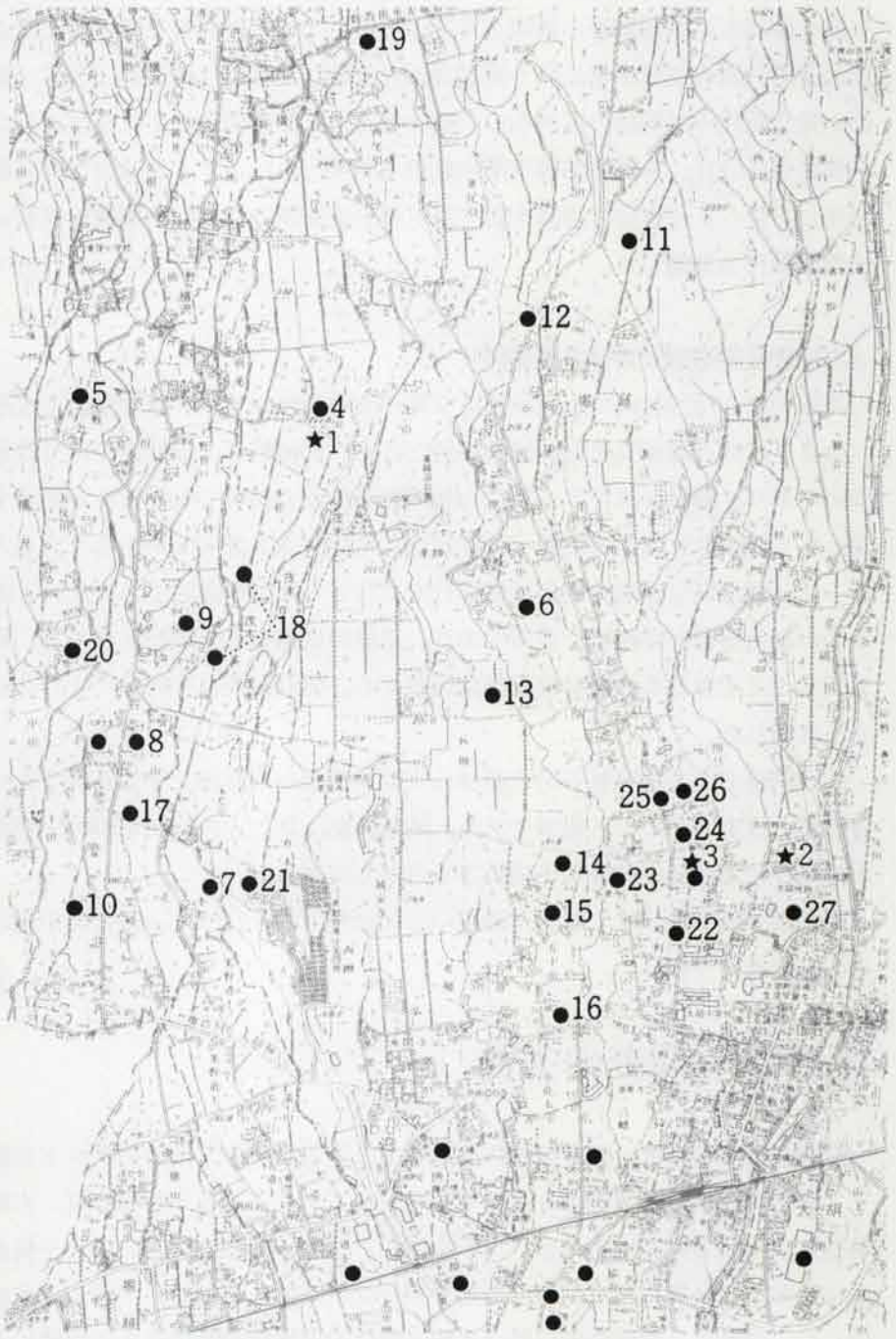
## 第１節　遺跡の位置と環境

本遺跡は、勢多郡大胡町大字堀越字丁二本松に所在し、上毛電気鉄道大胡駅の北西2.3kmに位置する。遺跡の東方は東傾斜となり、尾引沼を谷頭として南方に続く開析谷となり、比高差は10m以上を測る。

標高222m前後の平坦部に検出され、北に町道柊木・前滝線を挟んで堀越丙二本松遺跡(４)が隣接する。同遺跡からは縄文前期二ッ木式期の住居跡が３軒検出されており、本遺跡でも同期の住居跡の検出から集落の広がりが確認された。

同台地の南方や開析谷を挟んで東方の台地上には、県営担い手育成ほ場整備事業大胡西北部地区の事業に伴う発掘調査で検出された多くの遺跡が分布する。

縄文時代では前期前葉の花積下層～二ッ木式期と諸磯式期の集落址である横沢新屋敷遺跡(５)、二ッ木式期の集落址である堀越中道遺跡(６)がある。これらは、谷地を挟んで350m前後の間隔にあり、同期の遺跡が点在する事例は群馬県内で




第１図　遺跡の位置と周辺の遺跡

| | | | | | | | |
|---|---|---|---|---|---|---|---|
| 1 | 堀越丁二本松Ｂ地点遺跡 | 2 | 大胡神社前遺跡 | 3 | 養林寺裏遺跡 | 4 | 堀越丙二本松遺跡 |
| 5 | 横沢新屋敷遺跡 | 6 | 堀越中道遺跡 | 7 | 茂木二本松遺跡 | 8 | 横沢向山遺跡 |
| 9 | 横沢向田遺跡 | 10 | 柴崎遺跡 | 11 | 甲諏訪遺跡 | 12 | 堀越西一丁田遺跡 |
| 13 | 新畑遺跡 | 14～16 | 五十山遺跡群 | 17 | 大胡町39号墳 | 18 | 堀越丁二本松遺跡 |
| 19 | 堀越乙西尾引遺跡 | 20 | 横沢城跡 | 21 | 真木遺跡 | 22 | 殿町遺跡 |
| 23 | 長善寺 | 24 | 東福寺跡 | 25 | 金胎寺跡 | 26 | 永龍寺跡 |
| 27 | 大胡城跡本丸 | | | | | | |

特出すべきである。後続する関山式期は小規模集落である茂木二本松遺跡(7)がある。中葉の黒浜・有尾式期、それに継続する後葉の諸磯式期は小規模集落であり、横沢向山遺跡(8)、横沢向田遺跡(9)等がある。中期は加曽利E式期の集落も小規模集落であり、柴崎遺跡(10)と甲諏訪遺跡(11)がある。後期に至ると遺跡は減少するが堀ノ内式期の住居址と加曽利B式期の包含層を検出した堀越西一丁田遺跡(12)がある。晩期〜弥生時代の遺跡は本町では激減し、本遺跡の周辺では検出されていない。

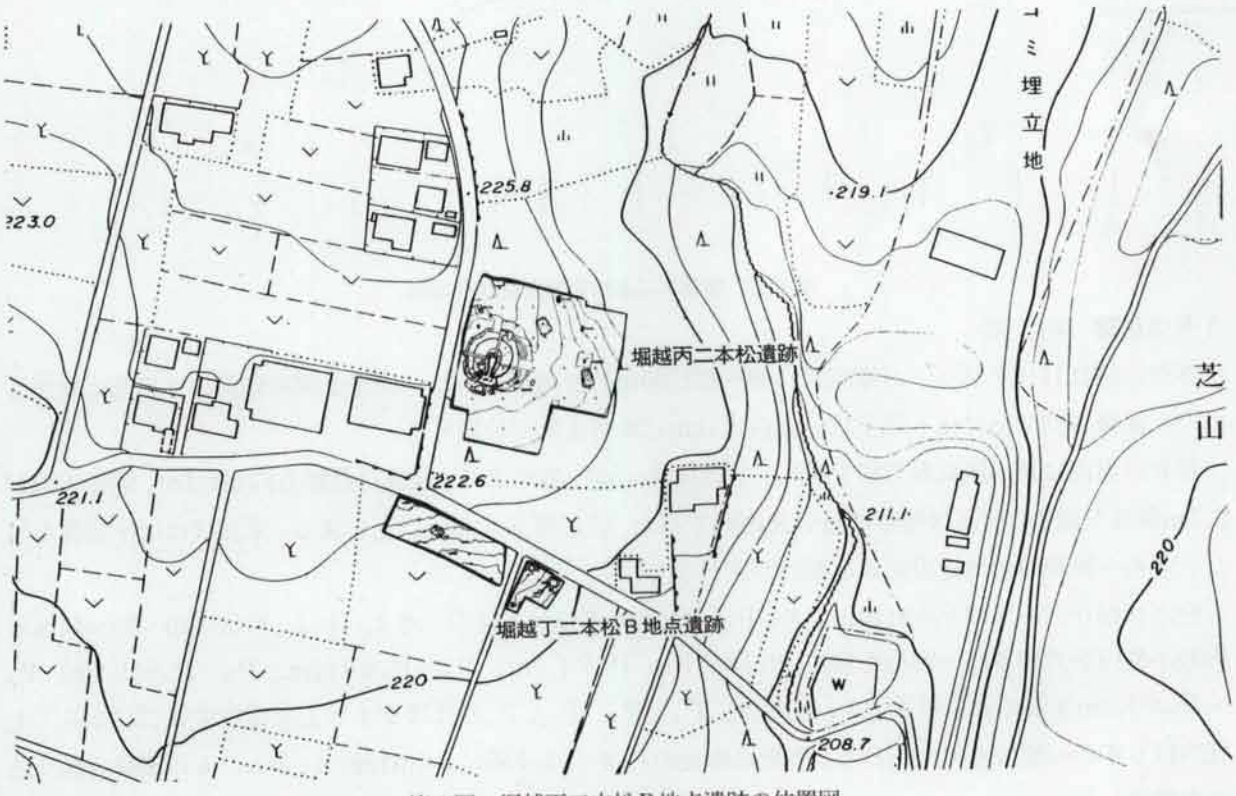
古墳時代の初頭において再び集落が営み始められる。所謂「石田川式」期の集落が薬師川沿いに営まれ、新畑遺跡(13)と五十山遺跡群(14〜16)が調査されている。

古墳の構築は終末期頃に活発となり、小規模の円墳が寺沢川の右岸と左岸の台地上に構築されて群集墳を構成している。左岸では獅嚙環頭太刀を出土している大胡町39号墳(17)を代表とする柴崎古墳群や向山・向田地区の古墳群、右岸では五反田・大塚地区と横沢新屋敷遺跡の古墳群等がある。

集落の営みは5世紀以降は停滞し、平安時代に至り活発となる。堀越中道遺跡(6)は下級官人に掌握された拠点集落と考えられ、周辺に堀越丁二本松遺跡(18)等の小集落が点在する。これらの集落は鉄生産に係わると考えられる開拓集落であり、乙西尾引遺跡では製鉄址(19)が検出されている。同期の古墓は真木遺跡(21)から石製骨蔵器が検出されている。中世では字内出にある通称「日向屋敷」と呼ばれている横沢城(20)があり、堀址が残存する。

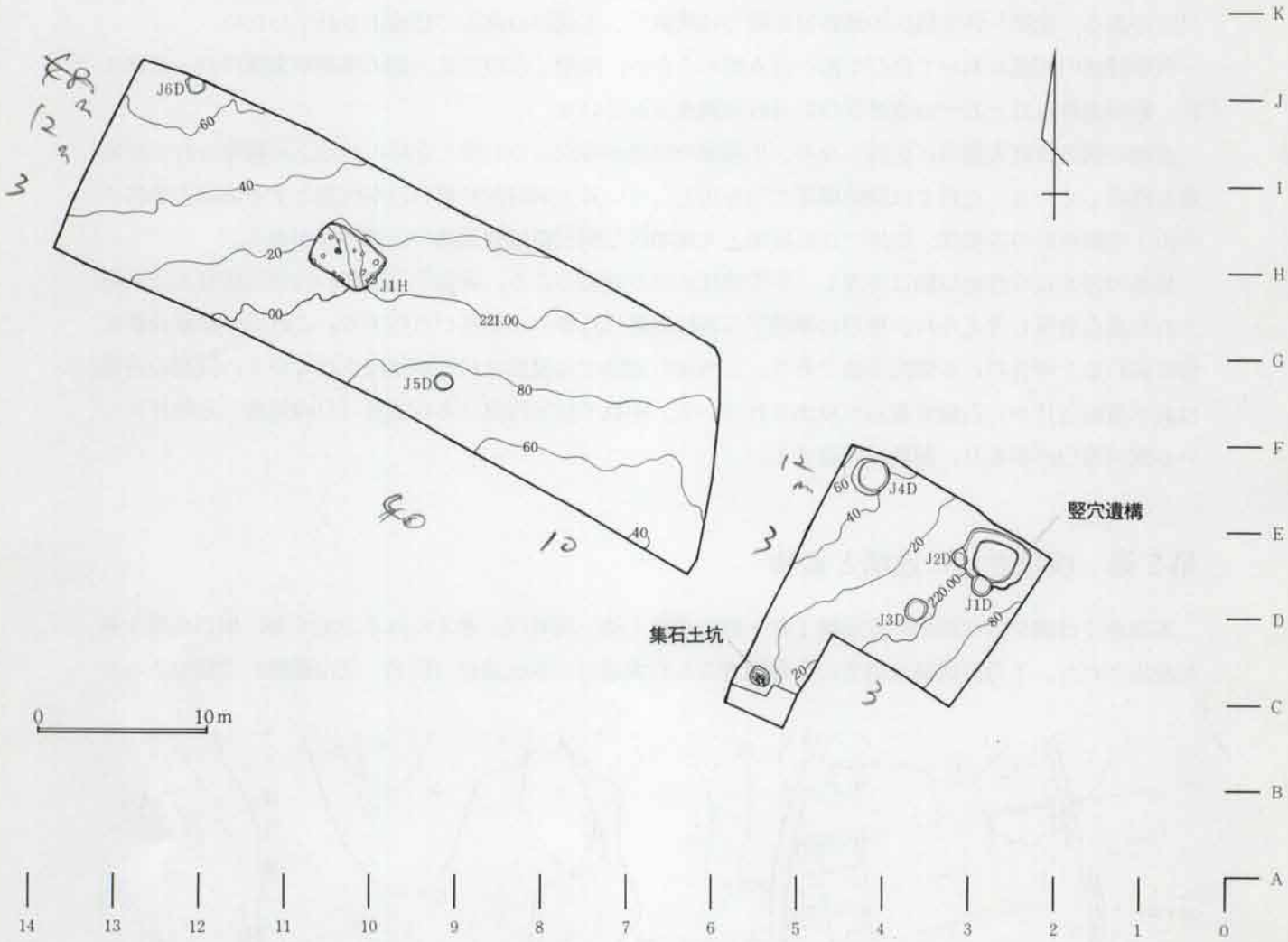
## 第2節　検出された遺構と遺物

本遺跡では縄文時代前期の住居跡1軒・竪穴遺構1基、同時代と考えられる土坑6基、集石土坑1基が検出された。1号住居跡は過去に発掘調査された堀越丙二本松遺跡（旧名　芝山遺跡）で検出された




第2図　堀越丁二本松B地点遺跡の位置図

前期二ッ木式期と同期であり、両遺跡は同一集落と推定される。その広がりは台地平坦部が東～南東方向に張り出す部分に営まれている。出土遺物は二ッ木式期の他に前期諸磯ｃ式期の土器片が竪穴遺構から出土し、同遺構から特出すべき遺物として玦状耳飾りがあった。



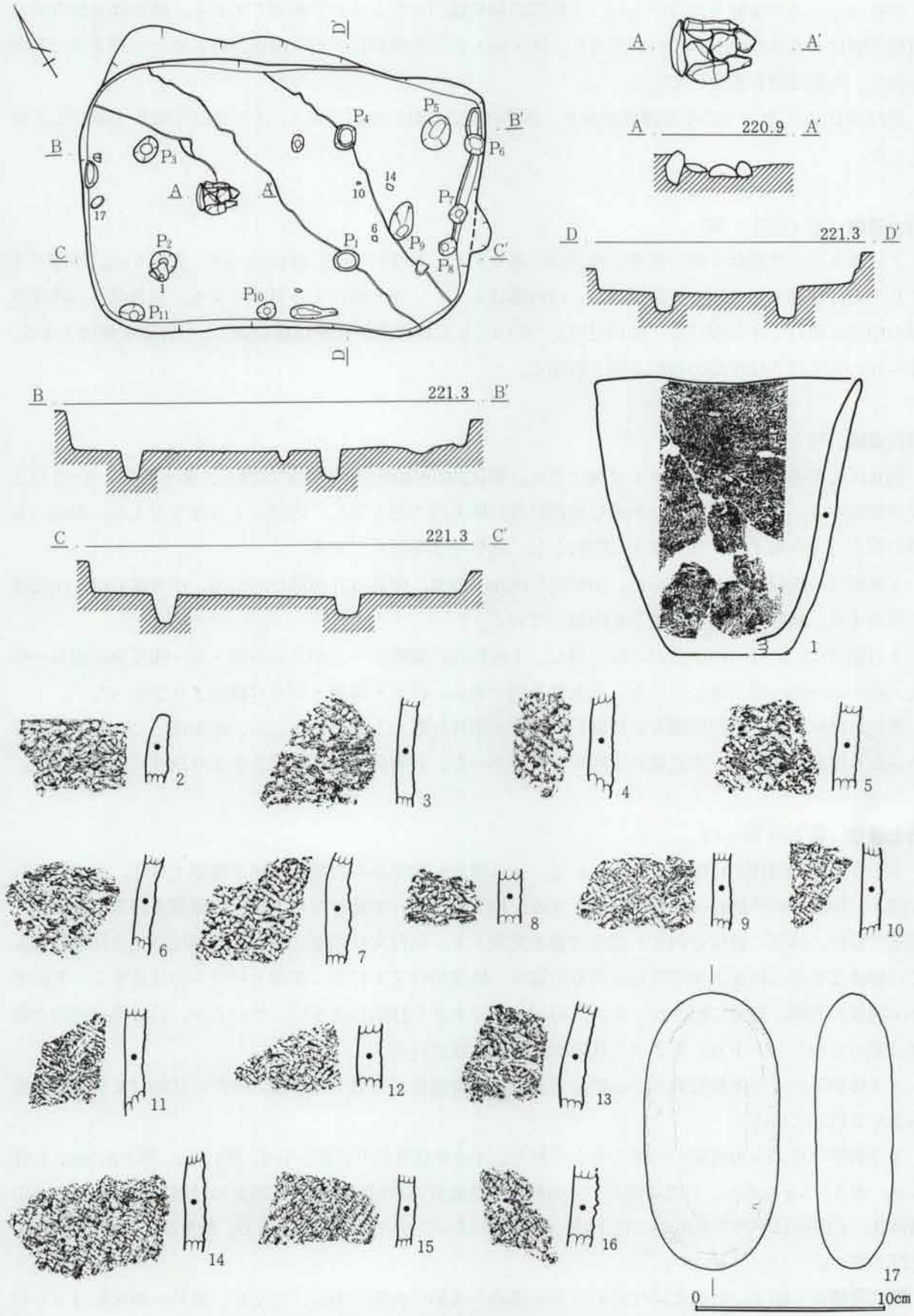

第３図　堀越丁二本松Ｂ地点遺跡全体図

**１号住居跡**（第４図）

本住居跡はH10グリットの標高221.00～221.20mの台地部にあり、緩慢な南東傾斜の平坦部に検出された。南東方向７ｍには５号土坑、北西方11mに６号土坑が位置する。

形状は東西に長い隅丸長方形を呈し、主軸はN－55°－Wにとる。規模は長軸方向が4.1m、短軸方向が2.7m前後を測る。壁高は残存の良い北西隅で45cm、他の壁高も20cm以上を測る。床面はほぼ平坦面を呈し、北西～南東の対角線方向に地割れが走行する。

柱穴状掘り込みは12ケ所に検出され、$P_1$～$P_4$の４本柱が主柱穴と考えられる。形状は20～30cm前後の円形か楕円形で深さ19～30cmを測る。柱間は$P_1$～$P_2$が1.9m、$P_2$～$P_3$が1.2m、$P_3$～$P_4$が2.1m、$P_4$～$P_5$が1.3mを測る。東壁下の$P_8$と$P_6$は、$P_1$と$P_2$、$P_3$と$P_4$のほぼライン上に存在することから、主柱穴は６本の可能性も考えられる。周溝は東辺の$P_8$から北東隅に1.4m程続き、$P_{10}$の東に細長い掘り込みを検出した。




第4図　1号住居跡・出土遺物

炉跡は中央のや西寄りに設けられ、主柱穴の対角線の交点よりやや西寄りである。構造は長軸方向の東側が開口するコの字形石囲い炉である。西・南・北方の縁石は一石で構成され、各々の長さ22～30cmを測り、内部は五石を敷いている

遺物は$P_2$の上面に１の小型深鉢があり、北壁の中央付近に磨石がある。その他は小破片で散在して出土した。

**出土遺物**（第４図１～16）

１は無文の小型深鉢土器で底部と体部の一部を欠く。口径13.6cm、器高14.5cm、底径６cm。体部下半より上方に連れてやや開く筒形を呈し、口唇部は丸くし、部分的に尖り気味とする。口唇部から体部外面の中位にかけて半分程に炭化物が付着している。２の口縁部片は平口縁を呈し、口唇部を角状とする。３～16の大半は０段多条の結節を施す胴部片。

**竪穴遺構**（第５図）

調査区の東方隅、Ｄ２グリットに検出され、標高220m前後の平坦部に位置し、南と西辺に１・２号土坑が重複する。形状は南東部分が歪む東西に長い隅丸長方形を呈し、内部にすっぽりと入り一段低い方形の掘り込みを有する。外形を１号竪穴とし、内形を２号竪穴とする。

１号竪穴の規模は長軸長3.85m、短軸長3.05mを測り、壁高は北西部分が37cm、南東部分は７cm前後が残存する。底面は北西部～東方が内傾している。

２号竪穴は2.3～2.4m前後の方形を呈し、１号竪穴の壁面立ち上がりから東・北・西部分が幅40～60cm、南が15～25cm幅を有している。底面は平坦である。柱穴・周溝・炉跡は検出されなかった。

遺物は僅かであり、前期後半の諸磯Ｃ式期の土器片が覆土上層から出土し、中央部分の一段低い掘り込みから前期前半の二ッ木式期の土器片１点があつた。石製品としては覆土中より玦状耳飾りが出土。

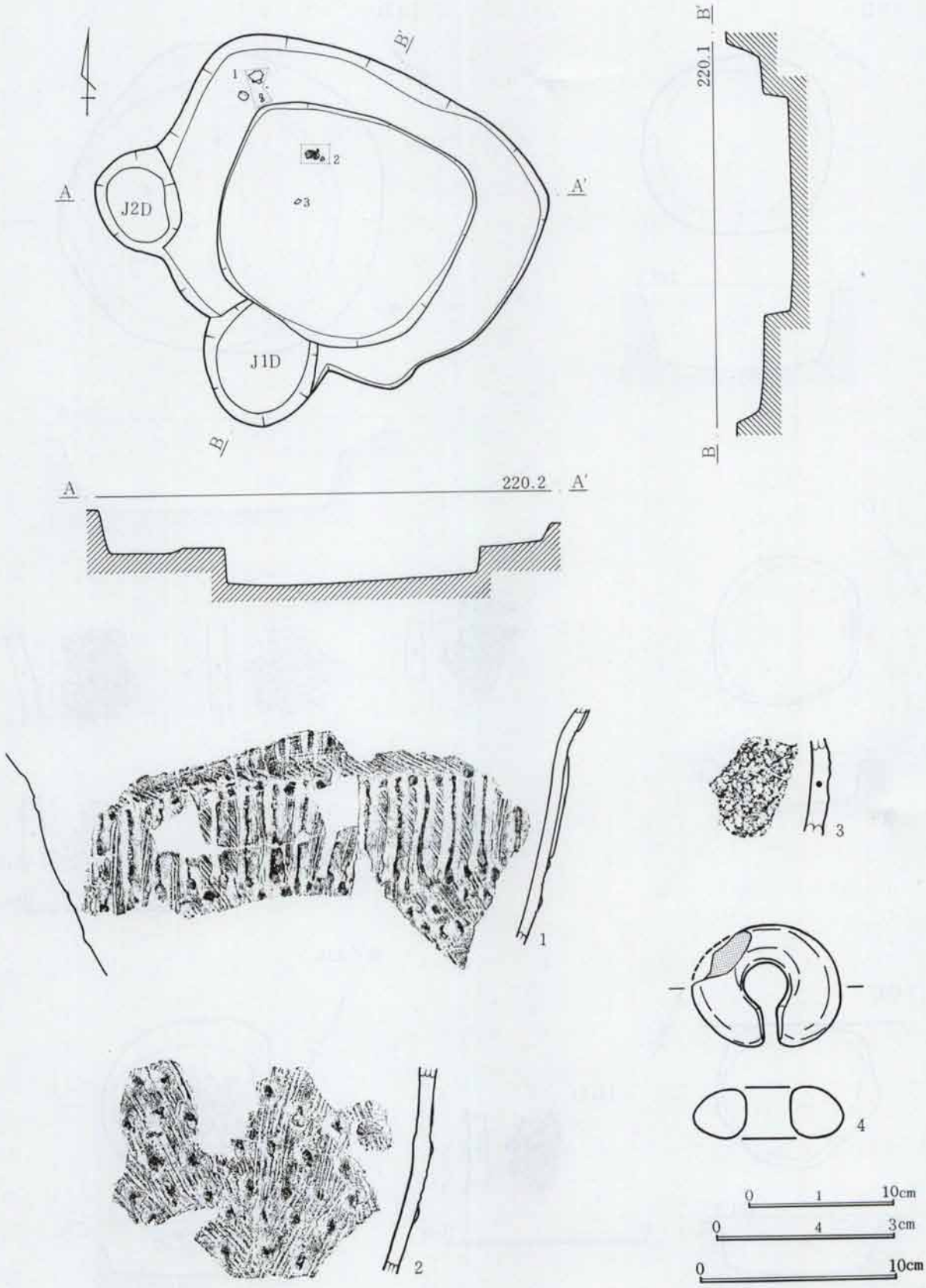
**出土遺物**（第５図１～４）

１と２は同一個体の可能性が考えられる。１は僅かに頸部から口縁部が係る体部上半片。上方に連れて開き、頸部でやや括れて口縁部は外反する。幅３㎜ほどの半截竹管により、口縁部文様帯には横位、頸部に斜位、体部に縦位と斜位の集合沈線を充塡する。貼付文は頸部に施された斜位の集合沈線を挟んで口縁部文様帯と体部上半に断面三角形の縦長の棒状貼付文を付す。体部上半のものは長さ７～８cmで２cm前後の間隔に縦位に配され、その間隔の上下にボタン状貼付文を付しているが、口縁部文様帯の間には認められない。下方にもボタン状貼付文が付されている。

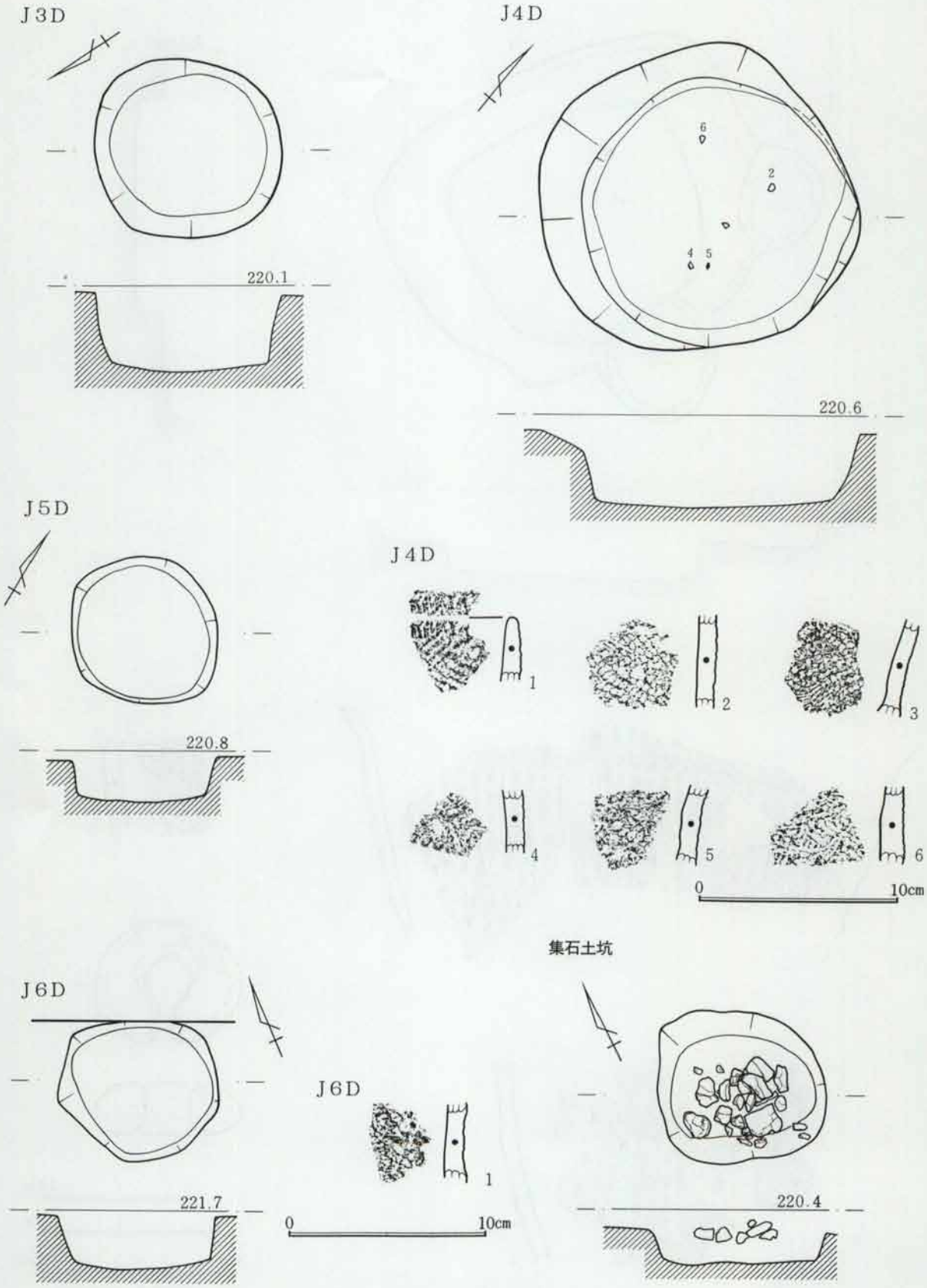
２は体部下半片で半截竹管による縦位と斜位の集合沈線が充塡された後、ボタン状貼付文を比較的整列させて付している。

３は胴部片は二ッ木式期の所産と考えられる。４の玦状耳飾りは縦2.1cm、横2.5cm、厚さ8.5㎜、孔径８㎜、重さ5.5ｇを測り、石質は滑石。平面形はやや横長の楕円形を呈し、断面形は厚みのある下膨れの蒲鉾状。孔内面は平滑で垂直的に仕上げ、全体的にぽってりとした形態である。表面は丁寧に研磨され、光沢を放つ。

竪穴遺構から出土した縄文時代前期後葉の諸磯ｃ式期の所産である１と２は、縦長の棒状貼付文を付す事から今村編年（2000 今村）の諸磯ｃ式の新段階１期＼群馬Ｄ期に該当し、当町では同期のものが上




第5図　竪穴遺構・出土遺物




第6図　土坑・集石土坑と出土遺物

大屋・樋越遺跡群（1986 山下）で検出されている。玦状耳飾りは、横沢新屋敷遺跡（1997 藤坂）から出土し、前期二ッ木式～諸磯ｃ式期間の所産と考えられる。

《土　坑》

**1号土坑**（第5図）

調査区の東方Ｄ２グリットに検出され、竪穴遺構の南辺に重複する。形状は南北に長い楕円形を呈すると考えられ、長軸長の推定1.5m、短軸長1.2m前後を測る。壁高は25cm前後が残存し、底面はほぼ平坦である。出土遺物は皆無であった。

**2号土坑**（第5図）

調査区の東方Ｄ３グリットに検出され、竪穴遺構の西辺に重複する。形状は南北に長い楕円形を呈し、長軸長1.05m、短軸長83cmを測る。壁高は残存の良い西方で44cmを測る。底面は平坦を呈する。出土遺物は皆無であった。

**3号土坑**（第6図）

調査区の東方Ｃ・Ｄ３グリットに跨がって検出され、標高220.10m前後の平坦部にあり、竪穴遺構の南東３ｍに位置する。形状は隅丸方形気味の円形を呈し、南北長1.3m、東西長1.25mを測る。壁高は45～51cmが残存する。底面はほぼ平坦である。出土遺物は皆無であった。

**4号土坑**（第6図）

調査区の東方Ｅ４グリットに検出され、標高220.50m前後の平坦部にあり、竪穴遺構の北西６ｍに位置する。形状は1.8m前後の円形を基調とし、西方部で壁面の上位から最大35cmほどが開口する。壁高は41～61cmを測り、底面は平坦を呈する。遺物は覆土中から土器の小片が８点出土した。

《出土遺物》

１は緩やかな波状口縁を呈すると考えられる口縁部片。口唇部は丸く、内外面端部に交互状とする浅い爪形文を刺突する。地文は０段多条のＬＲとＲＬを施す。２の胴部片は０段多条のＬＲとＲＬを羽状に施す。３は底部から直立気味とする胴部下半片で、底部～下半に貝殻背圧痕文、その上位に０段多条のＬＲとＲＬを羽状を施す。４の地文は不明。５は０段多条を施す。

**5号土坑**（第6図）

調査区の中央付近Ｆ９グリットに検出された。標高220.50m前後の平坦部にあり、１号住居跡の南東6.5mに位置する。形状は東西がやや突出する楕円形を呈し、長軸長1.13m、短軸長１ｍを測る。壁高は21～26cmが残存する。底面はほぼ平坦である。出土遺物は皆無であった。

**6号土坑**（第6図）

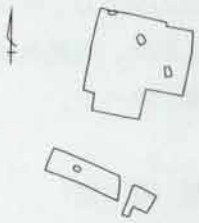
調査区の北西隅のＪ12グリットに検出された。標高221.70m付近の平坦部にあり、１号住居跡の北西10.5mに位置する。形状はやや東西に長い歪んだ楕円形を呈し、長軸長1.1m、短軸長95cm前後を測る。壁高は26～32cm底面はほぼ平坦である。出土遺物は僅かに１点の胴部片で、０段多条を施す。

**集石土坑**（第６図）

調査区の南東、拡幅部分Ｃ５グリットに検出され、標高220.30m付近の平坦部に位置する。形状は東西方向に長い隅丸方形気味を呈し、長軸長1.15m、短軸長1.05m前後を測る。壁高は20cm前後が残存し、底面はやや凹凸のある平坦面を呈する。集石は覆土上面の中央から西辺よりにあり、20cm程の角張った礫を中心に集中する。出土遺物は皆無であった。

## 第３節　成果と課題

昨年の12月に縄文時代研究会の主催による「列島における縄文時代集落の諸様相」が開催され、群馬県における縄文時代集落の諸様相（2001 大工原他）では、二ッ木式期に後続する関山式期の集落構造を西毛地域の事例を検討している。「２～３棟程度が同時並存する小規模な集落であり、基本構造は直線的（列状集落）であり、この現象は県内全域で見られる当期の特徴」とした。これらを踏まえ住居跡の分布図から二ッ木式期の集落構造を検討してみたい。



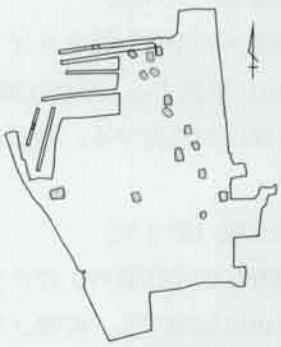
第７図　堀越丁二本松Ｂ地点

本遺跡では縄文時代前期前葉の二ッ木式期と考えられる住居跡１軒と同期の土坑等が検出された。当町では過去に同期の発掘調査事例が堀越丙二本松遺跡（1996 山下他）、横沢新屋敷遺跡（1997 藤坂他）、堀越中道遺跡（1997 山下）の３例がある。

本報告の堀越丁二本松Ｂ地点遺跡の北方に隣接する堀越丙二本松遺跡でも同期の住居跡が３軒検出されており、同集落の一部として捕らえられる。遺跡は標高223m前後の台地上に位置し、平坦部から東方への傾斜変換部付近に住居跡があり、15m程の間隔に一列に配されている。住居跡の平面形は長方形を呈し、主柱穴は長軸に沿って６本であり、壁に沿って補助的な柱穴が連続する。炉は中央より北寄りにあり、南方が開口するコの字形の石囲い炉である。今回検出された１号住居跡は長軸方向が東西気味にとり、主柱穴は４本と考えられ、壁沿いの柱穴も連続しないが、炉は一方が開口するコの字形の石囲い炉である。

第８図　横沢新屋敷遺跡

横沢新屋敷遺跡は、本遺跡の西方600mで寺沢川右岸の標高230.50m前後の台地上に位置する。台地は南北に走行し、幅60m程の平坦部に花積下層式期～二ッ木式期と諸磯式期の住居跡が計26軒検出された。花積下層式期の住居形態は円形気味を呈し、地床炉とする。二ッ木式期では方形～長方形を呈するものが多く、主柱穴は長方形のものが６本である。炉はコの字形の石囲い炉であり、中央部分か北寄りにある。住居跡の分布は、20～30m前後の楕円形の空間部を取り巻いて半径40m前後の範囲に環状を成して住居跡が分布するが、具体的に見ると東方で４棟前後の３グループが弧状に分布し、西方では列状に分布している。



第９図　堀越中道遺跡

堀越中道遺跡は、本遺跡の南東約700mで薬師川左岸の標高は200m前

後の台地上に位置する。台地は南北に走行し、幅120m程の平坦部に二ッ木式期の住居跡が17軒検出された。住居跡の平面形は長方形を呈し、主柱穴は長軸に沿って4～6本であり、壁に沿って補助的な柱穴が連続するものとないものがある。炉は中央より北寄りにあり、南方が開口するコの字形の石囲い炉が大半である。住居跡の分布は東方が2～3棟程が並列状に連なり、明確ではないが半径25m前後の空間部を取り巻いて西・南・北には環状気味に点在する。

これらの結果から、二ッ木式期の住居跡は平面形が長方形で主流を占め、主柱穴は2～6本であるが長方形のものは6本柱が大半であり、この6本柱を有するものは壁沿いに補助的な柱穴が連続する。炉は一方が開口するコの字形の石囲い炉が主体である。これらの要素は後続する関山式期に引き継がれる。集落構造は、横沢新屋敷遺跡と堀越中道遺跡では中央部分に空間があり、前者では西方、後者では東方が列状となっている。横沢新屋敷遺跡と堀越中道遺跡は住居跡の分布から最低でも二時期が想定され、その結果が環状集落の様相を呈する分布となったのかは今後の課題である。

**《参考文献》**


1987　山下歳信　甲諏訪遺跡発掘調査報告書Ⅰ　大胡町埋蔵文化財発掘調査団

1994　藤坂和延・山下歳信　大胡西北部遺跡群　乙西尾引遺跡他「県営ほ場整備事業大胡西北部地区」に伴う埋蔵文化財発掘調査報告書―第1集―　大胡町教育委員会

1996　山下歳信・藤坂和延　堀越芝山遺跡「大胡町総合運動公園」建設に伴う埋蔵文化財発掘調査報告書　大胡町教育委員会

1996　山下歳信　上大屋・樋越地区遺跡群　主要地方道、前橋・大間々・桐生線（大胡バイパス）建設の事前埋蔵文化財発掘調査報告書　大胡町教育委員会

1996　山下歳信　新畑C地点遺跡　大胡町教育委員会

1997　藤坂和延他　大胡西北部遺跡群　横沢新屋敷遺跡「県営ほ場整備事業大胡西北部地区」に伴う埋蔵文化財発掘調査報告書―第2集―　大胡町教育委員会

1997　山下歳信　大胡西北部遺跡群　堀越中道遺跡「県営ほ場整備事業大胡西北部地区」に伴う埋蔵文化財発掘調査報告書―第3集―　大胡町教育委員会

1998　藤坂和延　大胡西北部遺跡群　堀越西一丁田遺跡「県営ほ場整備事業大胡西北部地区」に伴う埋蔵文化財発掘調査報告書―第4集―　大胡町教育委員会

1998　山下歳信　大胡西北部遺跡群　横沢向田遺跡他「県営ほ場整備事業大胡西北部地区」に伴う埋蔵文化財発掘調査報告書―第5集―　大胡町教育委員会

2000．5　今村啓爾　「諸磯c式の正しい編年」土曜考古　第24号　土曜考古学研究会

2001　山下歳信・水谷貴之　大胡西北部遺跡群　横沢向山B地点遺跡「県営ほ場整備事業大胡西北部地区」に伴う埋蔵文化財発掘調査報告書―第6集―　大胡町教育委員会

2001．12　大工原豊他　「列島における縄文時代集落の諸様相」群馬県における縄文時代集落の諸様相　縄文時代文化研究会第1回研究集会

# 第Ⅳ章　大胡神社前遺跡

## 第１節　位置と歴史的環境

群馬県の中央部に聳える赤城山の南麓に位置する大胡町は、古代に於いては「大胡臣」、中世では源頼朝の御家人として活躍した「大胡氏」の中心的居住地として知られ、現在の町名に「大胡」が継承されている。

県指定史跡である大胡城跡は荒砥川の右岸の丘陵部に構築され、戦国時代～近世初期の様相を留めている赤城南麓を代表する名城である。戦国期までは大胡氏の居城とし、天正18年（1590）には牧野康成公が大胡藩二万石の城主として入城され、子供の忠成の二代に渡り居城した。

城跡は南北に伸びる台地上に北から大胡神社のある近戸曲輪、大胡幼稚園の敷地である北城（越中屋敷）、県指定部分の本丸・二ノ丸、テニスコートに使用されている三ノ丸、大胡町役場のある南曲輪を配し、各曲輪を堀切りで区切る並郭式の構造である。

大胡城跡の最北に位置する近戸曲輪は、近戸大明神が鎮座した事から命名された名称である。丘陵部の北辺には堀切りが巡り、土橋が設けられている。東辺は急峻な崖となり荒砥川低地にのぞみ、西辺下には風呂川が流下している。南方は幅20m前後の腰曲輪状の平坦部があり、現在の民家がある。

堀切りの一つと考えられる大胡神社と大胡幼稚園の間の低地を縫う様に走行するのが、町道堀越・上大屋線（旧名称　町道根古屋・新田・内出線）である。東は荒砥川に直交し、西は風呂川(註1)を渡河して養林寺の裏に続いている。現道路の道路幅は５ｍであるが、以前は道幅も狭く低いと聞いている。

大胡神社前遺跡は現道路の北側に拡幅される部分で、大胡神社の南参道の東西脇の部分に位置し、西方より風呂川に架けられた堀合橋から登坂宅（以後、Ａ地点）と星野宅（以後、Ｂ地点）の敷地内、南参道、登坂宅から中村宅の敷地の一部が該等する。試掘調査により参道の西側部分に遺構を確認したが、東方は埋土が２ｍ以上に盛られ下層には荒砥川による河川堆積層が続いていた。

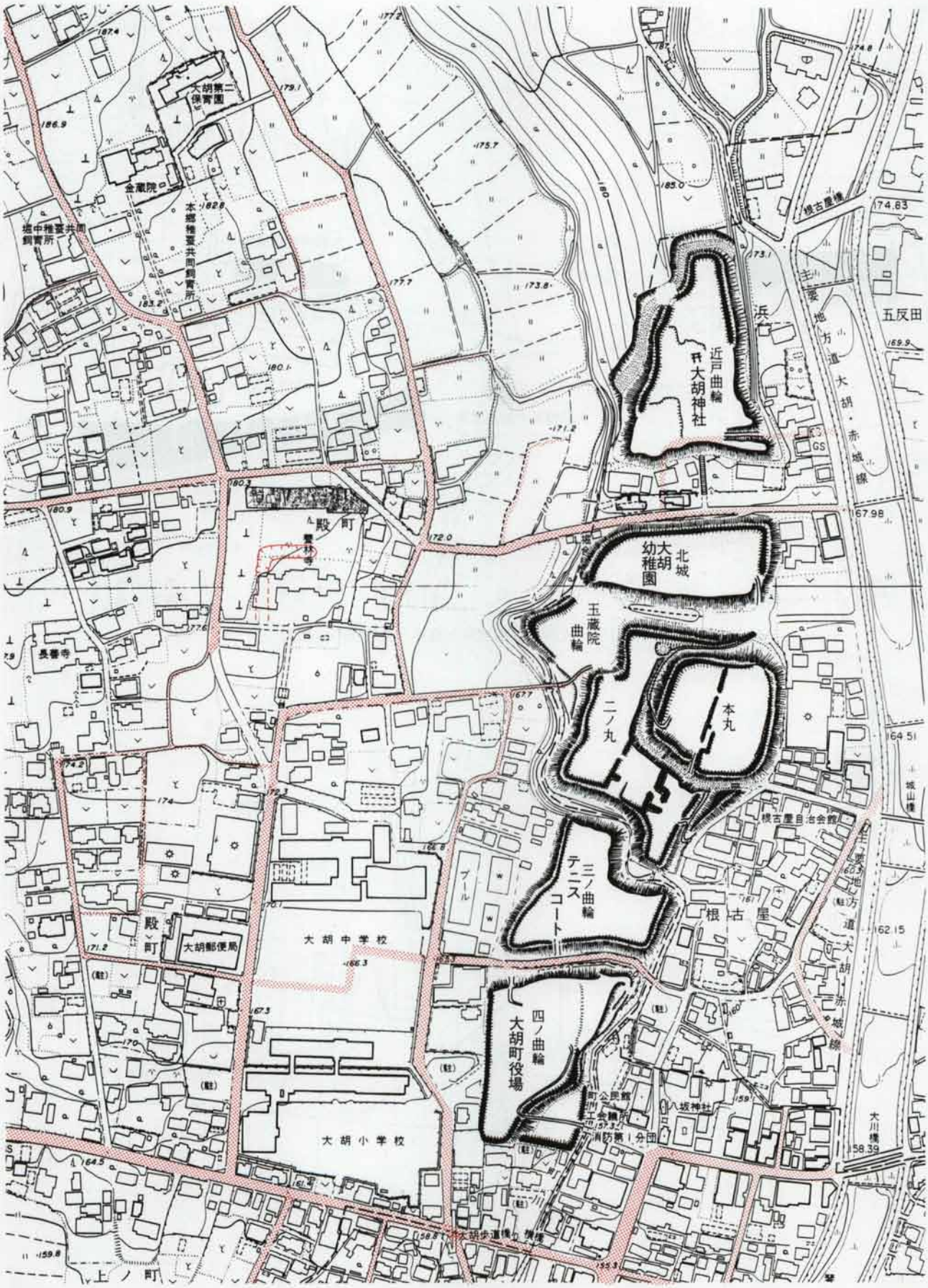
神社の南面にある各家は二段構築に造成され、搬路（馬入れ）は南東方向に設けられている。道路に接する部分は50㎝前後に盛土され、南北幅６～８ｍの南平坦面と母屋部分のある北側の高い部分の北平坦面で構成され、その区画には２ｍ前後の石垣で区画されている。そして母屋の裏手は県指定の急傾斜地であり、８ｍほどの比高差となる急峻な崖となり、近年に防護壁が設けられた。

風呂川に架けられた堀合橋の東部分には、Ａ地点の西から北城の北西部分に大きく湾曲する箇所が見られる。この部分には水車(註２)が設けられていた。

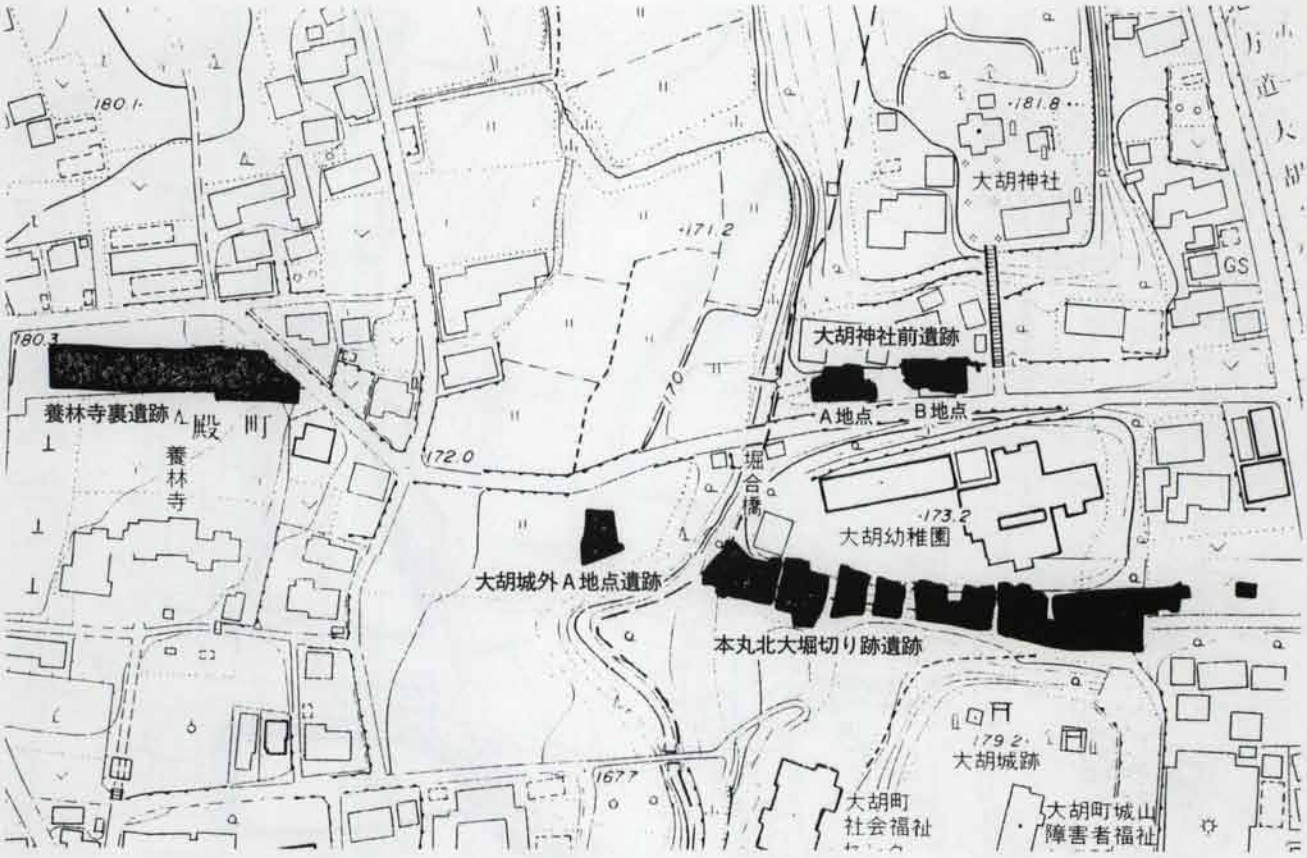
発掘調査を実施したＡ地点は、登坂家の敷地に該当する。東方は星野家と接し、Ｂ地点の間に登坂家の馬入れがある。西方は直角に削り出された平坦部が風呂川に接する。南方は道路敷との境界を石垣で区画して６ｍ幅の平坦部を設けている。この平坦部と北方の一段高い母屋部分の平坦部の境には高さ２ｍ程の石垣を構築している。家の裏手は県指定の急傾斜指定地となり、石積の防御壁がある。

Ｂ地点は星野家の敷地に該当する。東方は大胡神社の南参道に接し、南東に当家の馬入れを設けている。西方は登坂家と接する。南方は道路面との境界を石垣で区画して登坂家と同様に二段の平坦部としている。母屋の裏手も県指定の急傾斜指定地であり、二段の防御壁が構築されている。

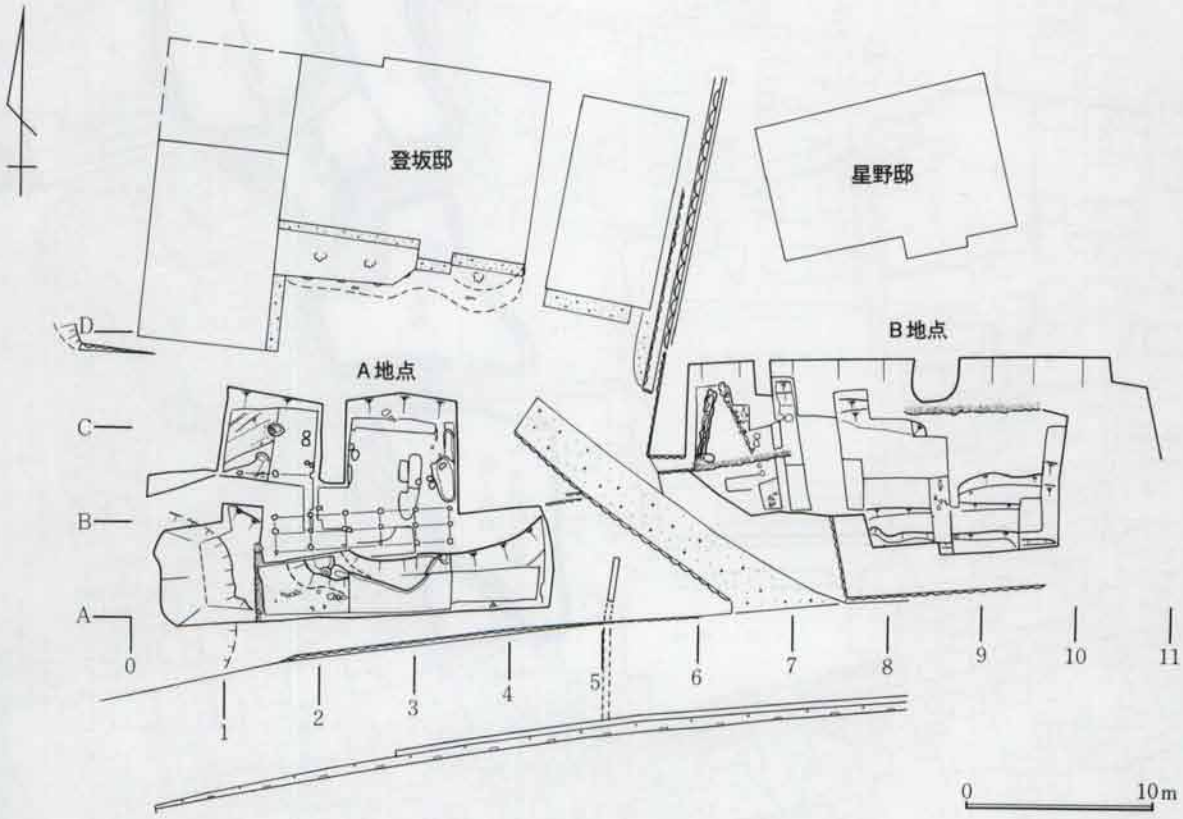
（註１）　風呂川は、宮城村から大胡町に入った所に「虎ケ堰」を設けていることから、虎ケ堰用水として扱われていた




第10図　大胡城跡周辺図




第11図　大胡神社前遺跡と養林寺裏遺跡の位置図




第12図　大胡神社前遺跡全体図

が、河川改修工事に伴い横町川と命名された。地元では水車がある川から車川や荒砥川の西の川から西川と呼ばれていたが、本稿では大胡城絵図（前橋市立図書館蔵）に書かれている風呂川の名称を使用する。

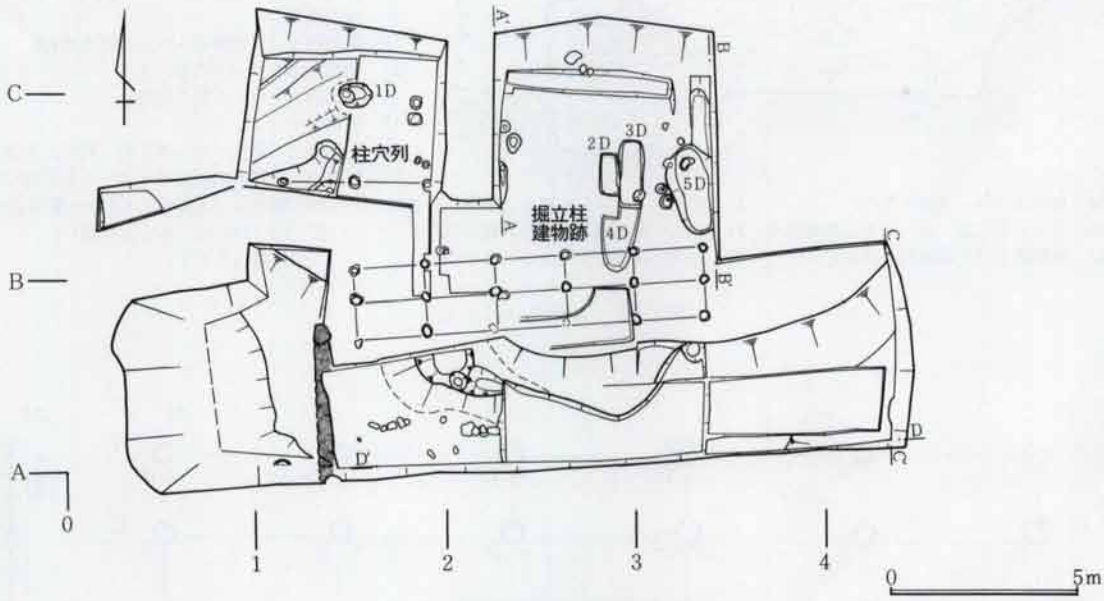
（註２） 風呂川には、三つの水車があった。その一つが堀合橋にあることから「堀合水車」と呼ばれていたが、昭和22年の水害で流失した。

## 第２節　Ａ地点遺跡

### (1) 検出された遺構と遺物

母屋の南面に２ｍ程の高さに積まれた石垣に直交するセクションベルト（第14図）で観察される様に、石垣までを北方向からの人為的な埋め土が1.6mの厚さである。その下部に水平堆積の整地層が二枚見られることから、新旧二時期以上が考えられる。

遺構は大きく整地面で構成される平坦部と低地部分に分かれる。平坦部には礎石建物跡・柱穴列・土坑・溝跡が検出され、低地部分には堀底道跡と石積が存在した。




第13図　Ａ地点遺跡全体図

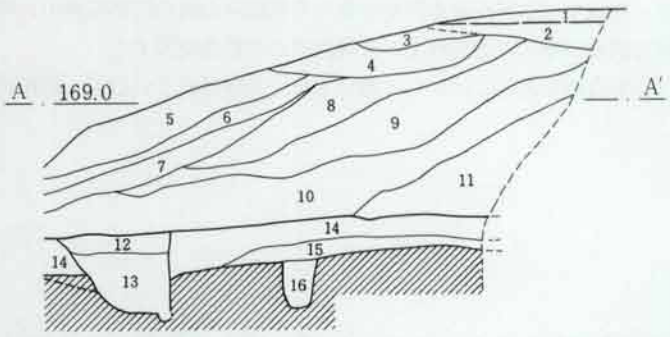
**掘立柱建物跡**（第16図）

平坦部のほぼＡ１～Ａ３グリットに跨がって検出され、南方で堀跡に接する付近に位置する。$P_{14}$が４号土坑との重複関係から、当遺構が新しい。

形状は東西９ｍ×南北1.8mと細長く、主軸をＮ－86°－Ｅにとる桁行５間、梁行２間の総柱の礎石建物跡である。礎石は$P_3$と$P_4$が失われ、$P_6$に伴う礎石が移動していると考えられる。柱間は東西1.8m、南北90cmを測る。柱穴は、礎石の形状に合わせて掘り込まれている。礎石に使用されている河原石は20cm前後の偏平な円礫を使用している。出土遺物は、$P_{16}$の脇に擂鉢片（No.12）が出土した。

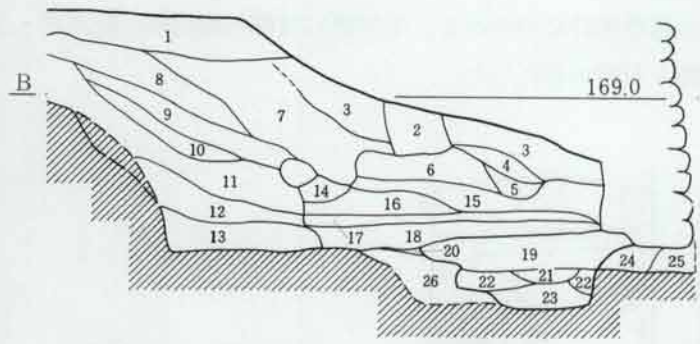
**柱穴列**（第17図）

平坦部のＢ１グリットの南に検出された。ほぼ東西に主軸をとり、柱間は1.8mを測る。柱穴は円形を呈し、径30cm前後、深さ30cmを測る。



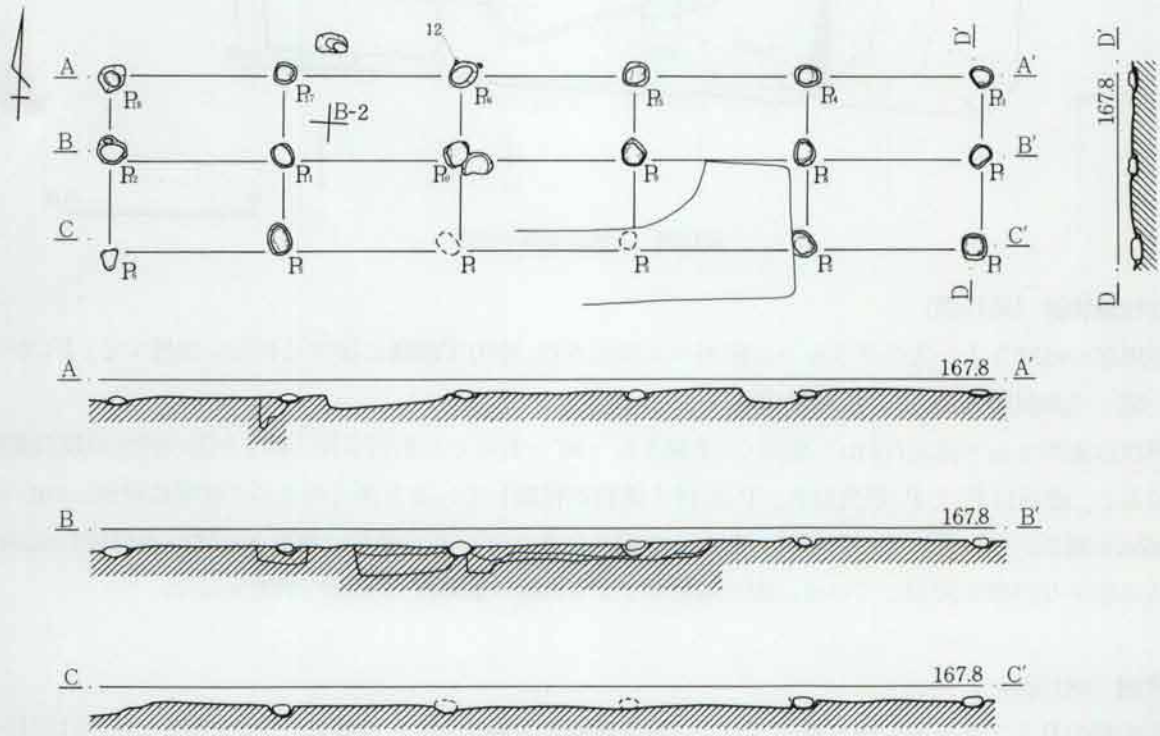

平坦部南北セクション（A－A'）
1・2　整地土　3　ローム土　4　黒褐色土
5　褐色土（大胡軽石・ロームBを含む）
6　黒褐色土（大胡軽石を多く含む）
7　黒褐色土（ロームBを含む）
8　暗褐色土（大胡軽石・ロームBを斑点状に含む）
9　暗褐色土（ロームBを含む）
10　褐色土（大粒のロームBを多量に含む）
11　灰褐色土（大胡軽石を多量に含む）
12　灰褐色土（ローム粒を含む）
13　暗灰褐色砂質土（ロームB・小砂利を含む）
14　灰褐色砂質土（褐色土・ロームBを含む）
15　灰褐色土　16　褐色土

第14図　土層図（A－A'）

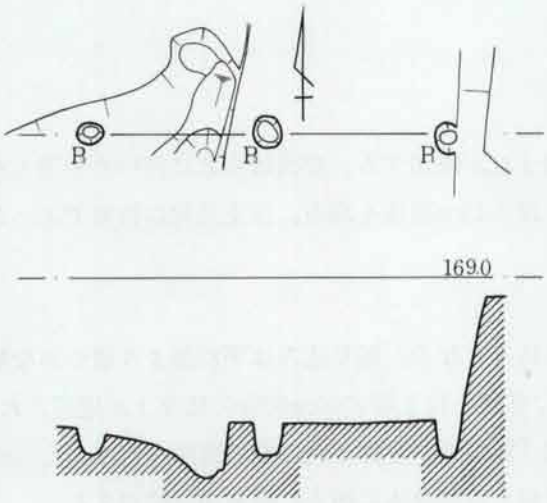



平坦部南北セクション（B－B'）
1　整地土　2　カクラン
3・7　褐色土（ロームBを多く含む）
4　褐色土（大胡軽石を多く含む）
5　暗褐色土　6　褐色土
8　褐色土（大胡軽石・ロームBを含む）
9　暗灰褐色土
10　黒褐色土（大胡軽石・ロームBを含む）
11　暗褐色土とロームの混合土
12　灰褐色土（ロームBを含む）
13　灰褐色土
14　暗褐色土（焼土・カーボン粒・褐色土を含む）
15　褐色土（少量の大胡軽石・ロームBを含む）
16　褐色土（ロームBを含む）　17　灰褐色土（ローム粒・大胡軽石を含む）　18　褐色土（灰褐色土・ローム粒を含む）
19　ローム土　20　ローム土と黒褐色土　21　にぶい黄褐色土（ローム粒を含む）　22・23　19のローム土より暗い
24　灰褐色土（大胡軽石を含む）　25　にぶい黄褐色土（ロームBを含む）　26　砂層（ラミナ）

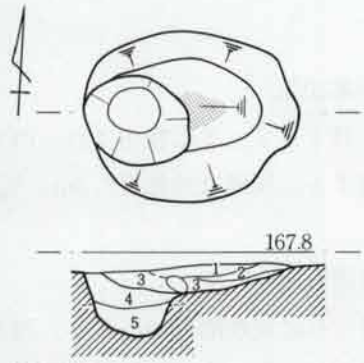
第15図　土層図（B－B'）




第16図　掘立柱建物跡

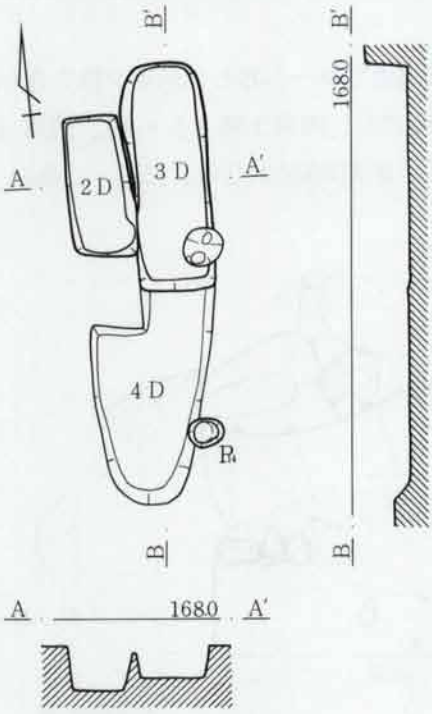



第17図　柱穴列

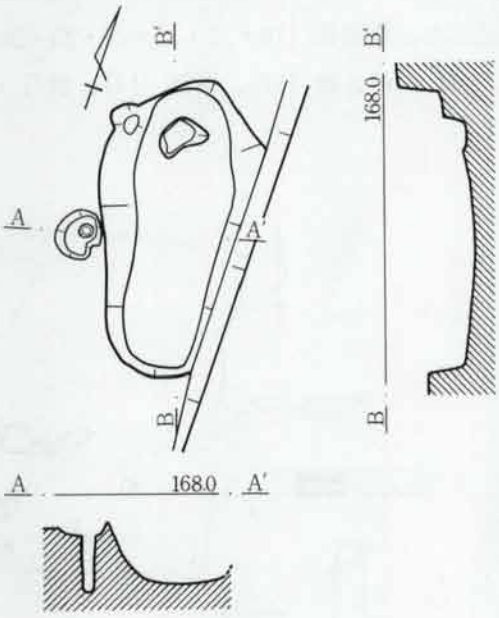



1号土坑土層説明
1　黄褐色土　2　黒褐色土でカーボン粒を含む
3　焼土と黄褐色土の混合土
4　黒褐色土とロームBの混合土　5　灰褐色砂質土

第18図　1号土坑




第19図　2～4号土坑




第20図　5号土坑

**1号土坑**（第18図）

平坦部でB１とC１グリットに跨がって検出され、南には１号柱穴列が位置する。同遺構は道路状と考えられる硬化した浅い溝状の掘り込みと重複し、北東60cmからは開元通寶（№36）が出土している。

形状は75cm前後の円形を呈し、皿状の掘り込みで最深部の中央が深さ10cmを測る。西方に40×35cm、深さ25cmの掘り込みを有する。覆土からは焼土・カーボンが含まれ、中央部分の床面には焼土面が確認されたことから、炉跡の可能性が考えられる。出土遺物は皆無であった。

**2～4号土坑**（第19図）

平坦部でB２・B３グリットに跨がって検出され、２号と３号、３号と４号が重複する。２号と３号の形状は南北に長軸をとる長方形を呈する。規模は２号が長軸長1.1m、短軸長65cm、深さ35cmを測る。３号は長軸長1.8m、短軸長50～60cm、残存の良い北壁で深さ40cm前後を測る。４号は掘立柱建物より前出の所産である。出土遺物は皆無であったが、北方に隣接して擂鉢（№13）が出土している。

**5号土坑**（第20図）

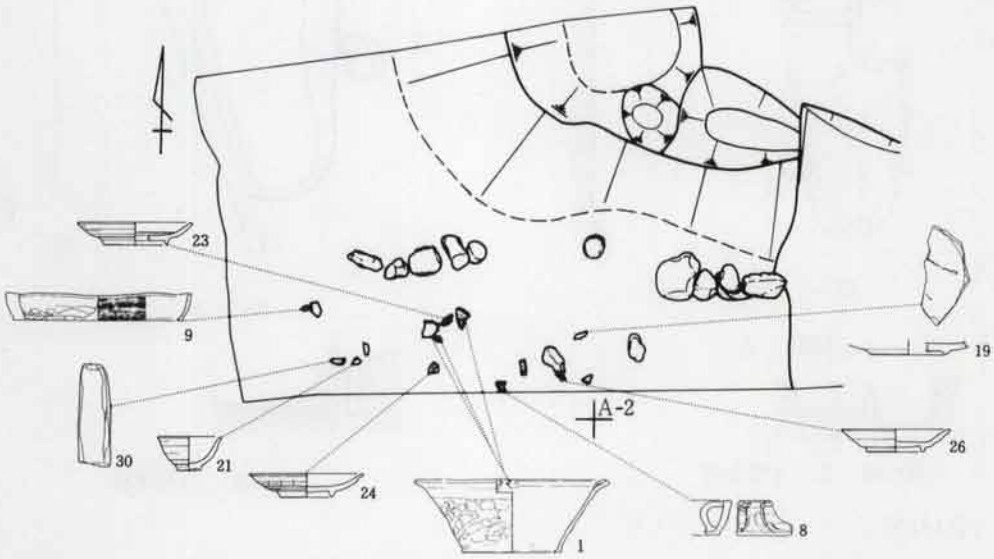
平坦部でＢ３グリットに検出され、西方に２～４号土坑が隣接する。形状は南北に長いやや歪んだ隅丸方形を呈する。規模は長軸長2.3m、短軸長1.3m、深さ45cm前後を測る。出土遺物は皆無であった。

**堀底道跡**（第21図）

形状は弓なりに東西部分が広がり、西方は深い落ち込みとなる。掘り込みは平坦部より緩やかな傾斜で南方に移行し、調査区内の南東隅で深さ90cmを測る。堆積土は上層に60cm前後の盛り土が確認される。その下層には北方からの人為的埋土が観察され、所謂「堀底道」と称される堀の底面を道路として使用された硬化面が２～３面確認された。硬化面には起伏があるが全体に西方に緩やかに傾斜する。

石積列と考えられる河原石が西方に見られる。堀の立ち上がり付近にあり、東西方向で残存する。一部に二段積が見られ、最上硬化面に伴うと考えられる。

遺物は西方に集中し、最上硬化面の上層に堆積する暗褐色土でロームＢとカーボン粒を含む埋土層から出土した。陶器皿（19・22・23・24・25・26・27）、小坏（21）、内耳土鍋（１・４）、焙烙（５・８・９）、火鉢（10）、鈕（17）、擂鉢（14）、砥石（28・29・30）、肥前陶磁器（20）、凹石と、搗臼（33・32）がある。

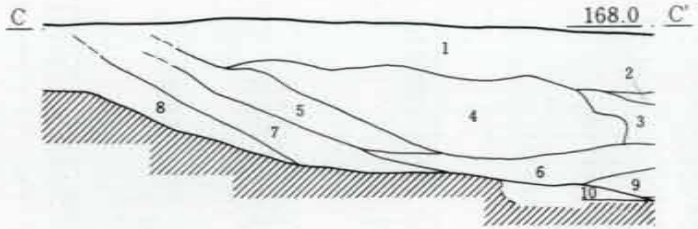



第21図　堀底道遺物出土状況

**遺物**（第24～27図１～36）

出土遺物には、内耳土鍋・焙烙・火鉢・擂鉢・火消し壺・カワラケ・陶磁器、石製品として砥石・凹石・石臼、古銭がある。

内耳土鍋は１～４がある。１は体部が大きく外反して開き鉢形の形状を呈する。内耳は小さく偏平な襷形を呈し、口縁部との透き間も僅かであり、擦れも観察できない状況から物を吊るす行為に使用されたとは考えられない。底部は薄手であり、体部との接合部分は外面が突出気味である。２の器高は１と同様の数値であるが、体部は直線的に立ち上がり、口縁部付近で開口する従来の形態を保っている。内耳は口縁部幅からも小型のものが想定される。３は古い様相を呈する内耳土鍋片で、胎土に粗石粒を多く含んでいる。口縁部幅もあり、２より大型の製品である。４は厚手の器肉を有し、体部はやや丸味を




堀底道跡東壁南北セクション（C－C'）　（註＝は（東壁）南北セクションと同じ）

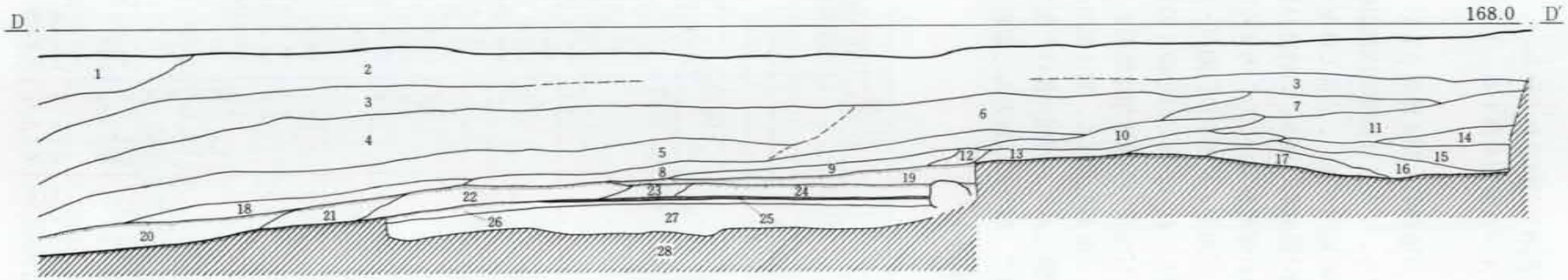
1＝2　盛土　　2＝3　黒色土　　3＝11　褐色粘質土

4・5　ロームB・大胡軽石の混合土　　6＝14　褐色粘質土（小ロームB・カーボン粒を含む）

7　褐色粘質土（ロームBを含む）　　8　褐色土

9＝15　褐色粘質土（ロームB・黒褐色土を含む）　　10＝16　褐色粘質土と灰黄褐色粘質土の混合土

第22図　土層図（C－C'）




第23図　土層図（D－D'）

堀底道跡南壁東西セクション（D－D'）

1・2　盛土　　3　黒色土　　4　黒褐色砂質土　　5　暗灰褐色粘質土　　6　灰黄褐色粘質土

7　黄褐色粘質土　　8　褐色粘質土　　9　多量のロームB　　10～12　褐色粘質土（粘質の差）

13　褐色粘質土（大胡軽石を含む）　　14　褐色粘質土（小ロームB・カーボン粒を含む）

15　褐色粘質土（ロームB・黒褐色土を含む）　　16　褐色粘質土と灰黄褐色粘質土の混合土　　17　灰黄褐色粘質土

18　褐色粘質土（ロームBを含む）　　19　灰褐色土（ロームBを含む）　　20・22　灰白色砂質土・ロームB・大胡軽石の混合土

21　灰黄褐色粘質土（ロームBを含む）　　23　暗褐色土　　24　黒褐色土・大胡軽石・灰褐色土の混合土

25　大胡軽石　　26　灰褐色土　　27　砂層とロームB・大胡軽石の混合土の互層　　28　軽石層

呈し、外面の立ち上がり部分に篦削りが施されている。

以上の４点を比較すると３と４が古様相を有する。１と２は新しい所産と考えられるが１と２の形態には大きな変化が見られる。

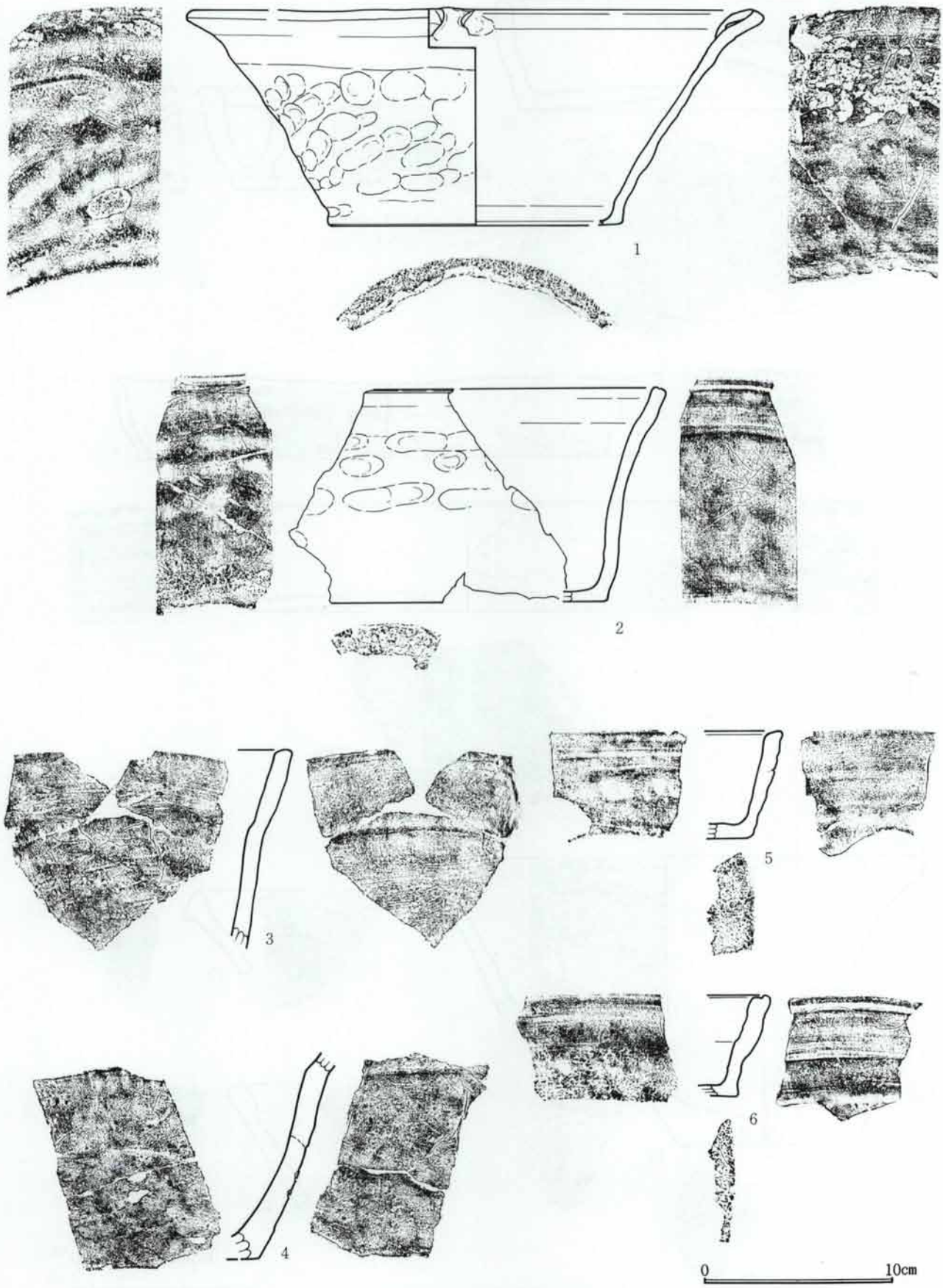
焙烙は５～９の５点ある。５は直線的に開く体部を有し、６の体部は直線的に立ち上がり、中位で内湾気味に開き、内面に段を有する。７～９は体部が内湾気味とし、８の内耳には吊り手として機能を示す擦れが観察される。９は全体に器肉が薄く、底部と体部の接合部分は土鍋の１に似る。

火鉢と考えられる№10の体部は直線的に開き、口唇部は指撫でにより浅くＵ字形に窪み、外面口端部は丸く突出する。底部には僅かに脚部を接合したと考えられる箇所が認められる。

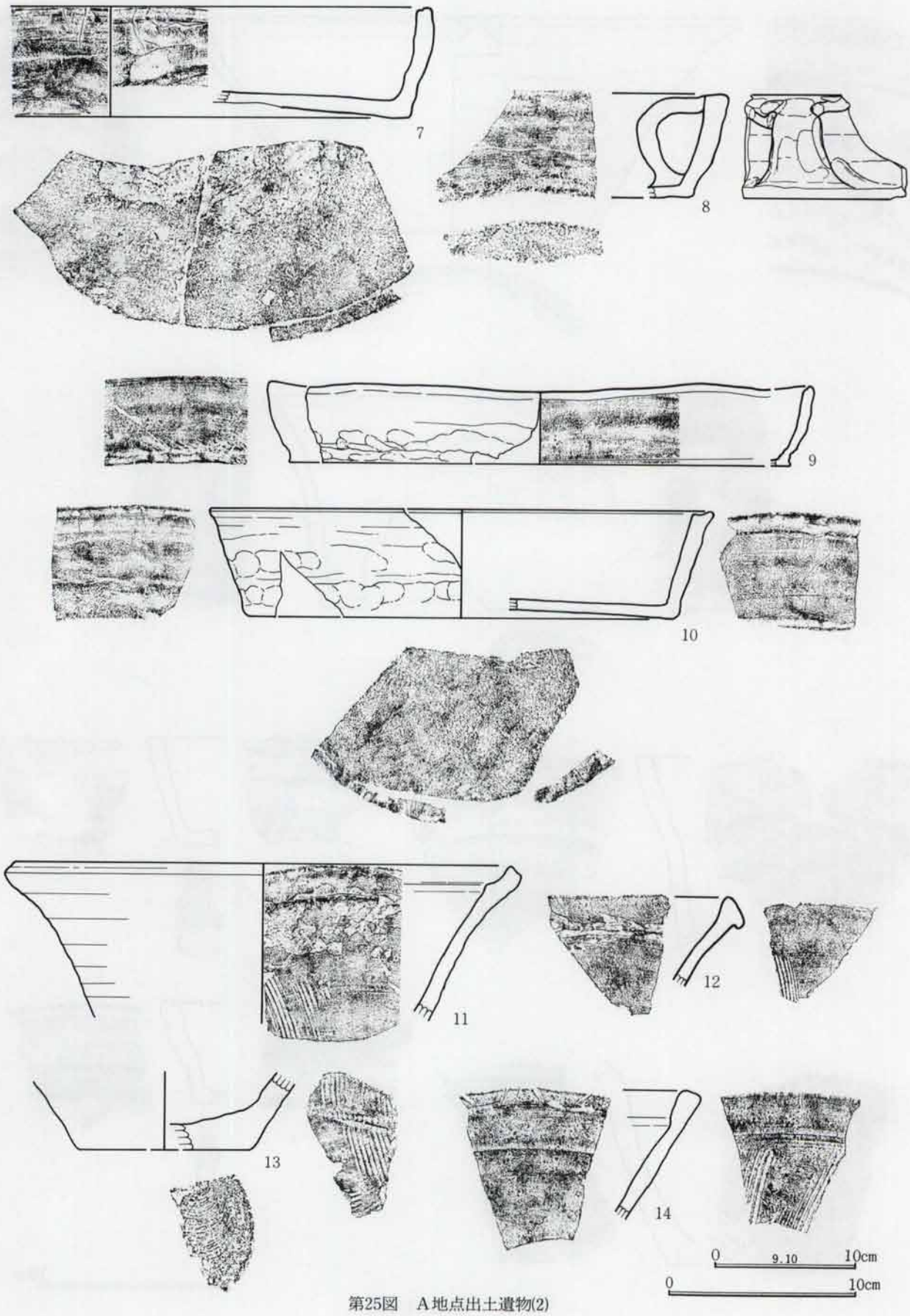
擂鉢は４点がある。11～13は平坦部より出土し、瀬戸・美濃系の大窯期と考えられ、17世紀代前後のの所産である。14は丹波系と考えられる。№15は小破片の為に全容は不明であるが、火消し壺か焜炉と考えられる。16はカワラケ片。17～27の陶磁器類は肥前系と瀬戸･美濃系に大別される。砥石（28～31）は４点が出土し、切り出しはノミ痕が見られる。32は搗臼の形態を呈するが、ヒデ鉢に使用したと考えられる。内面の仕上げは雑な調整であり、内面に煤けた部分がある。33は平面形が方形で、断面形が鉢形を呈する。34は穀物臼の下臼で、擦り目はほとんど観察されないまでに使用されている。古銭は35と36の渡来銭が二枚が平坦部より出土した。

Ａ地点出土遺物観察表

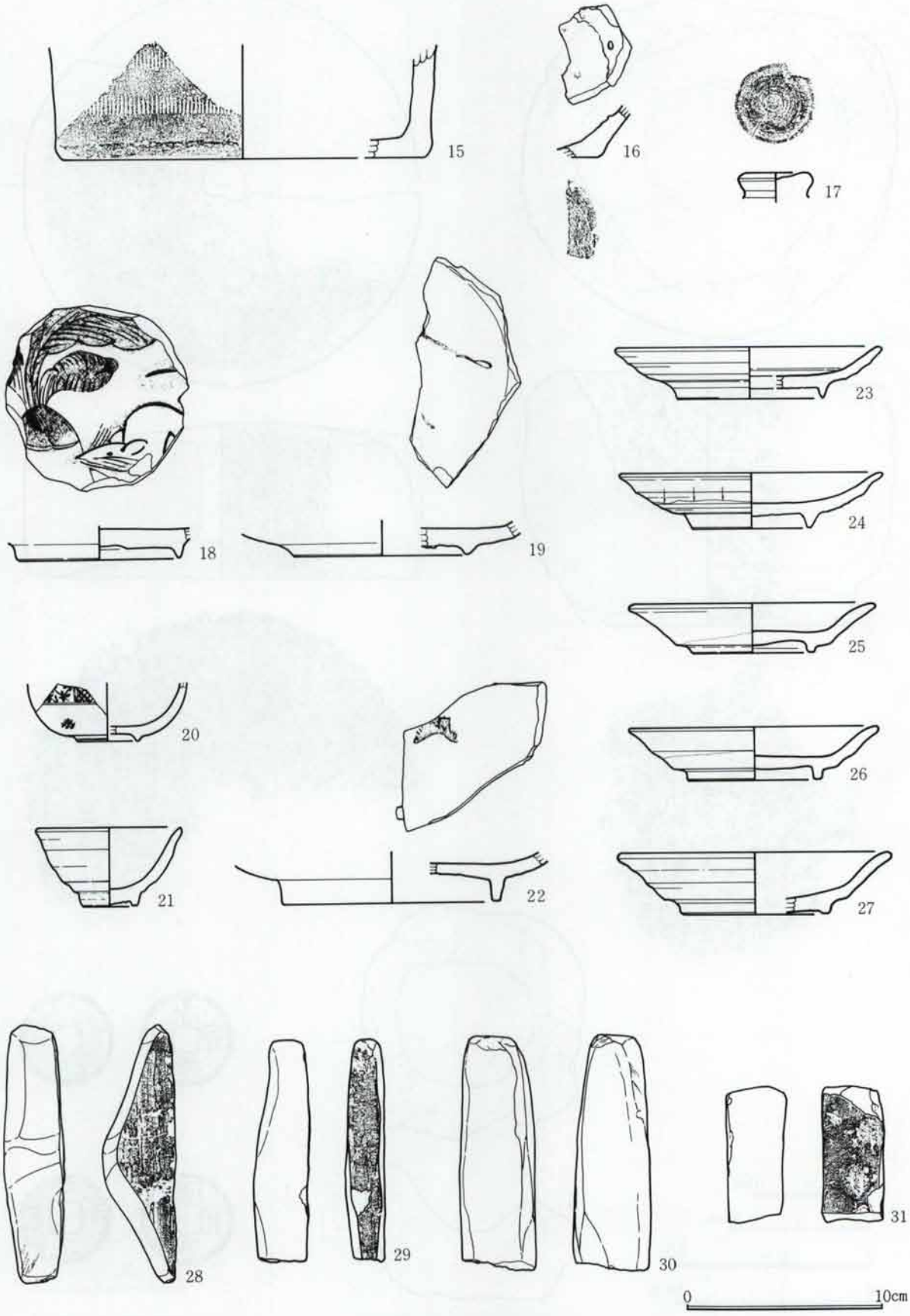
| № | 出土地 | 器種 | 口径 | 器高 | 底径 | 備考 |
|---|---|---|---|---|---|---|
| 1 | 堀底道 | 土鍋 | 30.0 | 11.6 | 15.4 | 内耳は偏平。内面上部にハガレ。外面は指頭圧痕とタール付着。 |
| 2 | 平坦部埋土 | 土鍋 | | (11.4) | | 外面中位に指頭圧痕、外面中位までタールとスス付着 |
| 3 | 堀底道 | 土鍋 | | | | |
| 4 | 堀底道 | 土鍋 | | | | |
| 5 | 堀底道西 | 焙烙 | | 5.7 | | |
| 6 | 堀底道 | 焙烙 | | 5.3 | | |
| 7 | 堀底道東 | 焙烙 | (34.0) | 5.9 | (32.0) | |
| 8 | 堀底道西 | 焙烙 | | 5.5 | | 内耳には吊り具による擦れ、底部～外面立ち上がり部分はチヂミ痕 |
| 9 | 堀底道西 | 焙烙 | (38.6) | 5.7 | (36.0) | |
| 10 | 堀底道東 | 火鉢 | 35.8 | 7.7 | | 外面下部に横位の指頭圧痕、底部～外面立ち上がり部分はチヂミ痕 |
| 11 | 平坦部埋土 | 擂鉢 | | | | 口縁内部に稜　サビ釉　瀬戸・美濃系　17世紀代 |
| 12 | 掘立柱建物脇 | 擂鉢 | | | | 口縁部に縁帯　サビ釉　瀬戸・美濃系　17世紀代前後 |
| 13 | 平坦部 | 擂鉢 | | | 9.2 | サビ釉　瀬戸・美濃系　17世紀代 |
| 14 | 堀底道 | 擂鉢 | | | | 焼締め　１巾は４本の擦り目　丹波系　17世紀代 |
| 15 | 堀底道東 | 火消し壺 | | | (18.6) | 瓦器質　外面にキャタピラ状の文様 |
| 16 | 平坦部埋土 | カワラケ | | | | 坩堝に使用　銅が融解 |
| 17 | 堀底道西 | 鈕 | | 径3.9 | | 在地系土器 |
| 18 | 堀底道 | 皿 | | | 8.3 | 大根と鼠を描く、底部は蛇ノ目凹形高台　肥前系　19世紀代 |
| 19 | 堀底道西 | 皿 | | | 9.0 | 長石釉を全面に施す　底部に焼台痕　17世紀台 |
| 20 | 堀底道 | 丸碗 | | | 3.2 | 染め付け　石畳地文を施す　肥前系　19世紀前後 |
| 21 | 堀底道西 | 小坏 | 7.3 | 4.1 | 2.8 | 長石釉 露胎は淡黄白色　瀬戸・美濃　17世紀後代 |
| 22 | 堀底道西 | 皿 | | 10.2 | | 京焼風　肥前産　18世紀前半 |
| 23 | 堀底道西 | 皿 | (13.7) | 2.7 | 7.5 | 透明感のある灰釉　瀬戸・美濃　17世紀後半～18世紀代 |
| 24 | 堀底道西 | 皿 | (13.4) | 2.9 | 6.1 | 透明感のある灰釉　瀬戸・美濃　17世紀後半～18世紀代 |
| 25 | 堀底道西 | 皿 | (12.5) | 2.6 | 6.4 | 長石釉 胎土は淡灰白色　瀬戸・美濃　17世紀後代 |
| 26 | 堀底道西 | 皿 | (12.7) | 2.7 | 6.6 | 長石釉 露土は淡黄白色　瀬戸・美濃　17世紀後代 |
| 27 | 堀底道西 | 皿 | (14.0) | 3.2 | 7.5 | 透明感のある灰釉　底部は無釉　瀬戸・美濃　17世紀後代 |
| 28 | 堀底道西 | 砥石 | 長さ13.5 | 巾3.1 | 厚さ3.8 | 重さ 154g　流紋岩　使用面は二面　側面はノミ痕 |
| 29 | 堀底道西 | 砥石 | 長さ11.6 | 巾2.8 | 厚さ2.0 | 重さ89.5g　流紋岩　使用面は一面　側面はノミ痕 |
| 30 | 堀底道西 | 砥石 | 長さ12.3 | 巾3.9 | 厚さ4.0 | 重さ 307g　流紋岩　使用面は四面 |
| 31 | 堀底道 | 砥石 | 長さ 7.1 | 巾3.1 | 厚さ3.3 | 重さ 116g　流紋岩　使用面は一面　側面はノミ痕 |
| 32 | 堀底道 | ヒデ鉢 | 口径 22 | 高さ 17.7 | 底径 18 | 安山岩　底部は上げ底 |
| 33 | 堀底道 | 凹石 | 外径12×11.5 | 高さ 7.0 | 重さ 359g | 軽石 |
| 34 | 堀底道 | 石臼 | 口径 34.4 | 高さ 13.2 | | 安山岩　下臼で半分ほど残存 |
| 35 | 平坦部 | 古銭 | 径 2.5cm | 厚さ 1.6mm | 重さ 2.6g | 開元通寶　背面上に月 |
| 36 | 平坦部 | 古銭 | 径 2.5cm | 厚さ 1.5mm | 重さ 2.5g | 永楽通寶 |



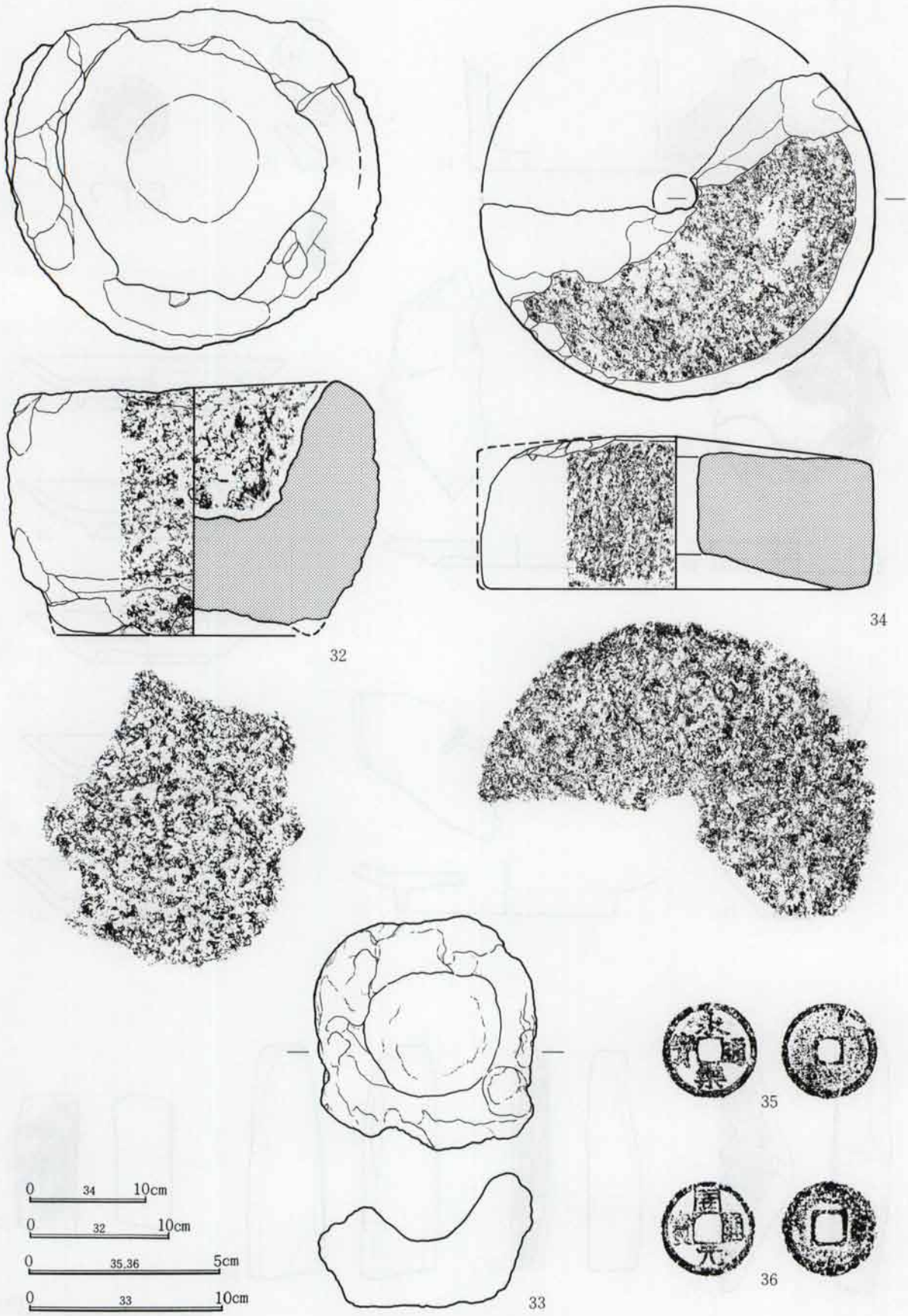

第24図　A地点出土遺物(1)




第25図　A地点出土遺物(2)




第26図　A地点出土遺物(3)




第27図　A地点出土遺物(4)

## 第３節　Ｂ地点遺跡

### (1) 検出された遺構と遺物

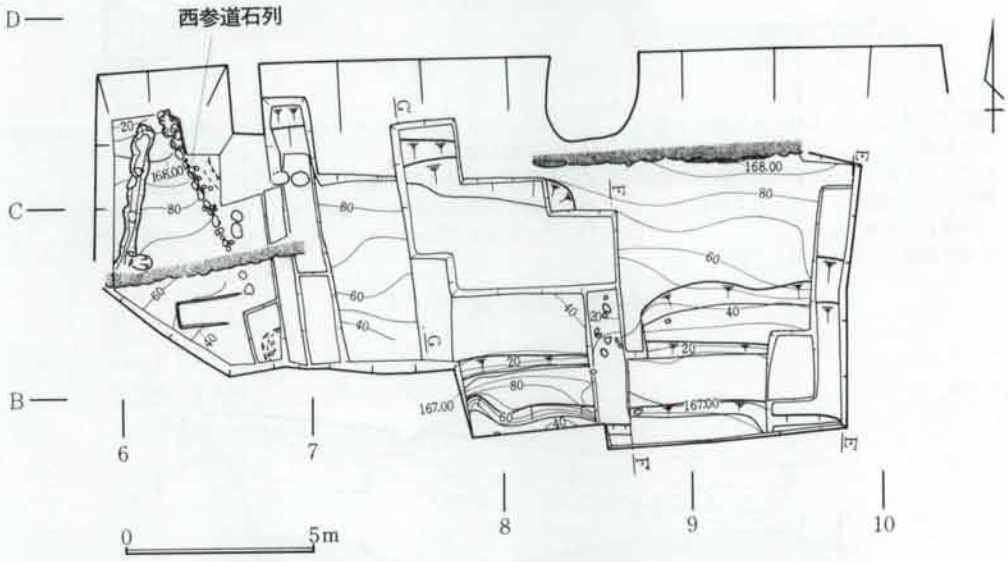
**遺構**

**西参道跡**（第28～29図）

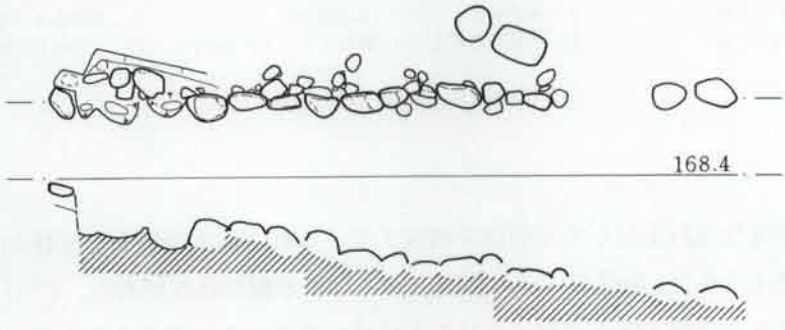
調査区の北西隅、Ｂ６・Ｃ６グリットに跨がり、その大半は母屋の石積の背面に位置する。東側に石列を配し、中央部分に溝状の掘り込みが検出された。通路面は硬化し、７°前後の勾配を呈する。南方部分は緩やかに南東方向に傾斜している。

東側の石列はＮ－27°－Ｗの主軸にとり、25～30cm前後の河原石を主体として一列に配していたと考えられる。検出された全長は5.4ｍで、南方の先端部がＢ６グリットの中央やや東寄りにあり、一部が母屋の石積により破壊されている。北方は調査区外に延びている。

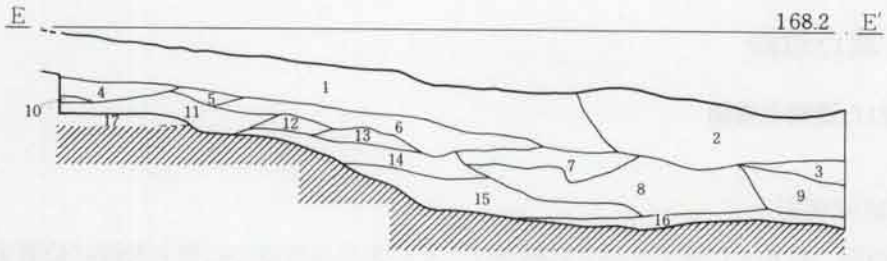
溝状の掘り込みはＮ－10°－Ｅにとり、30cmほどの幅があり、その先端部は石列と交差する部分で止まっている。掘り込みには石抜け痕があり、東側の石列に改修されたと考えられる。遺物の大半は参道の廃棄後に埋められた土層から出土した。




第28図　Ｂ地点全体図



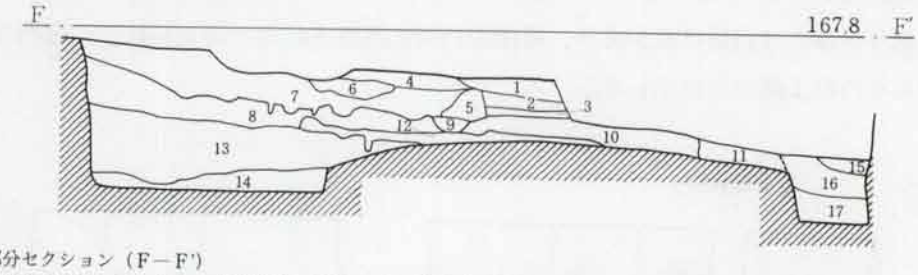

第29図　石列平面図




東壁セクション（E—E'）

1　褐色土（大胡軽石を斑点状に含む）　2　攪乱　3　褐色土（ロームB・黒褐色土Bを含む）
4　大胡軽石　5　褐色土と砂層　6　灰褐色土（ロームB・大胡軽石を含む）
7　黒褐色土・ロームB・大胡軽石の混合土　8　褐色土・大胡軽石・ロームB・黒褐色土の混合土
9　3層より暗い　10　ローム土（大胡軽石を含む）　11　大胡軽石と砂層の互層
12　灰褐色土（ロームBを含む）　13　灰褐色土（ロームBを多く含む）　14　大胡軽石
15・16　淡ピンク粘質土（黒褐色土・褐色土・ロームBを含む）　17　鹿沼層

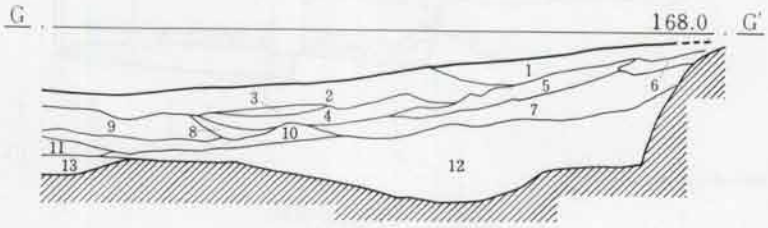
第30図　東壁土層（E－E'）




中央部分セクション（F—F'）

1　褐色土（少量のロームB・大胡軽石を含む）　2　褐色土（少量のロームBを含む）　3　黒褐色土（ロームBを含む）
4　記載漏れ　5　大胡軽石B　6　大胡軽石
7　褐色土（少量のロームB・大胡軽石を含む）　8　褐色土（大胡軽石と砂層を含む）　9　記載漏れ
10　褐色土（大胡軽石・ロームBを含む）　11　褐色土（大胡軽石が10より多い）　12　褐色土（大胡軽石を含む）
13　大胡軽石と砂層の互層　14　ロームBと砂層の互層　15・16　暗褐色粘質土
17　暗褐色粘質土（ロームBを含む）

第31図　中央土層（F－F'）




西壁セクション（G—G'）

1　褐色土（大胡軽石・ロームBを含む）　2　褐色土（大胡軽石・カーボン粒を含む）　3　白色粘質土
4　褐色粘質土（大胡軽石・ロームBを含む）　5　大胡軽石　6　砂層
7　大胡軽石・褐色土・砂を含む　8　褐色粘質土（ロームBを含む）　9　黒褐色土（褐色土・ロームBを含む）
10　褐色粘質土（大胡軽石を含む）　11　灰褐色粘質土（大胡軽石・ロームBを含む）　12　大胡軽石と砂層の互層
13　11層より暗い

第32図　土層図（G－G'）

## 平坦部～堀底道

調査区は南方に緩慢な傾斜を呈して平坦部を構成する。これらは大胡軽石を主体とする埋土が覆い、部分的に整地面が検出された。南壁沿いには東西方向走行する掘り込みがあり、1～1.2m幅のテラスを有している。この掘り込みがA地点で検出された堀底道に該等すると考えられるが、道路としての硬化面は不明瞭であった。遺物の出土はほとんど無く、僅かに南東隅で馬歯の小片が検出された。

**出土遺物**

出土遺物には、焙烙・擂鉢・敷輪・陶磁器類・カワラケ・温石・古銭がある。焙烙は器高が低く、1の底部は丸みを呈すると考えられ、2の様相からも19世紀以降の所産と考えられる。擂鉢は3～5の3点がある。6～10は在地産で過熱調理具の付属品と考えられる。機能としては、五徳と同様に熱効率を良くするために熱源と鍋釜の間に置く補助的な道具（1997 松浦）であろう。11～28の陶磁器類は瀬戸・美濃系と肥前系等があり、江戸期～昭和期に渡る製品がある。石製品は30の温石があり、懐炉が発明される以前の採暖具である。古銭は31～35の5枚の出土があり、渡来銭が北宋銭の元祐通寶と明銭の永楽通寶1枚、寛永通寶（新寛永）2枚と近代銭1枚がある。

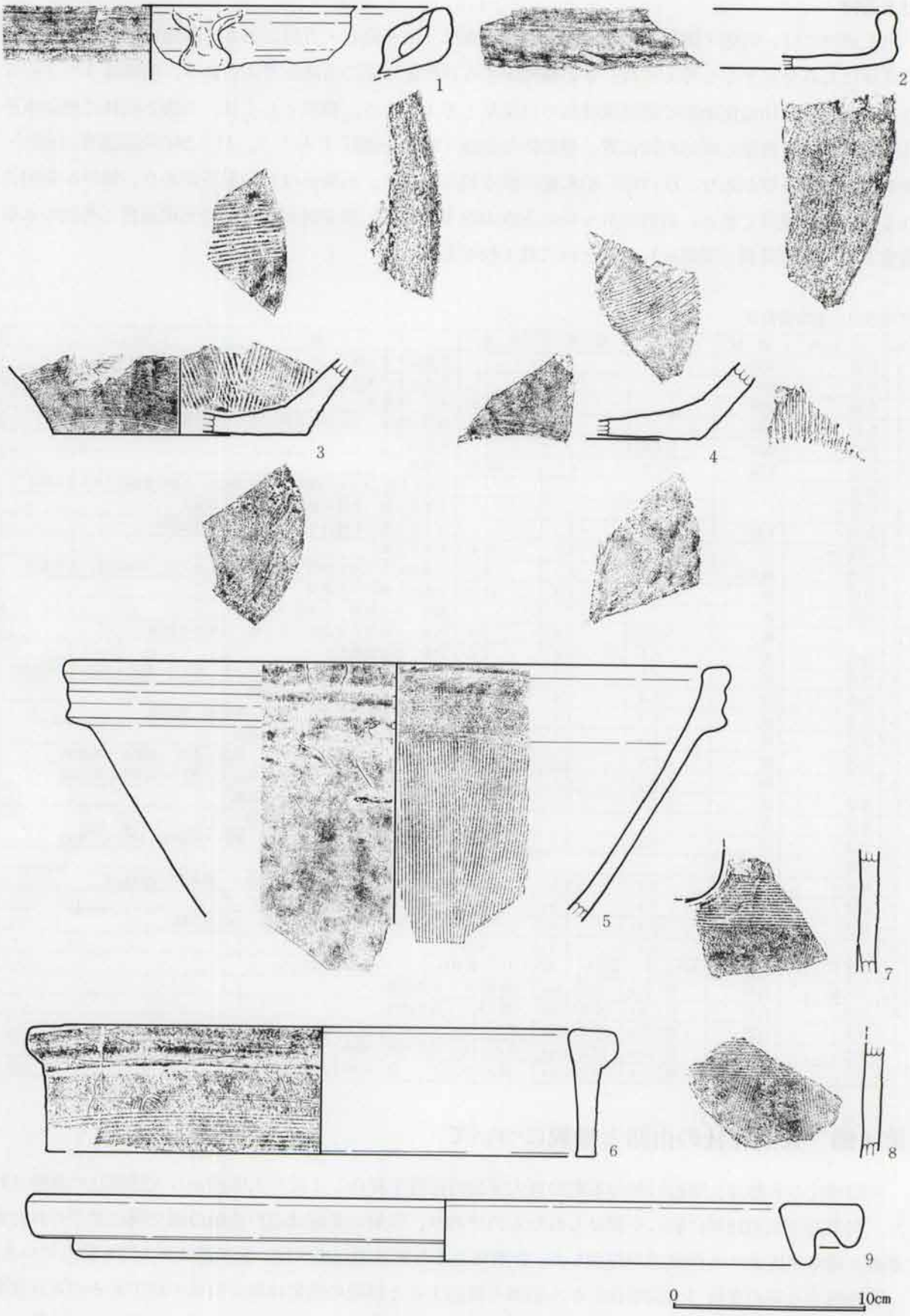
B地点出土遺物観察表

| No. | 出土地 | 器種 | 口径 | 器高 | 底径 | 備考 |
|---|---|---|---|---|---|---|
| 1 | 参道 | 焙烙 | | | | 底部はチヂミ底 |
| 2 | 参道 | 焙烙 | | 3.1 | | 底部はチヂミ底 |
| 3 | 参道 | 擂鉢 | | | (13.4) | 瀬戸・美濃産 |
| 4 | 参道 | 擂鉢 | | | | 硬質の焼締　一巾11条の擦り目　内面底部放射状の擦り目？ |
| 5 | 参道 | 擂鉢 | (34.0) | | | 近現代 |
| 6 | 参道 | 敷輪 | (30.6) | 6.6 | (26.8) | 在地産 |
| 7 | 参道 | ? | | | | 在地産土製　8と同一個体で円孔を設ける　外面に櫛歯状工具による施文 |
| 8 | 参道 | ? | | | | 在地産土製　外面に櫛歯状工具による施文 |
| 9 | 参道 | 敷輪 | (44.0) | 3.3 | | 在地産土製　七輪台とも言われる 19世紀以降 |
| 10 | 参道 | ? | (35.2) | 14.0 | (12.6) | 在地産土製 |
| 11 | 参道 | 輪花皿 | (12.3) | 3.5 | 6.2 | 口唇部の五カ所に指押さえ　内面にトチン跡　黄瀬戸系　17世紀代 |
| 12 | 参道 | 碗 | (10.7) | 4.9 | (3.9) | 近現代　瀬戸・美濃産 |
| 13 | 参道 | 碗 | | | | 蓋物　外面鉄絵　内面直下は無釉 |
| 14 | | 碗 | (9.2) | 5.9 | 3.5 | 内面～外面高台付近まで長石釉、口縁部は鉄釉 |
| 15 | 参道 | 碗 | 8.5 | 3.9 | 2.8 | 色絵　19世紀代? |
| 16 | 参道 | 碗 | 11.5 | 6.2 | 3.9 | 統制陶磁　飯茶碗　スタンプにより　岐110　瀬戸・美濃産　昭和期 |
| 17 | 参道 | 碗 | 11.4 | 5.4 | 3.8 | 飯茶碗　瀬戸・美濃産　昭和期 |
| 18 | 参道 | 碗 | 11.4 | 5.4 | 4.0 | 飯茶碗　外面に桜花文　瀬戸・美濃産　昭和期 |
| 19 | 参道 | 碗 | 11.4 | 4.9 | 4.0 | 型紙摺絵　瀬戸・美濃産　明治期 |
| 20 | 参道 | 皿 | 12.6 | 2.5 | 6.8 | 内面体部に銅版転写　文寛永と波銭　瀬戸・美濃産　明治期 |
| 21 | | 碗 | (18.1) | 6.7 | (8.2) | 銅版転写　桜花文、剣先文と菊花文　瀬戸・美濃産　明治期 |
| 22 | 参道 | 皿 | (12.0) | 2.4 | 7.0 | 銅版転写　瀬戸・美濃産　明治期 |
| 23 | 参道 | 皿 | | | | 蛸唐草文等　肥前系　江戸後期 |
| 24 | 参道 | 皿 | (9.8) | 2.3 | (4.4) | 型打ち白磁　見込みに陰刻文　瀬戸・美濃産　1850～明治初 |
| 25 | 参道 | 小瓶 | | | 3.6 | 染め付け　肥前系　江戸後期 |
| 26 | 参道 | 仏飯器 | (5.8) | 5.9 | 3.4 | 染め付けで崩れた蛸唐草文を施す　肥前系　19世紀代 |
| 27 | 参道 | 受付皿 | 9.8 | 2.3 | 4.4 | 鉄釉　瀬戸・美濃産　19世紀代 |
| 28 | 参道 | 受付皿 | (9.6) | 1.6 | 4.8 | 透明感のある灰釉　産地不明　19世紀以降 |
| 29 | | カワラケ | 10.0 | 2.5 | (6.0) | |
| 30 | 参道 | 温石 | 長さ5.2　幅5.9　厚さ1.7　重量83g　7㎜の孔を開ける | | | |
| 31 | 平坦部 | 古銭 | 径2.2cm | 厚さ0.9㎜ | 重さ0.9 | 永楽通寶 |
| 32 | 参道 | 古銭 | 径2.3cm | 厚さ1.0㎜ | 重さ2.1 | 寛永通寶 |
| 33 | 参道 | 古銭 | 径2.3cm | 厚さ1.0㎜ | 重さ1.7g | 寛永通寶　背上に元 |
| 34 | 参道 | 古銭 | 径2.3cm | 厚さ0.9㎜ | 重さ2.1g | 元祐通寶　夷慢 |
| 35 | 参道 | 近代銭 | 径2.2cm | 厚さ1.6㎜ | 重さ3.9 | 十　銭　昭和十一年鋳造 |

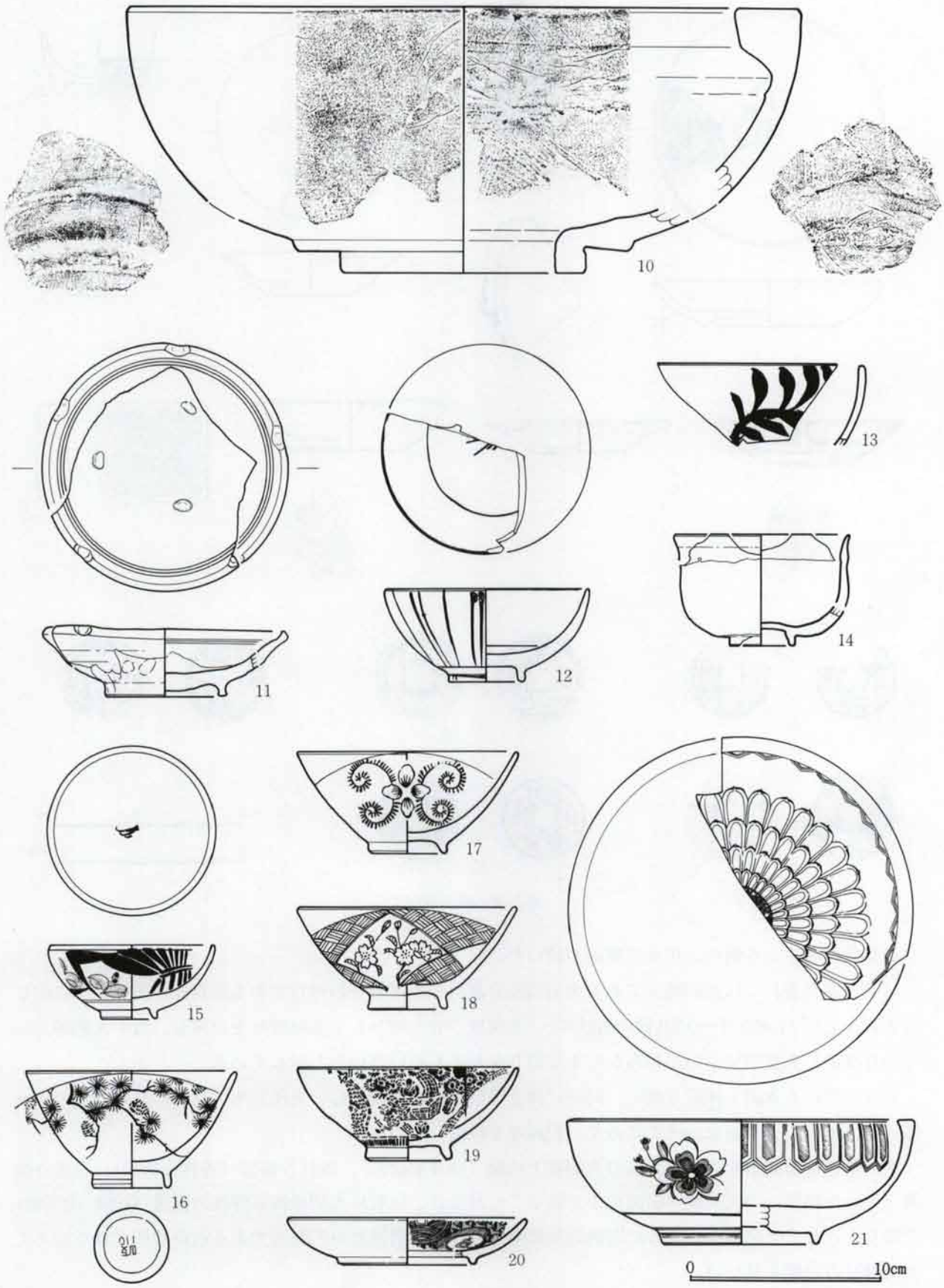
## 第4節　大胡神社の由緒と景観について

大胡神社の名称は、明治42年の本町の各大字の村社等を統合して近戸大明神から大胡神社に改称された。南参道は昭和18年に新しく設けられたものであり、以前の参道は近戸曲輪の南東隅に設けられた東参道と神官が居住する西参道が存在した。古老によると東参道は東大門、西参道は西大門と称していた。

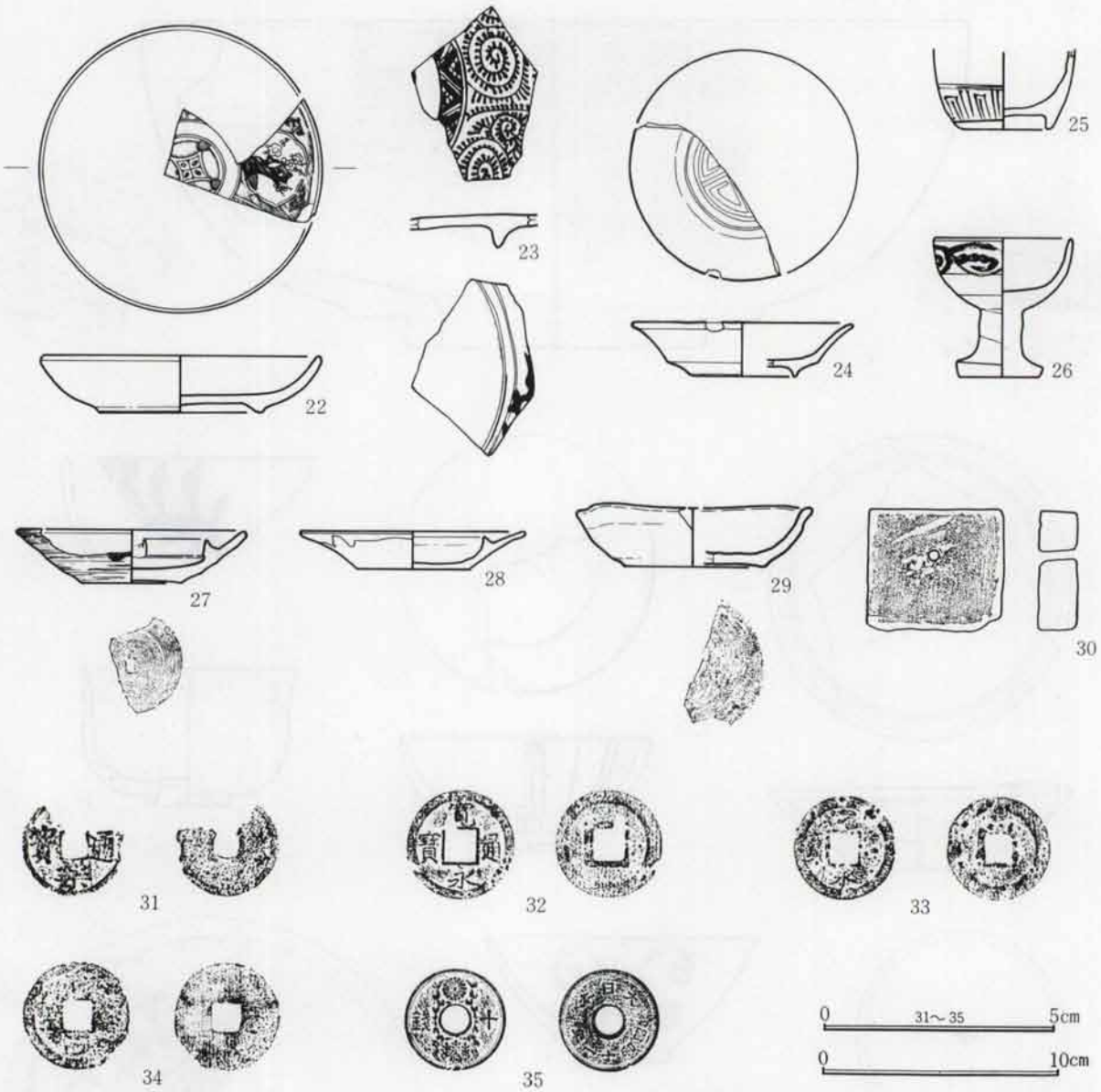
明治四十三年の発行『大胡町誌』から沿革を要約すると神殿の造営は年月日は不詳であるが天正年間に焼けたが、新しく造営された。天正五年（1577）に大胡城主の大胡常陸介高繁より御米五石を賜り、




第33図　出土遺物(1)




第34図　出土遺物(2)




第35図　出土遺物(3)

以後累代の城主より明治三年まで奉納が続いた。

『奈良原文書』では大胡城主である大胡常陸介高繁が赤城神社の神官である奈良原紀伊守宛てに出した天正十七年（1589）十一月九日の書状に、「大胡城の守り神として赤城神社を分家し、近戸大明神として祭り度ので奈良原父子のどちらかに来て祭りをしてもらいたい」と記している。

寛永年間にも本殿・拝殿を焼き、同時に神主の奈良原家も焼失し、天保三年（1832）三月六日の六ッ時には、神殿と奈良原家が火災にあり、記録等を焼滅している。

大胡神社は前橋市立図書館所蔵の大胡城下絵図（酒井家絵図）、養林寺保管（養林寺絵図）、長善寺保管（牛込氏絵図）の大胡城下絵図により知ることができ、以前に大胡城保存管理計画書（1988 山下他）で取り上げたことがある。さらに明治34年に発行された大胡神社の俯瞰図である近戸神社之景を加えて大胡神社の景観を見たい。

酒井家絵図（第36図）では、神社が近戸大明神と記され、鳥居と拝殿？が描かれている。北～西方は

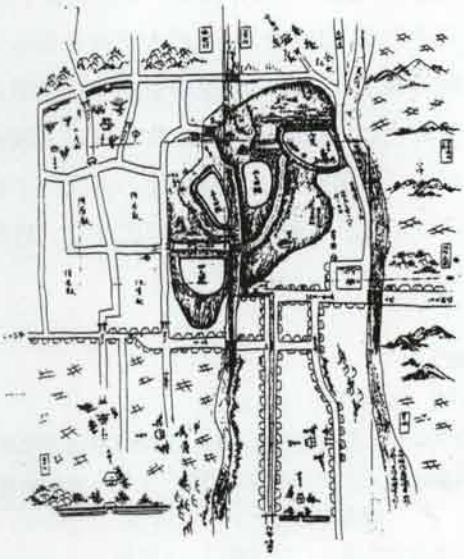
堀切り部分が表現されている。参道と考えられる通路は南東隅の東参道から直進して南西で直角に折れて西参道となり神社と大胡幼稚園（北城）の間を東西に走る道路に接している。この道路の西方で風呂川に掛かる堀合橋の記載は無いが、この部分の川幅が膨れている。調査区部分には居住区画があるが神主宅が表現されていない。

養林寺絵図（第37図）は、神社のある近戸曲輪の形状が省略され、東参道・鳥居・拝殿？が直線的に続いて描かれている。堀合橋は表現されているが調査区の部分は省略されている。

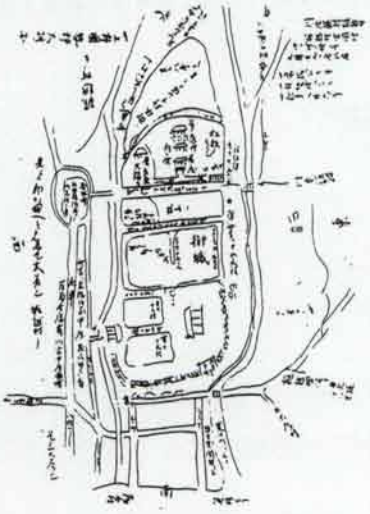
牛込氏絵図（第38図）は、近戸曲輪の形状が簡略されているが、北～西方に巡る堀切りは幅と深さを記載している。神社は鳥居と茶屋・拝殿・本殿の近戸大明神の建物を描き、周囲は松杉の森と記し、参道は東参道の石段と石鳥居、西に神主の奈良原大温寺の建物がある。北城との間の堀切りは深さ十丈広さ百間と記している。調査区部分の居住部分は省略されている。

近戸神社之景（第39図）は南東方向から俯瞰を中心に描かれている。境内には鳥居・拝殿・幣殿・本殿や神楽殿等があり、東参道の石段も忠実に描写され、西参道は短い石段から坂道が描かれている。神社南面には一段低い平坦部に住宅があり、その全面の堀切り部分に道路があり、堀合橋らしき橋も描かれている。

第36図　酒井家絵図



第37図　養林寺絵図



第38図　牛込氏絵図

第39図　近戸神社之景

## 第５節　成果と課題

本調査区は大胡神社参道の西脇にあり、二軒の住宅の南方居住域が対象となった。両者とも道路面から二段の平坦部を作り出し、道路際の低く狭い平坦部に農作業用の施設を構え、神社側に石積で区画した居住域がある。Ａ地点では掘立柱建物跡・土坑、堀底道等、Ｂ地点は昭和18年の現参道構築に伴い廃止された西参道を検出した。

大胡神社と北城の間は、自然の窪所を掘拡した大堀切りと推察されていた。今回の発掘では堀切りと考えられる掘り込みは検出されなかった。検出された堀底道は近世に於ける所産と考えられ、現在の道路部分に堀切りが存在するか否かは不明であった。仮に現道路が堀跡するならば本丸と北城・二ノ丸と三ノ丸を区切る大堀切りと規模が異なり、現存する北城の矩面からも小規模と推定される。

江戸期に描かれたと考えられる絵図等には堀合橋があり、牛込絵図には「堀　深さ十丈　広さ百間」と大きさを記している。信頼できる18世紀の初め頃に作成されたと考えられる酒井家絵図では道路を示している。

『赤城神社年代記』に記されている「天正十二年（1584）、人馬二百余を流失する」や『赤城神社古文書』の天正十七年（1589）の近戸大明神を祭る為に赤城神社の父子を依頼する文書からも推察される様に、16世紀の後半には人口の集中があり、当地区の大鎮守である近戸神社の存在も知ることができる。

これらを総合して推測すれば、牧野氏の入城頃に堀底道が整備され、大胡城跡の武家屋敷に続く道路が整備され、この前後には大胡神社の南面に平坦部が造られ初め、居住域が出来あがっていたと考えられる。その以前は、荒砥川の低地が広がり、自然の窪地が大きく食い込んでいたと思われる。

**《参考文献》**


大胡町　大胡町誌　昭和51年

1988　山下歳信他　群馬県指定史跡　大胡城跡保存管理計画書　大胡町教育委員会

1988　群馬県埋蔵文化財調査事業団等　上植木光仙房遺跡　一般国道17号（上武道路）改築工事に伴う埋蔵文化財発掘調査報告書

1994　高崎市教育委員会　高崎城三ノ丸遺跡

1997　松浦正美他　茨城県新治郡玉里村教育委員会　五万堀遺跡　建設省関東地方局霞ケ浦導水事業第１導水路建設に伴う発掘調査

1997　大胡町　大胡町水難誌

2000　九州近世陶磁学会　九州陶磁の編年　九州近世陶磁学会10周年記念

2001　山下歳信　本丸北大堀切り跡遺跡　大胡町教育委員会

2001　江戸遺跡研究会［編］　図説　江戸考古学研究事典　柏書房

# 第Ⅴ章　養林寺裏遺跡

## 第１節　位置と周辺の環境

大胡町の中心街区をなすのが町政施行以前の宮関村（現在の大胡町大字大胡）であり、江戸時代の日光裏街道の宿であった大胡宿である。この宿の北方にある城跡は戦国時代の大胡城主であった大胡常陸介高繁により基盤が構築され、譜代大名として大胡藩二万石の城主として天正十八年（1590）に大胡城に入城した牧野康成によって城郭並びに城下町の整備が完成している。

養林寺裏遺跡は大胡城跡の玉蔵院曲輪より風呂川を挟んで西方に位置し、大胡藩主となった牧野氏の菩提寺である養林寺の北にある。現在の養林寺の寺域には本堂の西～北方にＬ字形に空堀が残っており、大胡一族[註1]の館址と考えられ、養林寺館址[註2]と称されている。寺の南方には大胡藩の武家屋敷が広がり、武家屋敷の一部に該当する現在の大胡郵便局の建設に伴い殿町遺跡(22)が調査され、平安時代の住居跡と中近世の土坑を検出した。養林寺の西方に位置する長善寺(23)には伝大胡太郎の墓があり、遺跡北方には玉蔵院の末寺であり、天保以前に廃寺となった東福寺(24)、その北に現在の金蔵院である金胎寺(25)、その東には長興寺の末寺であった永龍寺(26)があり、北方の防備を固めていた。

養林寺は、『大胡町誌』によると現在の大胡神社境内南西の所に牧野康成が父である牧野成定公養修院殿の菩提として近戸山養修寺と号したのが創立とされる。その後、牧野康成は大胡太郎実秀[註3]の念仏の旧跡があることを知り、現養林寺の地に堂塔伽藍を建立し無量山養林寺と改称した。

慶長九年（1604）十一月三日には、百石の御朱印地[註4]を徳川家康より許された。慶長十四年（1609）に大胡城で逝去した康成公は同寺に葬られた。その御廟には康成公室と父君成定公室が埋葬され、父君成定公、康成の子供であり、家督を継いだ忠成公、忠成の室と子供の供養墓が建立されている。二代目の藩主となった忠成公は、大坂冬の陣、夏の陣の功績により、元和二年（1616）に越後長峯城に転封され、同四年（1618）には長岡城に移った。以後、寺は牧野家の菩提寺として存続している。

天保年間（1830～1843）に伊勢崎藩士である長尾景範によって書かれた『樽村紀行』[註5]によると「～養林寺を訪う　山主席を設け　身親ら茗（お茶）を点じ懇々として過去の事を談じて時を移す　前庭の古鐘の銘文憔隹雅なり　大檀那牧野侯之を納む　斎田百石にして浄土宗なり　堂上に牧野駿州君（牧野康成）の像を安置す。五位の衣袍　剣を帯び　笏を携え　儼然たる神像なり、薫香再拝して堂を下りて山主に別る　傍らに古墟（大胡城跡）あり　国初の頃　駿州君都せり、竹樹隠蔚として断崖千仞　壕塹尚存せり～」と記している。長尾景範が養林寺を訪れ時には本寺の古鐘と牧野康成公の像が存在した事が分かる。古鐘は寛政四年（1792）の時の作で戦時中に供出された。像は天保十一年（1840）の大火で失ったのであろう。

長岡藩主牧野氏は参勤交代の途中に、養林寺の住職に先祖の墓の供養として銭等を与えて庇護している。特に享和元年（1801）に老中となった第九代目の長岡藩主牧野忠精は、同年に牧野康成公の御廟に石燈籠[註6]を寄進している。

（註１）　大胡氏は秀郷流藤原氏の系譜である淵名大夫頼行の曾孫大胡重俊に発する家系で「平治物語」の源義朝の軍勢に「大胡人々」として登場する。また、「吾妻鑑」では源頼朝の御家人として活躍した記事がある。以後、代々大胡を領していたが、重行の時に北条氏康の招きに応じて武蔵国牛込に移り、子供の勝行は牛込と姓を改めた。

（註２） 養林寺館址（大胡館）については、山崎一による考察がある。大胡館（1978 山崎）では、「大胡町堀越の養林寺は二重構えの中世居館址である。養林寺は居館の廃された墟に建ったのであって、牧野氏の墓地はここにあるが、大胡氏の墓は長善寺に大胡太郎の墓と伝えられるものがあるだけである。～大胡城築城以前から、大胡城築城当初も、大胡氏はここに居住したのではあるまいか。養林寺の北部、西部に、幅８ｍ、深さ2.5mの壕址と高さ２ｍの土居が鍵形に現存し、土居はその西側30mにも鍵形にのこって現在の西面道路は濠址であったことを推定することができる。この間の部分を西曲輪と仮称しておくが、そこには牧野氏墓地がある。外側の構えは、北面では両濠間の矩りが土居幅だけに過ぎないので、二重堀構えであったと思われる。東面は、北東端部に壕址を認められるが、他の大部分は高さ３ｍの石垣となり、その下に壕があったであろうと思われる。この面は二重構えでなく一重であったのであろうか。壕の外縁は土を取り除かれたのかも知れない。南面は、現在小道のある所が外壕址と思われるが、内壕は不明である。これらに囲まれた郭内は方150m程であるが、更に南に東西150m、南北90mの外郭が付随していたようにも思われる」と記している。
養林寺館址（1980 山崎）について「壕と高土居の一部がのこり、東西90m、南北130m、南半は前庭状の別郭となり、北半に二重堀構造が認められる。しかし、二重堀は北面と西面とに見られるのみで東は一重である。北面の内外壕の間隔は土居幅だけとなっているのに、西面では25mあり、そこに牧野氏の墓所がのこっている。牧野氏墓地のある部分が、通常の二重堀構えとは異なって一郭をなし、内郭を東に片寄せてあることから、内郭はここに養林寺を建立した際、新たに設けたのであろう」と推定している。

（註３） 大胡太郎実秀は寛元四年（1246）に往生したが、生前父隆義が在京中に法然上人から得た消息（手紙）を手本として念仏修行に励んでいる様子が「法然上人絵伝」に描かれています。帰国後に疑問のあった実秀は小屋原（前橋市）の蓮性を使者として法然に質問し、その返事を受けています。後に親鸞は大胡氏らのことを「聖人根本の弟子」と呼んでいます。大胡氏と法然門流との関係が知られ、養林寺の境内が大胡氏に関係する館跡と考えられています。

（註４） 養林寺領之事 上野国勢多郡大胡郷之内百石牧野駿河守所寄附不可有相違并山林竹木諸役令許之状如件 慶長九年十一月三日 御朱印

（註５） 伊勢崎藩臣の長尾景範が天保六年（1834）の五月二十五日に伊勢崎城を出発して二宮、荒口、泉沢を経て大胡に至り、養林寺で古鐘を見て、大胡城跡から小坂子・嶺村等を旅した紀行文であり、昭和32年９月発行の「すざく会誌」第２巻３号（第10号）に「伊勢崎藩士　長尾景範著 樽村紀行に紹介されている。

（註６） 正面 月照院殿 御廟前　右 享和元年辛酉年三月吉日 従四位下行侍兼備前守源忠精朝臣　左 献備 石燈籠　両基

## 第２節　検出された遺構と遺物の概要

縄文時代では調査区東方に中期後葉の加曾利Ｅ式期の土坑二基と包含層遺物が検出された。これらはＥⅢ～Ⅳ式期の様相を呈している。同地域に於いて縄文時代の遺構と遺物の検出は初めてであり、住居跡は検出されなかったが周辺には小規模の集落の存在が推察される。

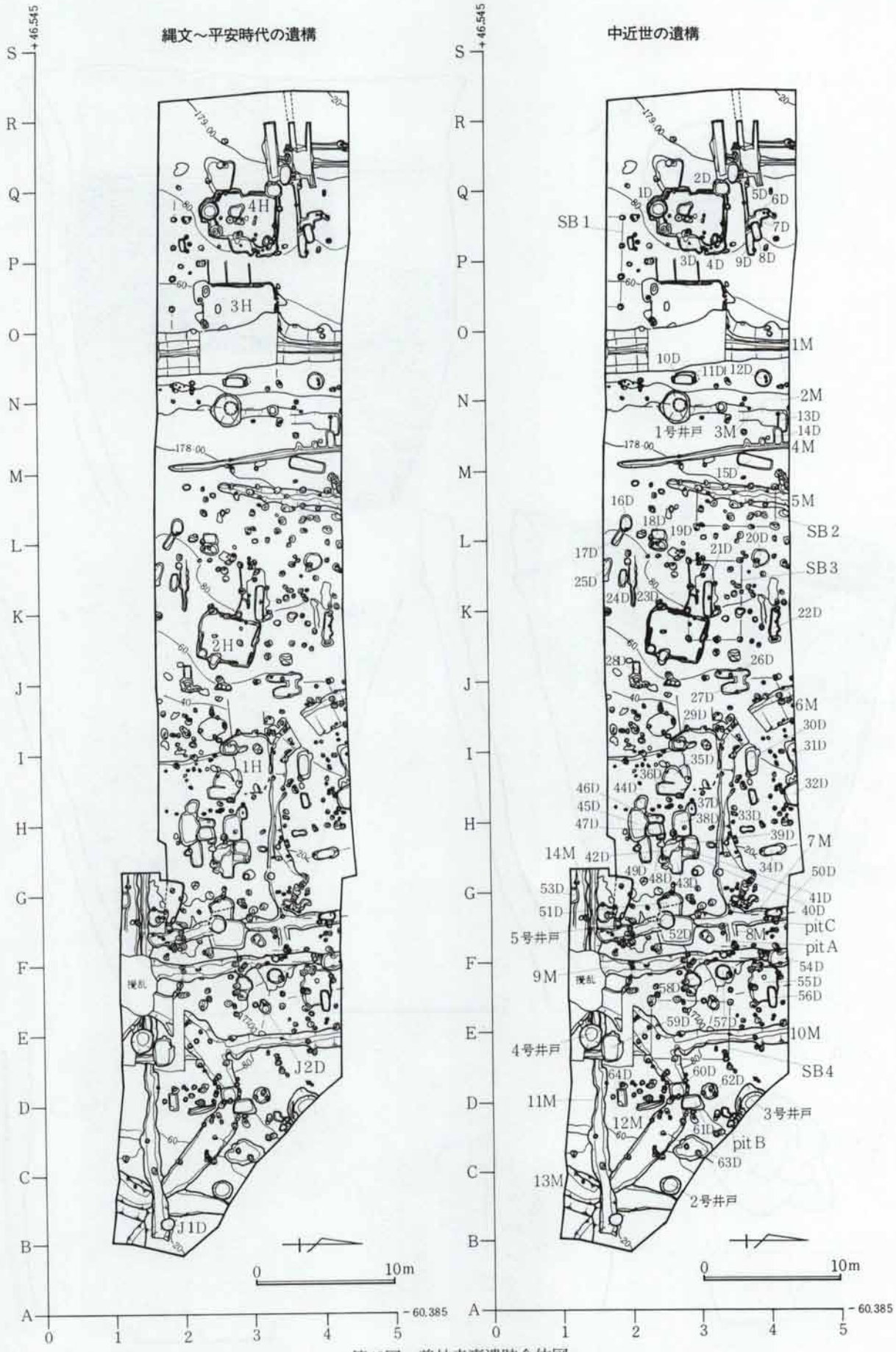
平安時代では四軒の竪穴住居跡があり、同時代の土器を共伴する溝がある。いずれも10世紀前半代頃と考えられる。４号住居跡からは小破片の緑釉陶器片・仏鉢片・香炉形土器？が注目される。

中近世では掘立柱建物跡４軒、柱穴列、土坑・溝・井戸５基が検出され、瓦片・陶磁器・カワラケ・石製品・古銭等が出土した。

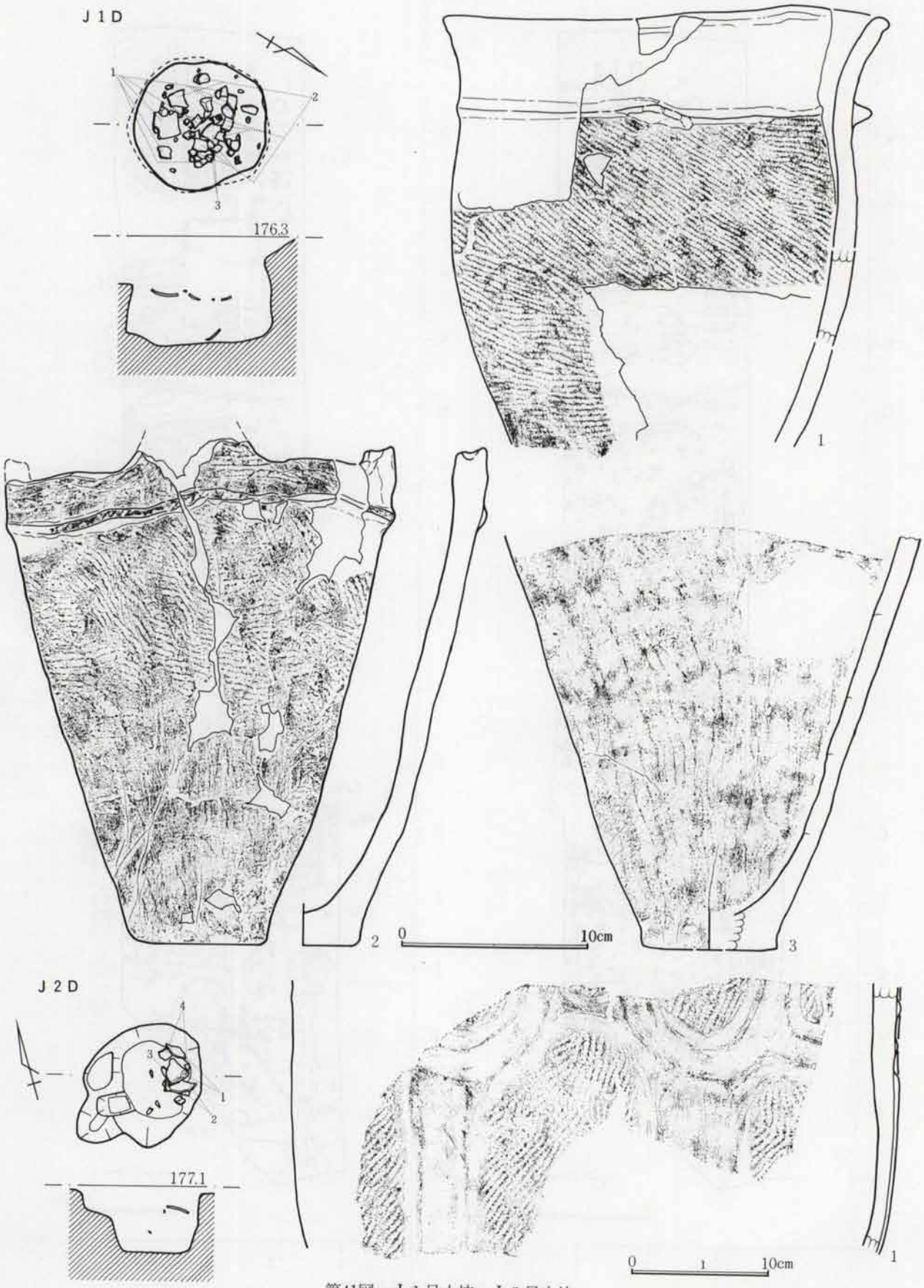
### (1) 縄文時代の遺構と遺物

#### Ｊ１号土坑

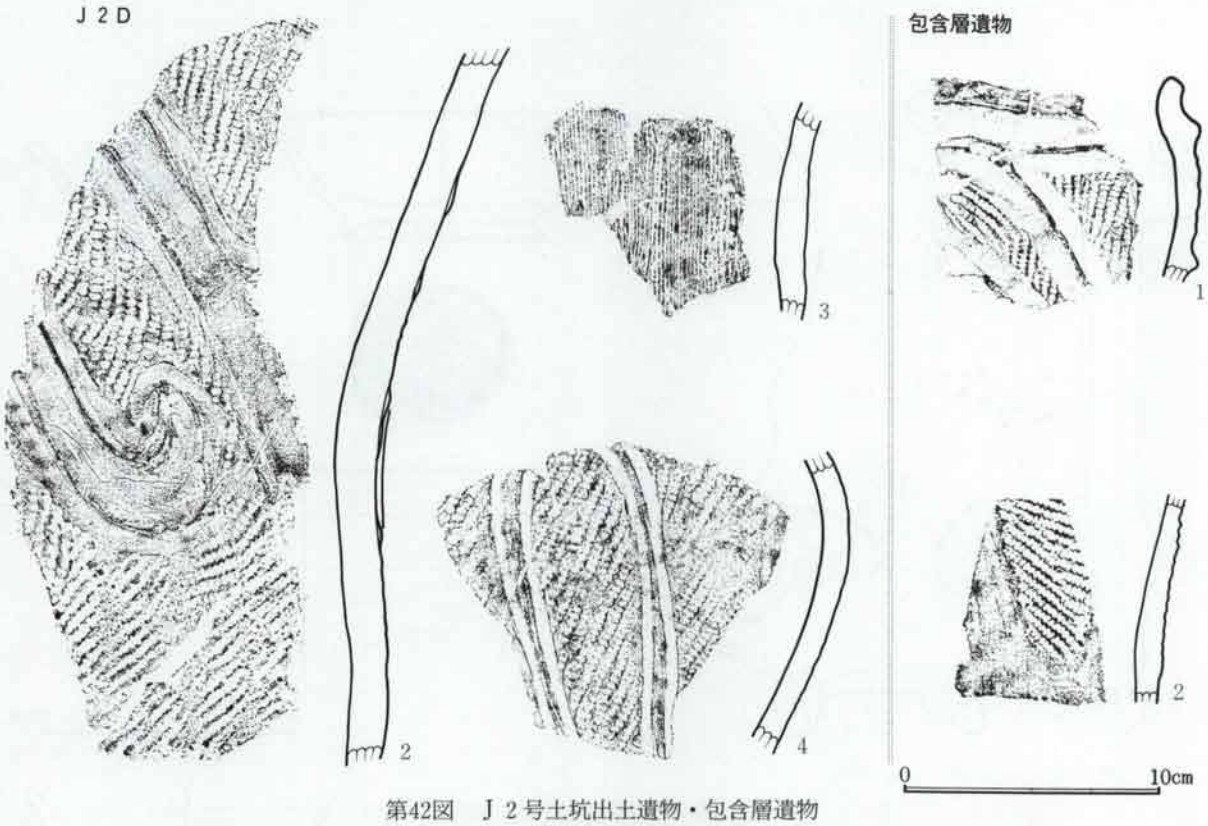
調査区の東端でＢ１グリットに検出され、標高176.20m付近の傾斜面に位置する。上部を５号溝によって切られている。形状は円形を呈し、規模は95cm前後の径を測る。底面は緩やかな起伏があり、やや南傾斜である。壁面は底面から上部に向けて窄まる。残存の良い北壁で高さ55cmである。遺物は底面より




第40図　養林寺裏遺跡全体図




第41図　Ｊ１号土坑・Ｊ２号土坑




第42図　J 2号土坑出土遺物・包含層遺物

30～35cm浮いた状態と底面に近い状態で３個体が出土した。

《出土遺物》

１の深鉢形土器は復元口径32.2cm、残存器高31cmを計る。口縁部を無文帯とし、直立気味に外反する。頸部には断面三角形の隆帯を巡らして胴部とを区画する。この区画隆帯の一部は舌状に突出させている。胴部はRL縄文を充填する。２は口径20.5cm、残存器高27cm、底径７cmを計る。口縁部の区画を隆帯が巡り、口唇部に一対の大小の突起を付す。小突起の頂部は凹みを施す。地文は隆帯貼付後に胴部中位～口縁部に縄文を施す。３は残存器高23cm、底径7.2cmを計り、縦位にヘラ調整を施している。

### Ｊ２号土坑

調査区の東方でＥ３グリットに検出され、標高177.00m前後の平坦部に位置する。形状は南北に長い楕円形を呈し、西方に後世の柱穴状の掘り込みが重複する。規模は南北長90cm、東西長70cm前後を測る。

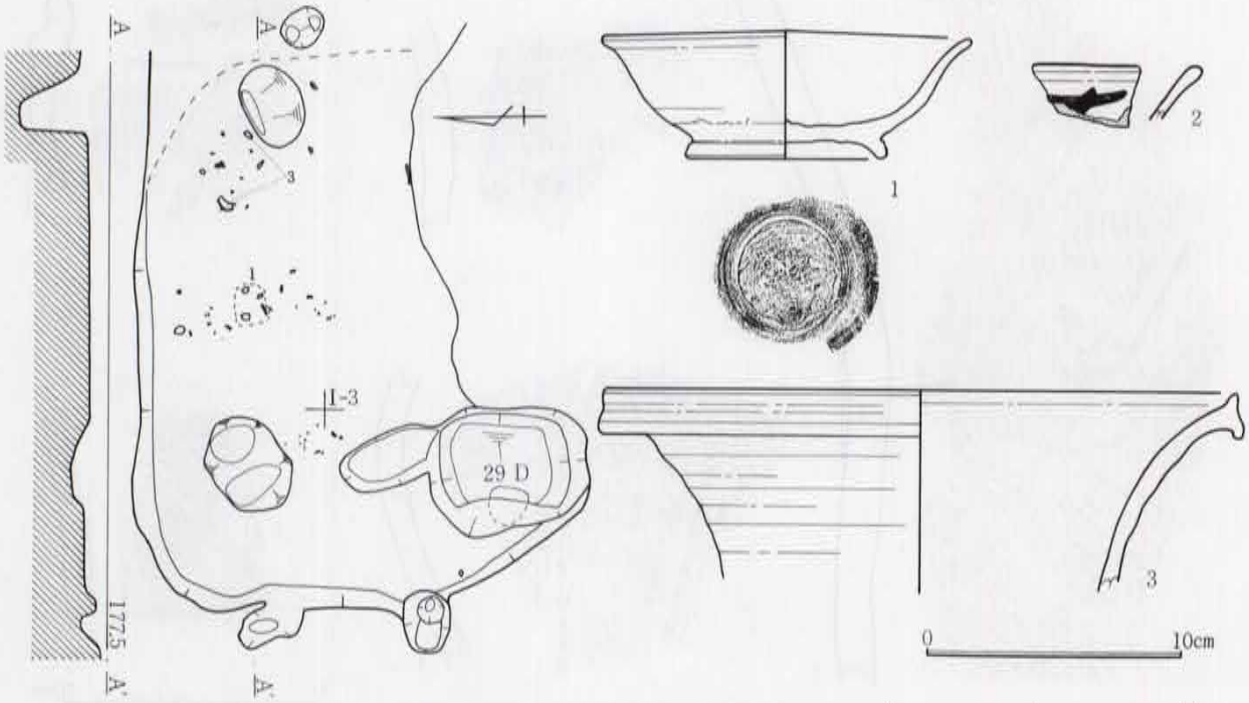
底面はほぼ平坦で、壁面は南壁を除いて垂直気味に立ち上がり、東壁で45cmの高さが残存する。遺物は東壁沿いで底面より30cm程浮いた状態で出土した。

《出土遺物》

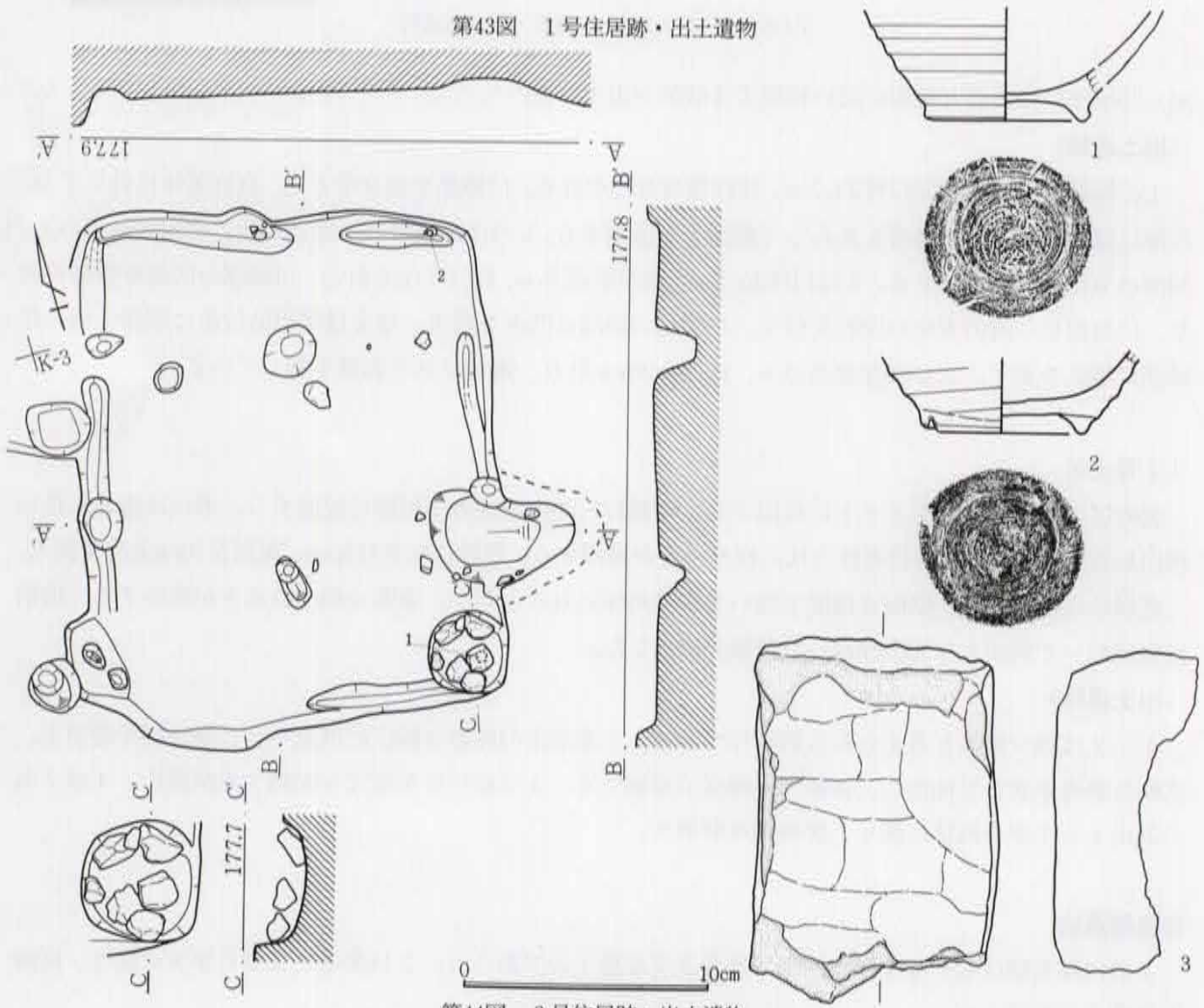
１と２は同一個体と考えられる胴部片である。２本単位の隆帯を幅広に併走させ、隆帯間を磨消す。文様は渦巻き文等を抽出し、区画内を縄文で充填する。３は縦位に条痕文を充填する胴部片。４は２条の併走する沈線を波状に施し、沈線間を磨消す。

### 包含層遺物

１の口縁文様はなぞりを伴う隆帯で渦巻き文を施すのであろう。２は隆帯によりＵ字文を描き、区画内を縄文で充填する。




第43図　1号住居跡・出土遺物




第44図　2号住居跡・出土遺物

### (2) 平安時代の遺構と遺物

**1号住居跡**（第43図）

調査区の中央やや東のＩ３グリットポイントを中心に位置し、標高177.40m前後の平坦部に検出された。西方の約10mに２号住居跡が隣接する。形状は東西に長い方形を呈すると考えられ、東辺と南辺部分が後世の掘り込みにより破壊され、北辺と西辺が残存している。規模は東西長が推定で4.3m前後、壁高は西辺で15cm程が残存する。床面はほぼ平坦を呈し、炭化物が分布する。周溝・柱穴・カマドは不明である。

遺物は細かい破片が北壁に沿って散布する。図示できた個体は、高台付碗・墨書土器・甕の口縁部片である。

1号住居跡出土遺物観察表

| No. | 器　種 | 口　径 | 器　高 | 底　径 | 備　考 |
|---|---|---|---|---|---|
| 1 | 高台付碗 | 14.3 | 5.0 | (7.6) | 還元焔　付高台　底部糸切り　内面底部に渦巻き痕 |
| 2 | 墨書土器 | | | | 還元焔　墨書判読不明 |
| 3 | 甕 | (24.8) | | | 酸化焔気味 |

**2号住居跡**（第44図）

調査区の中央付近、Ｊ２グリットにその大半を占める。標高177.70m前後の平坦部に検出された。形状は南北に長い方形を呈する。規模は長軸長4.1m前後、短軸長3.4mを測り、主軸はＥ－15°－Ｓにとる。壁高は14～20cmが残存する。床面は平坦面である。周溝は各辺に途切れ途切れに検出された。柱穴は床面の長軸方向の中央部分等に存在するが帰属は明確で無い。貯蔵穴は南東隅に設けら、60cm前後の円形を呈し、深さ15cmを測る。内部には礫が存在し、底面からは高台付碗が出土した。カマドは東辺の中央やや南寄りに設けられている。

遺物は貯蔵穴の底面の他に北辺下の周溝から高台付碗が出土した。

2号住居跡出土遺物観察表

| No. | 器　種 | 口　径 | 器　高 | 底　径 | 備　考 |
|---|---|---|---|---|---|
| 1 | 高台付碗 | ( 4.5) | 6.0 | | 還元焔　付高台　底部糸切り |
| 2 | 高台付碗 | | (3.0) | 6.4 | 還元焔　付高台　底部糸切り |
| 3 | 加工石製品 | | | | 軽石で二次焼成受ける。ノミによる加工痕 |

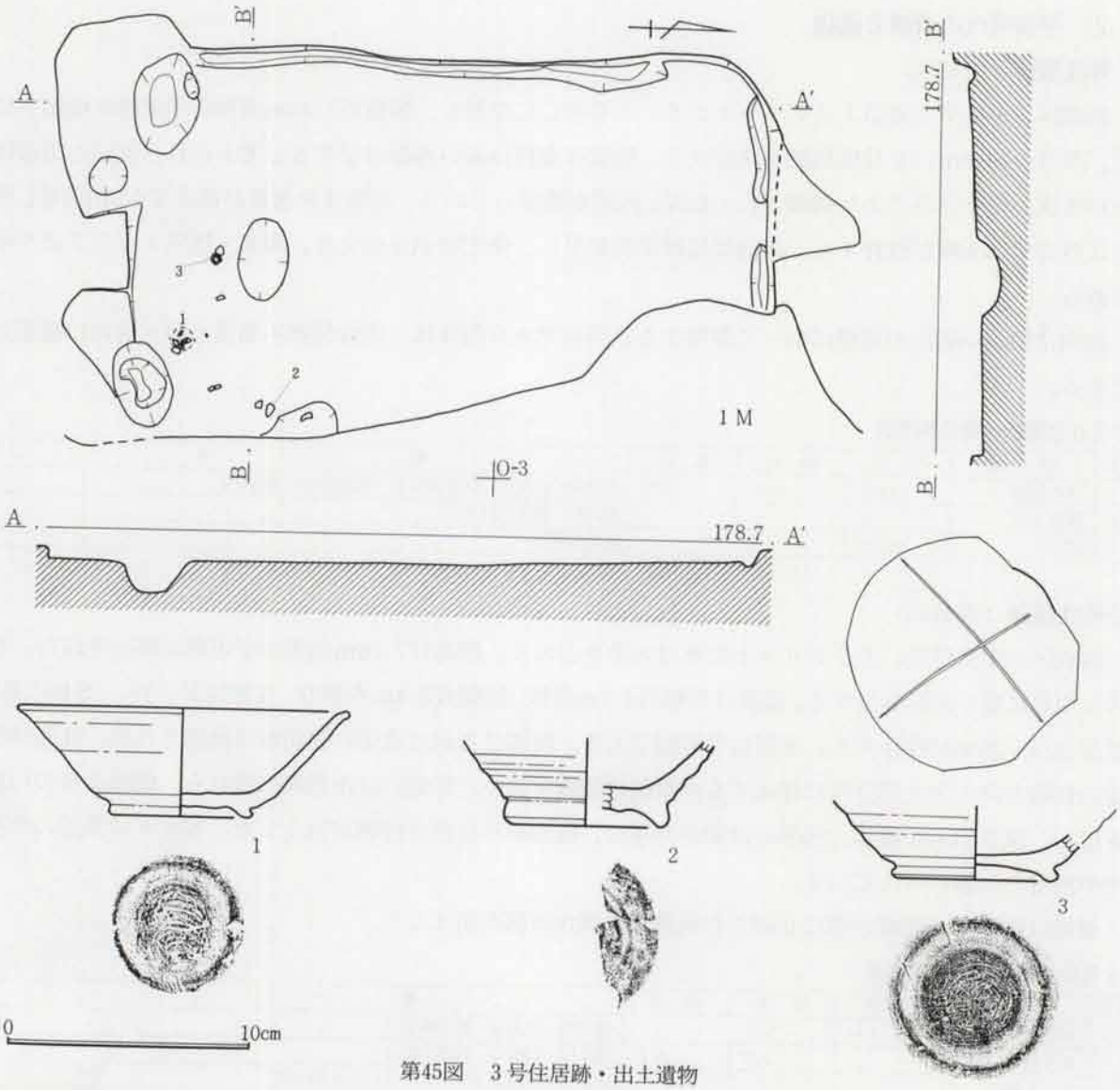
**3号住居跡**（第45図）

調査区の北方、Ｏ２・３グリットに位置する。標高178.60m前後の平坦部に検出され、11号溝によって東方部分が破壊されている。形状は明確では無いが４号住居跡と同様に南北に長い方形を呈すると考えられる。規模は残存する長軸長5.4mを測る。壁高は８～12cmと浅い残存である。床面は平坦面である。周溝は残存する北と西辺下に巡る。柱穴と貯蔵穴は不明である。カマドは東辺に構築されていたと考えられが11号溝により大半が破壊されている。僅かに焚き口と考えられる掘り込みが南東方向にあり、脇で高台付碗が出土している。

遺物は高台付碗が前記したカマド付近と南辺寄りに点在して出土した。

3号住居跡出土遺物観察表

| No. | 器　種 | 口　径 | 器　高 | 底　径 | 備　考 |
|---|---|---|---|---|---|
| 1 | 高台付碗 | (13.5) | 4.5 | 5.5 | 還元焔　付高台　底部糸切り　粗砂粒を多く含む |
| 2 | 高台付碗 | | (3.6) | (6.2) | 還元焔　付高台　底部糸切り |
| 3 | 高台付碗 | | (3.1) | (6.2) | 酸化焔気味　付高台　底部糸切り　内面底部に×の線刻 |




第45図　3号住居跡・出土遺物

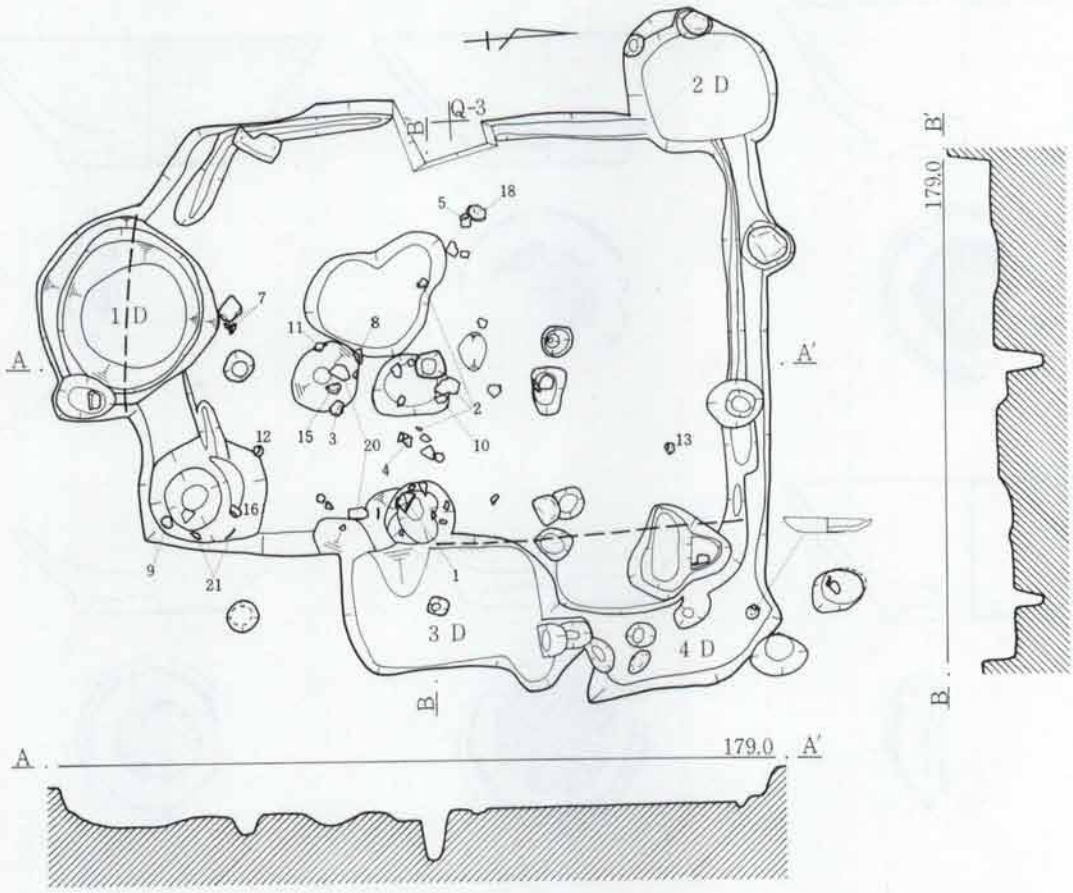
**4号住居跡**（第46～48図）

調査区の北方、P２・３グリットに跨がって、標高178.80m前後の平坦部に検出された。北方に４号住居跡が隣接する。形状は南北に長い方形を呈し、北東部分に張り出しを設ける。土坑が南辺に１号土坑、北西隅に２号土坑、東辺のカマド部分と北東部分で３・４号土坑が重複する。規模は南北長５m前後、東西長3.4mを測り、北東部分の張り出しは東辺より55cm程東に突出する。主軸はほぼ東西にとる。壁高は20～30cm程残存する。床面は平坦である。周溝は東辺を除いて検出された。柱穴は明確でない。貯蔵穴は南東隅にあり、95×85cmの円形を呈し、深さ30cmを測る。カマドは東辺の中央やや南寄りに設けられ、煙道部分を３号土坑に切られている。

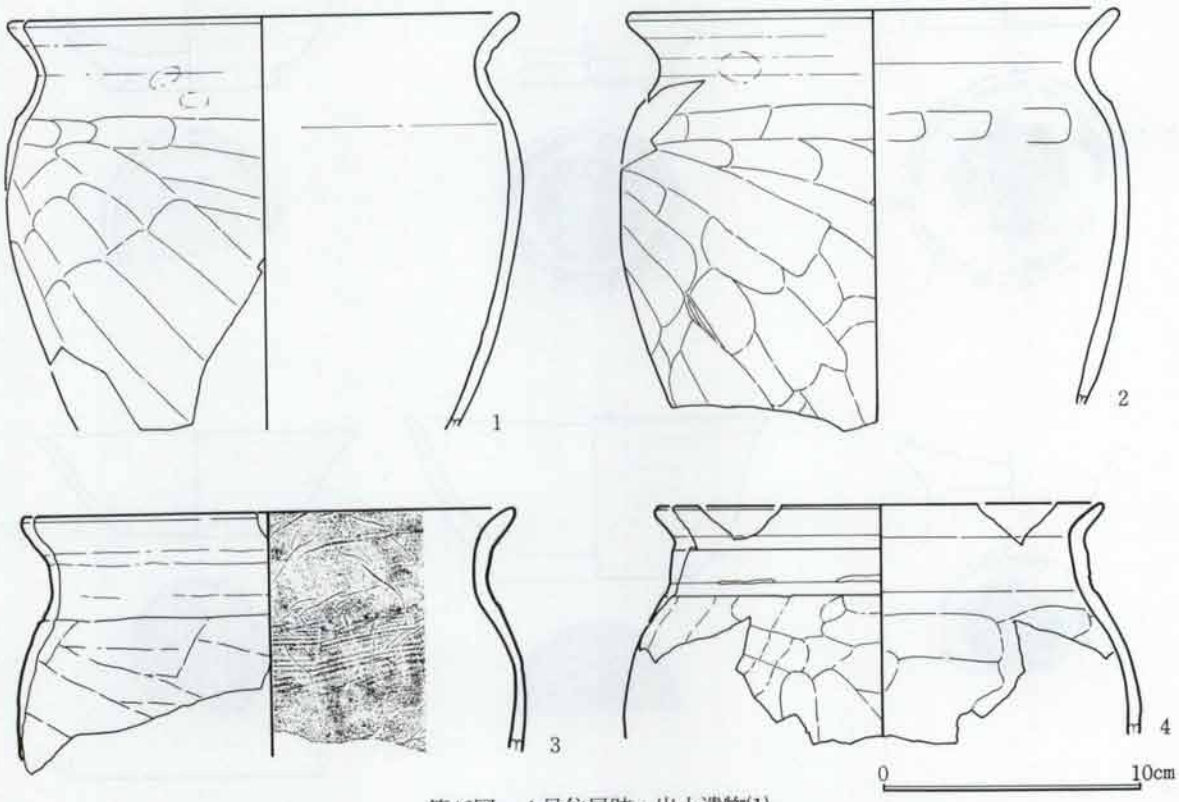
遺物は北東と南西部分を除いてカマド・その前面・貯蔵穴周辺に集中し、甕・高台付碗・坏・灰釉陶器・墨書土器片・香炉形土器・仏鉢片と緑釉陶器の小破片等が出土した。甕はカマドとその前面にある。

４号住居跡出土遺物観察表

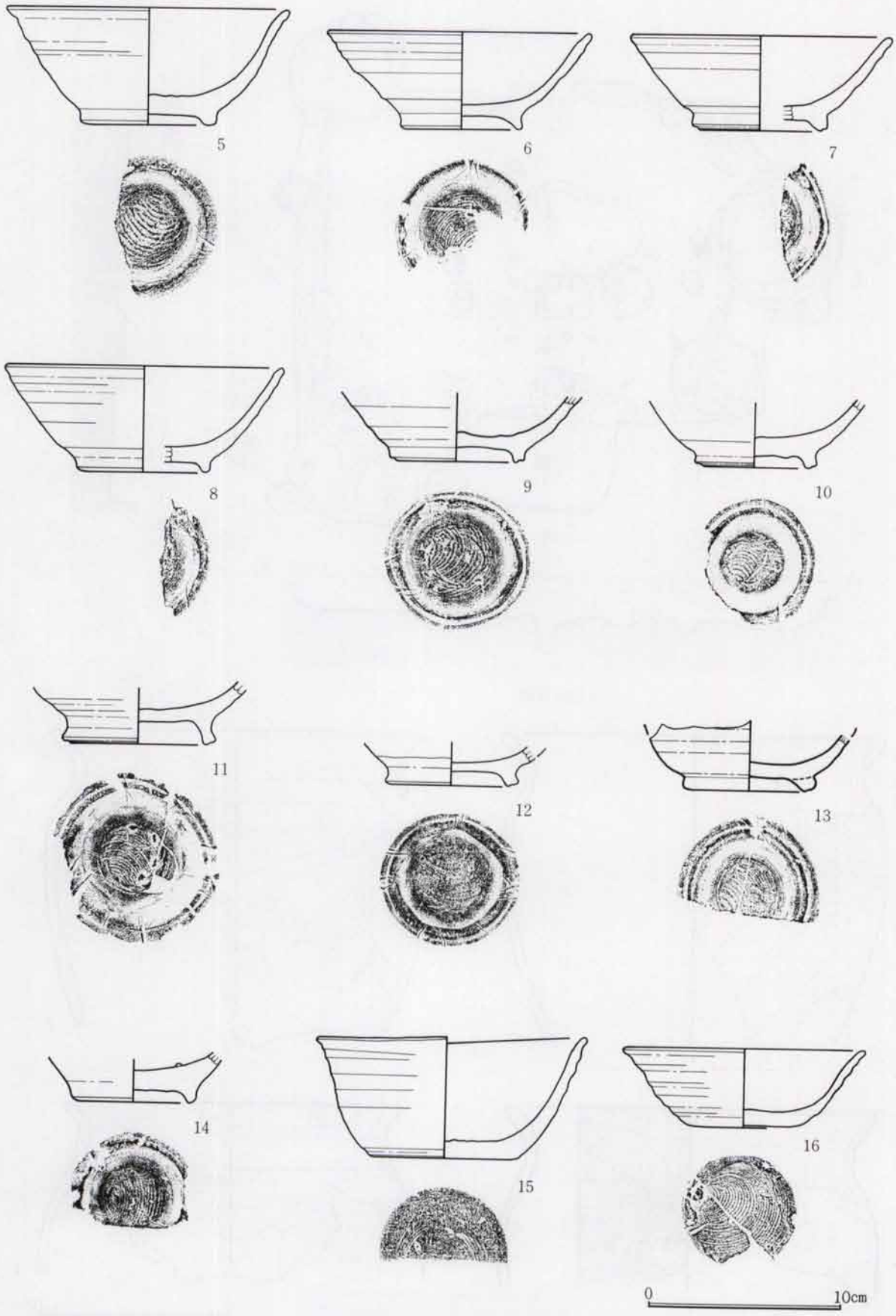
| No. | 器　種 | 口　径 | 器　高 | 底　径 | 備　考 |
|---|---|---|---|---|---|
| 1 | 甕(土師質) | (19.8) | (16.1) | | 酸化焔 |
| 2 | 甕(土師質) | (18.9) | (15.5) | | 酸化焔 |



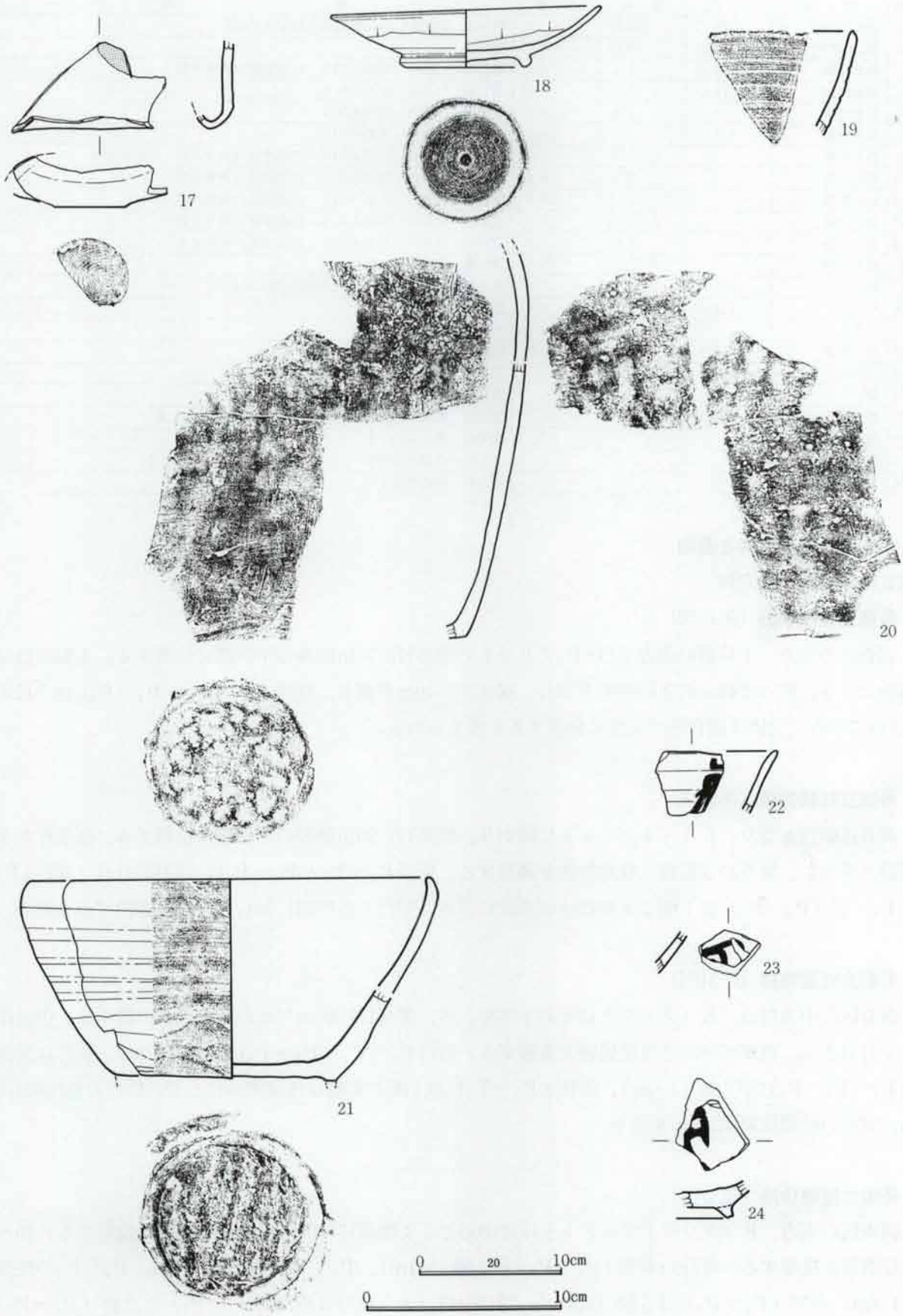

4 号住居跡




第46図　4 号住居跡・出土遺物(1)




第47図　4号住居跡出土遺物(2)




第48図　4号住居跡出土遺物(3)

| No. | 器　種 | 口　径 | 器　高 | 底　径 | 備　　考 |
|---|---|---|---|---|---|
| 3 | 甕(土師質) | (19.2) | (10.3) | | 酸化焔　内面の一部に櫛歯状工具による調整 |
| 4 | 甕(土師質) | (17.2) | ( 9.5) | | 酸化焔 |
| 5 | 高台付碗 | (14.4) | 6.1 | 6.4 | 還元焔　付高台　底部糸切り　内面底部は渦巻き痕 |
| 6 | 高台付碗 | (13.6) | 5.1 | (5.9) | 還元焔　付高台　底部糸切り |
| 7 | 高台付碗 | (13.4) | 4.9 | (6.3) | 還元焔　付高台　底部糸切り |
| 8 | 高台付碗 | (13.7) | 5.5 | (6.5) | 還元焔　付高台　底部糸切り |
| 9 | 高台付碗 | | (3.5) | 6.1 | 還元焔　付高台　底部糸切り　内面底部は渦巻き痕　内面に墨書 |
| 10 | 高台付碗 | | (3.3) | 5.6 | 還元焔　付高台　底部糸切り　内面底部は渦巻き痕 |
| 11 | 高台付碗 | | (2.9) | 6.9 | 還元焔　付高台　底部糸切り　内面底部は渦巻き痕 |
| 12 | 高台付碗 | | (2.1) | 6.3 | 還元焔　付高台　底部糸切り　内面底部は渦巻き痕 |
| 13 | 高台付碗 | | (2.6) | 5.6 | 還元焔　付高台　底部糸切り　体部は丸みを呈する |
| 14 | 高台付碗 | | (2.2) | (5.8) | 還元焔　付高台　底部糸切り |
| 15 | 碗 | (13.9) | 6.4 | 7.8 | 還元焔 底部糸切り　底部の周縁は擦れている |
| 16 | 坏 | (12.4) | 4.1 | 5.5 | 還元焔 底部糸切り |
| 17 | 耳皿 | | | 3.9 | 灰釉　底部糸切り |
| 18 | 高台付皿 | 13.9 | 4.0 | 6.2 | 灰釉　付高台 |
| 19 | 仏鉢片 | | | | 還元焔　体部外面に浅い沈線が平行に巡る |
| 20 | 甕 | | | | 酸化焔気味　内面は指頭圧痕 |
| 21 | 香炉形土器 | (21.0) | (10.5) | 11.4 | 酸化焔　底部周縁に脚部の接合痕 内面下半に剝がれ痕 |
| 22 | 墨書土器 | | | | 還元焔　墨書判読不明 |
| 23 | 墨書土器 | | | | 還元焔　墨書判読不明 |
| 24 | 墨書土器 | | | | 還元焔　墨書判読不明 |

### (3) 中近世の遺構と遺物

#### 掘立柱建物跡・柱穴列

**1号掘立柱建物跡**（第49図）

調査区の北方、1号溝の西方でO・$P_1$グリットの標高178.70m前後の平坦部に位置する。主軸はほぼ東西にとり、柱穴は40cm前後の円形を呈し、深さ30～40cmを測る。柱間（$P_1$－$P_2$－$P_3$－$P_4$）は7尺の2.1mである。主体は調査区の南方に存在すると考えられる。

**2号掘立柱建物跡**（第50図）

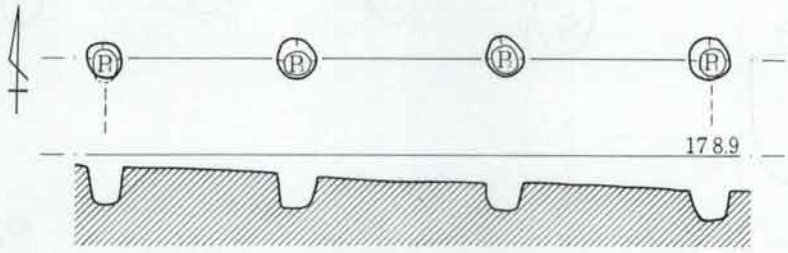
調査区の西方寄り、L3・4グリットに跨がり、標高177.90m前後の平坦部に位置する。西側柱が2号溝と重複し、東方に3号掘立柱建物跡が隣接する。桁行$P_1$～$P_4$と$P_5$～$P_8$は3間(5.7m)、梁行（$P_1$－$P_8$）と（$P_4$－$P_5$）は1間で主軸はほぼ真北にとる。桁行の各柱間1.9m、梁行の柱間2.7mを測る。

**3号掘立柱建物跡**（第51図）

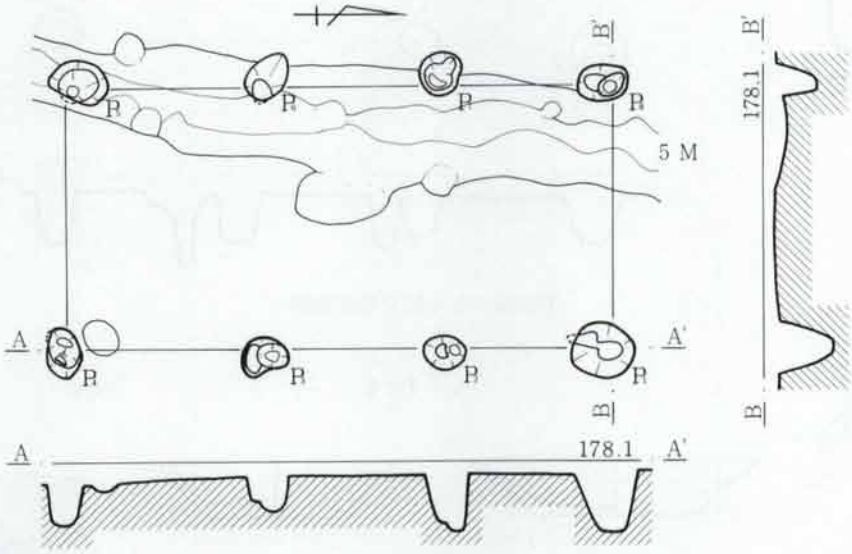
調査区の中央付近、K3グリットにその主体を占め、標高177.80m付近の平坦部に位置する。中央部分で21号土坑、南東部分が2号住居跡と重複する。桁行$P_1$～$P_4$と$P_5$～$P_8$は3間(5.7m)、梁行は東側（$P_1$－$P_9$－$P_8$）が2間（3.6m）、西側（$P_4$－$P_5$）が1間で主軸はほぼ東西にとる。桁行の各柱間1.9m、梁行の柱間は東側1.8mを測る。

**4号掘立柱建物跡**（第52図）

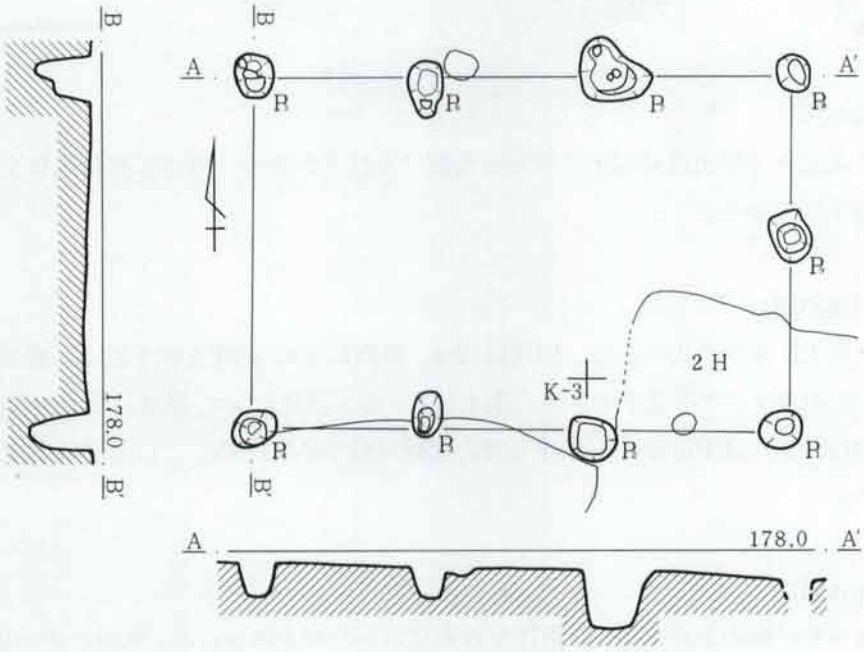
調査区の東方、E3グリットポイントをほぼ中心として標高177.00m付近の平坦部に位置する。10・12号溝等と重複する。桁行の東側（$P_1$～$P_3$）は2間（5.4m）、$P_1$～$P_2$の柱間は3.6m、$P_2$～$P_3$の柱間は1.8m、西側（$P_5$～$P_8$）は3間（5.4m）で柱間は1.8m、梁行は南側（$P_3$～$P_5$）と北側（$P_8$～$P_1$）は4.2mを測る。主軸は南北にとる。



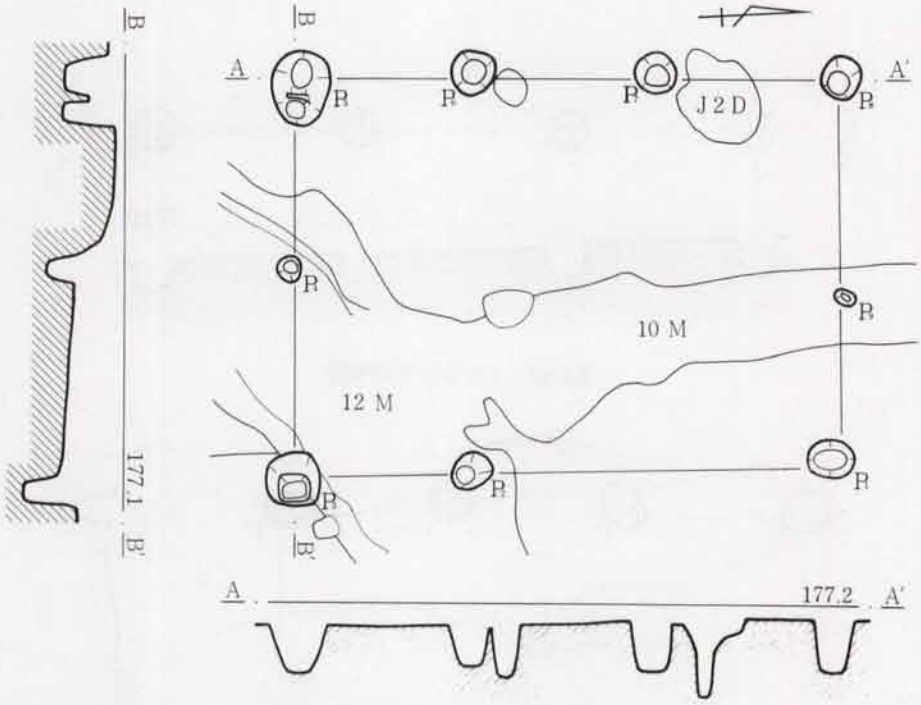

第49図　1号掘立柱建物跡



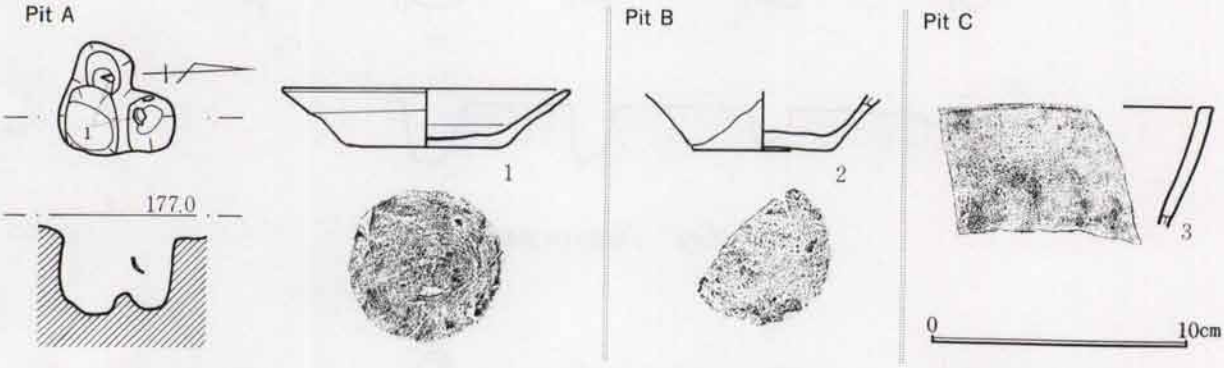

第50図　2号掘立柱建物跡




第51図　3号掘立柱建物跡




第52図　4号掘立柱建物跡




第53図　柱穴出土遺物

**1号柱穴列**（第46図）

4号住居跡の北辺と2号土坑に偏平に河原石を設ける柱穴がある。周辺に根石を有する柱穴は確認されず、規模等は不明である。

**柱穴出土遺物**（第53図）

1のカワラケはPit Aから出土した。口径11.2cm、器高2.3cm、底径6cmを計る。底部は糸切り、内面は指撫を施す。2のカワラケ片はPit Bから出土した。復元底径5.5cm、底部は糸きりで板目状圧痕が残る。3の土鍋の口縁部片はPit Cから出土した。口縁は緩やかに内湾し、口唇部は平坦である。器肉は5㎜前後と薄い。

**溝　跡**（第54～56図）

当遺跡からは14条が検出された。その走行から南北のものが主体を占め、東西と囲い状のものがある。

### 1号溝（第54図）

調査区の西方、3号住居跡を切ってほぼ南北方向に構築されている。溝と呼称するよりは堀とするべきであろう。幅は調査区の北方が2m、南方が3mとなり、南方に連れて広がっている。底面も北方～南方に傾斜し、北と南では50cmの差を測る。断面形は薬研を呈し、底面は20cm前後に狭まっている。O3グリット付近では幅を広げて西方に突出部を設けている。この部分の西壁の断面形は階段状を呈している。埋没後に東壁沿いに溝が掘られたことが覆土の観察からみられる。遺物は北方の覆土から陶器の小碗、南方から古銭が出土した。陶器は上層に掘られた新しい溝、古銭はそれ以前に帰属すると考えられる。中世～近世に使用されたと考えられる。

陶器の小碗（No.1）は口径7.3cm、器高3.5cm、底径3.8cmを計り、高台脇から内面に長石釉を施している。古銭（No.2）は半分が欠け、徳と寶が残る。書体から1433年に初鋳された明の宣徳通寶である。

### 2号溝

調査区の西方、グリットNラインの南北方向に走行する。幅は1.4～2m前後で、底面は平坦な酸化した硬化面である。出土遺物は平安時代の須恵器・灰釉陶器片等が散在した。

No.3は須恵器壺の胴部片、No.4とNo.5は須恵器の口縁部片で、No.4は波状文を施す。No.6～No.11は高台付碗である。No.6とNo.9は還元焔焼成で、胎土には細かい雲母粒が多く含まれている。No.8の内面欠け部分には糸切りが残る。No.10は高台が剝がれ、底部外面には爪痕が連続する。No.11は土師質で、体部外面の下半はヘラ削りの調整を施す。

No.12の灰釉陶器の碗は口径15.5cm、器高4.7cm、底径7.6cmを計る。高台の外面下半に稜を設け、内面は内湾する。No.13の灰釉陶器の皿は口径15.8cm、器高3.3cm、底径7.5cmを計る。体部下半を回転ヘラ削りを施す。羽釜（No.14）の口縁部片は復元口径20.4cmを計る。

砥石（No.15）は4面を使用し、先端部が撥形となる。重量68gである。縄文時代の磨石（No.16）は表裏面を磨面とし、中央部分に凹を設け、先端部は敲打痕がある。

### 3号溝

調査区の西方で2号溝の東に接して併走する。出土遺物は皆無であった。

### 4号溝

調査区の中央やや西寄りのM1～M4グリットに検出され、南先端部がM1グリットにある。標高178m付近の平坦部に位置あり、走行は南北で、北方に連れてやや西方にとる。幅は40～60cm、深さ5～12cmを測り、底面は緩やかな南傾斜である。出土遺物は皆無であった。

### 5号溝

調査区の中央やや西寄りのL2～L4グリットに検出され、南先端部がL2グリットにある。走行は南北で、北方に連れてやや東寄りにとる。幅は南方で60cm、北方で1mと広がる。深さも北方に連れて深くなり、底面は緩やかな起伏があるが平坦気味である。出土遺物は、近世の所産である擂鉢と陶磁器の皿がある。　擂鉢（No.17）は焼き締陶器で、内面の擦り目は1巾6条で密に施す。色調は紫褐色で胎土に粗砂粒を多く含んでいる。丹波・信楽系の所産と考えられる。陶磁器（No.18）は復元口径13cm、器

高3.1cm、復元底径6.5cmを計り、花鳥文を描く。近世に帰属すると考えられる。

### 6号溝

調査区の中央やや東寄りに検出された。走行は南方のＧ３グリット付近では開口し、Ｇ３～Ｈ３グリット部分が東西に直線的で、Ｉ３グリットからカーブして北西方向にとる。全体像は不明であるが12号溝に似る様に方形の囲い状を呈するのであろうか。掘り込みは内周から外周に向けてスロープ状に緩やかで、外周に沿って幅の狭い掘り込みが部分的に残る。調査区の北壁付近で幅2.4m、直線的な幅の狭い部分では60cm、深さ20cm前後を測る。出土遺物は一枚の古銭がある。中世に帰属すると考えられる。

№19の古銭は北宋の1086年に初鋳された元祐通寶である。

### 7号溝

調査区の東方、Ｆ１～Ｆ４グリットに検出された。走行は南北で、南先端部が11号溝と接する。幅は90cm深さ10cm前後で推移する。底面は緩やかに南傾斜している。出土遺物は皆無であった。

### 8号溝

調査区の東方、７号溝と９号溝の間を繋ぐ様に７号溝に直交する。幅は80cm、深さ５cmを測る。出土遺物は皆無であった。

### 9号溝

調査区の東方、７号溝と80～２m前後の間隔で南方に併走する。幅は80cm～1.2m、深さ５cmを測る。底面は緩やかに南傾斜している。出土遺物はカワラケ片（№20）がある。

カワラケは復元口径8.8cm、器高1.7cm、復元底径5.4cmを計る。底部は糸切り。

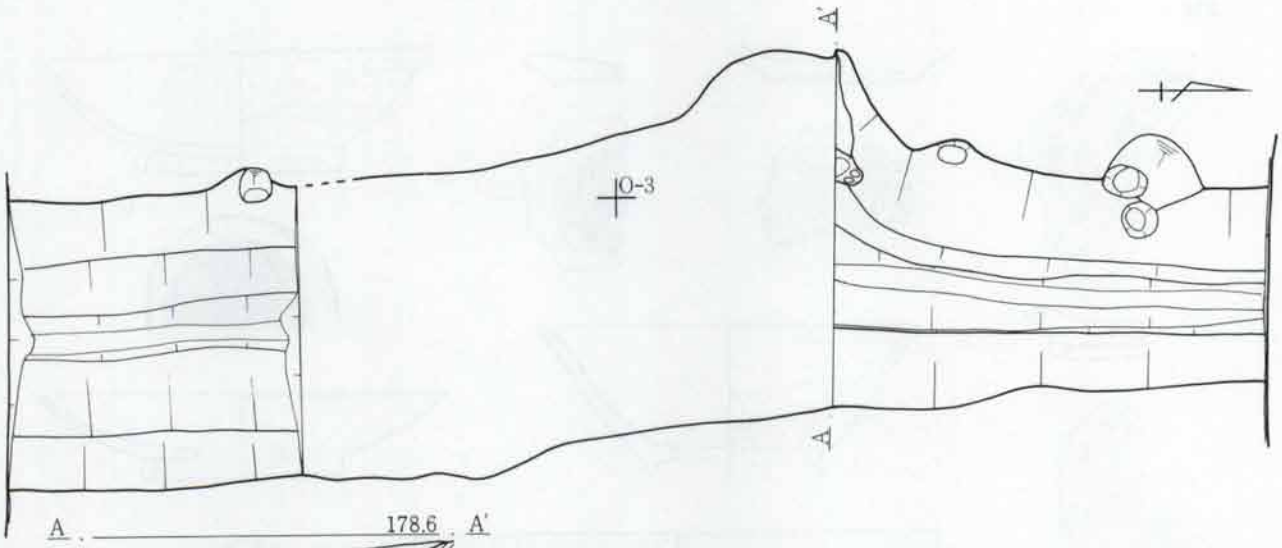
### 10号溝

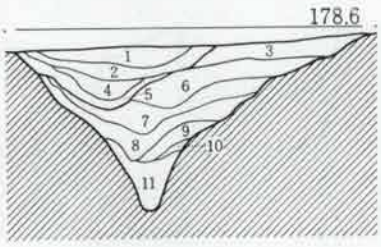
調査区の東方、Ｅグリットラインに検出され、南北に走行する。12号溝や59号土坑と重複する。９号溝とは4.6～4.9m前後の間隔がある。幅は80cm～1.3m、南方で50cmと狭くなり、深さは北方で15cm、南方で数cmを測る。底面は多少起伏があるが、全体に南傾斜している。出土遺物は陶器・砥石・碁石・煙管の吸い口がある。近世に帰属すると考えられる。

№21の陶器底部片は底径3.8cmで、中央に焼成後に開けられた穿孔があり、内面には鉄釉が施され、高台～底部は露胎。瀬戸・美濃産と思われる。№22の砥石は二面を使用し、他面にはノミ痕が残る。中央部分から先端部がスロープ状となる。長さ6.9cm、幅3.1cm、重量97ｇを計り、石材は流紋岩。№23は碁石？に使用したと考えられるもので、やや歪んだ楕円形を呈する。径2.1×1.8cm、重量３ｇを計る。№24は煙管の吸い口部分で長さ3.9cm、重量４ｇを計る。羅宇に接続する部分には９条の溝が施されている。

### 11号溝

調査区の東方、南壁沿いに検出された。主軸はほぼ東西方向を呈し、４号井戸、12・13号溝等と重複する。幅は西方で60cm前後を測り、東に連れて広がる。深さも東方に連れて増している。底面は緩やかに東傾斜している。出土遺物は瓦片・砥石・碁石がある。

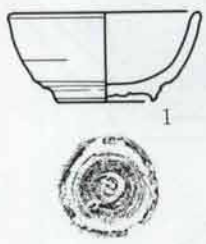


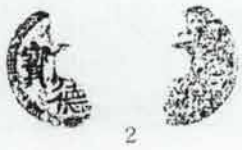




1号溝土層説明

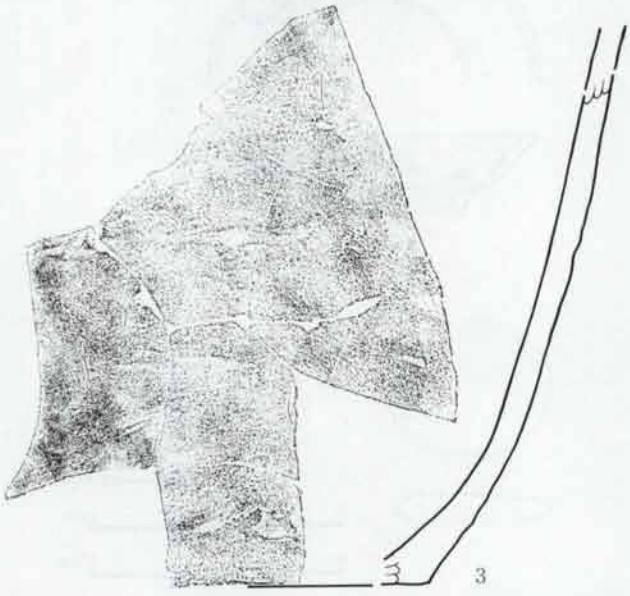
1　褐色土（サラッとし、小ロームBを含む）　2　砂層（褐色土とロームBを含む）
3　褐色土　4　砂層　5　暗褐色土（灰褐色粘質土を含む）
6　褐色土（斑点状にロームBを多く含む）　7　暗褐色土（密に締まる）
8　暗褐色土　9　褐色土（ローム粒を含む）　10　褐色土（ローム粒を多く含む）
11　ロームB・ローム粒・褐色土の混合土

1M

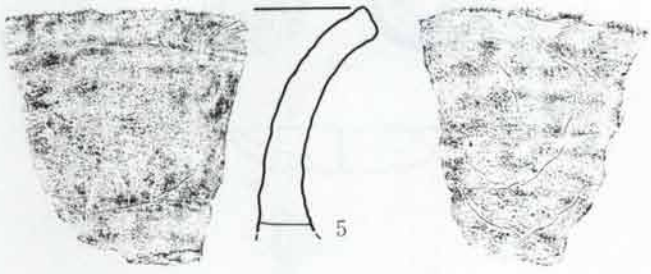


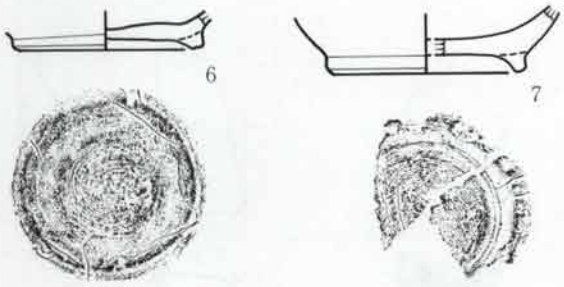




0　2　5cm



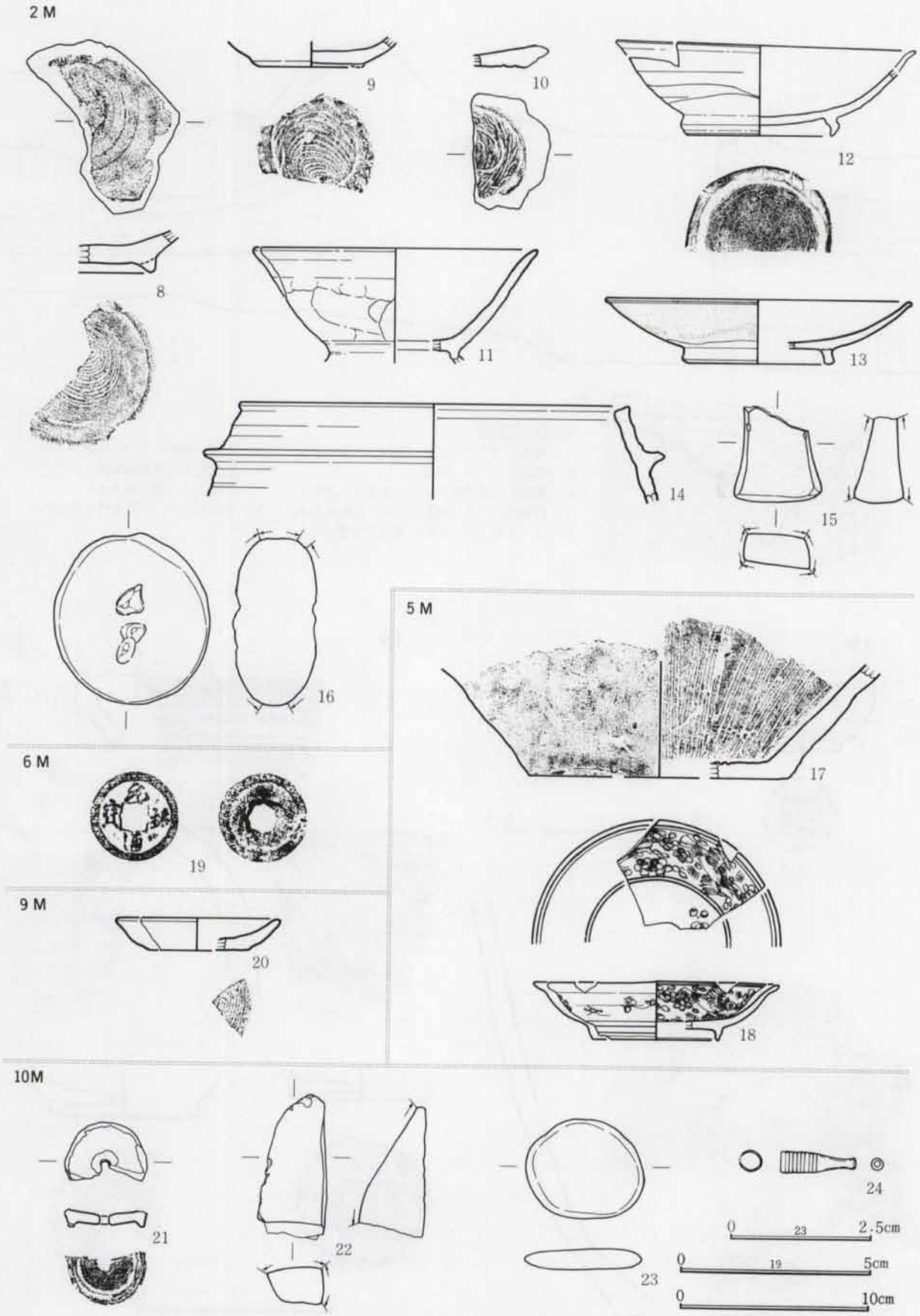

2M



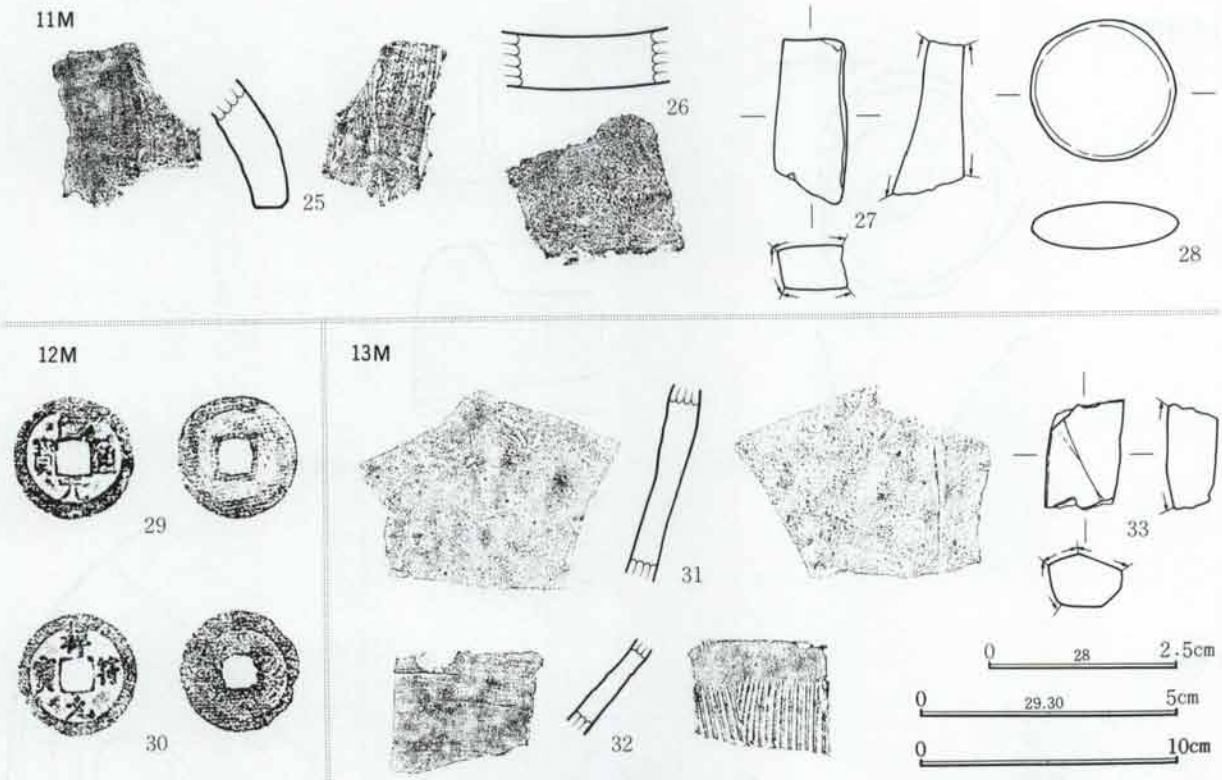




0　10cm

第54図　1号溝、1・2号溝出土遺物




第55図　2～10号溝出土遺物




第56図　11～13号溝出土遺物

№25の瓦は丸瓦の小片。厚さ1.6cmで、けずり口が残り、二次焼成を受けている。№26の瓦は軒平瓦の小片で厚さ2.1cm。№27の砥石は二面を使用し、長さ6.4cm、幅2.8cm、重量60ｇを計り、石材は流紋岩である。№28の碁石は土製である。径は1.9×2.0cm、厚さ６㎜でレンズ状、重量２ｇを計る。これらは近世の所産と考えられる。

### 12号溝

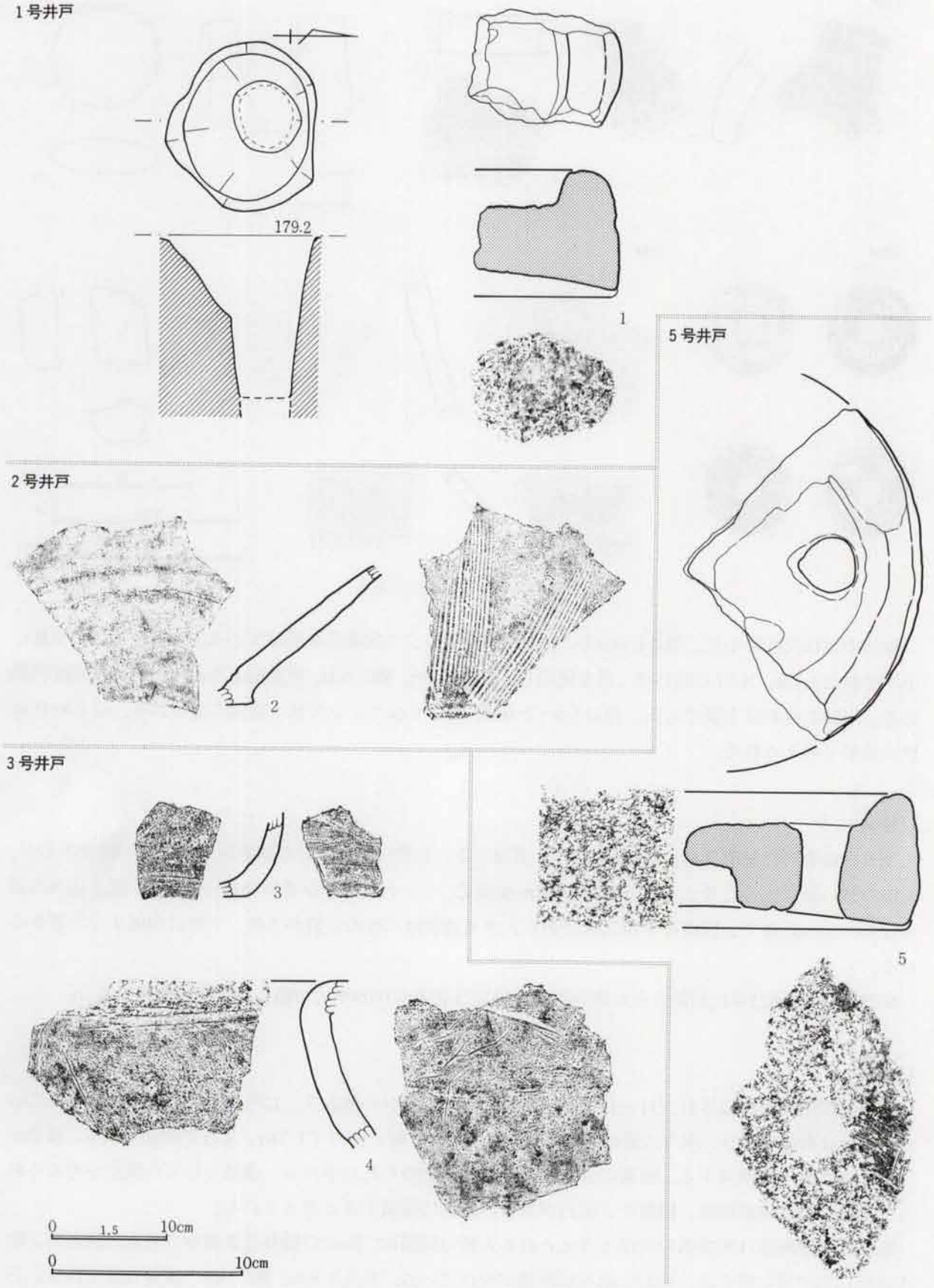
調査区の東方に検出され、11･13号溝等と重複する。形状は南方部分が調査区外の為に不明であるが、方形の囲い状に巡ると考えられる。幅は2.2m前後で、コーナー部分がやや狭まっている。掘り込みの深さは20～30cm前後で、底面は平坦気味である。出土遺物は二枚の古銭がある。中世に帰属すると考えられる。

№29は唐代の621年に初鋳された開元通寶。№30は北宋の1009年に初鋳された祥符元寶である。

### 13号溝

調査区の東方で検出され、11・12号溝と重複する。12号が一番古く、13号、11号の順に構築されている。走行は南北にとり、南方に連れて南西方向に曲がる。幅は南方で1.7m、北方で80cmを測り、緩やかに南から北方向に傾斜する。底面には数枚の硬化面が認められた事から、通路としての機能が考えられる。出土遺物は焼締陶器、擂鉢片と砥石がある。近世に帰属すると考えられる。

№31の焼締陶器は知多系の所産と考えられる大甕の胴部片。№32の擂鉢は鉄釉が内外面に施され、胎土は灰白色で密に締まる。№33の砥石は両端が欠けている。長さ4.8cm、幅2.9cm、重量12ｇを計る。石材は流紋岩。




第57図　井戸・出土遺物

### 14号溝

調査区の東方、南壁沿いに11号溝と南側で併走して検出された。幅１m前後、深さ20cm前後を測る。出土遺物は皆無であった。

### 井戸跡（第57図）

本遺跡からは５本の井戸が検出されたが、いずれも底面までの調査には至らなかった。１号井戸を除いて東方に４本がある。１と３号が上部を開口するロート状の掘り込みを呈し、他は下方に連れて窄まる円筒形である。

井戸跡

| No. | 検出場所 | 平面形 | 断面形 | 規模 | 深さ | 出土遺物 | 時期 |
|---|---|---|---|---|---|---|---|
| 1 | M・N２グリット | 歪円形 | ロート状 | 2.38 × 2.10 | (2.30以上) | 石臼（上臼） | 江戸期 |
| 2 | B２グリット | 楕円形 | 円筒形 | 1.50 × 1.25 | (1.36以上) | 擂鉢 | 17世紀代 |
| 3 | C・D３グリット | 楕円形 | ロート状 | (2.65)×(1.30) | (2.20以上) | 土鍋・大甕片（知多系） | 15世紀代 |
| 4 | D・E１グリット | 楕円形 | 円筒形 | 1.80 × 1.55 | (2.35以上) | | |
| 5 | F２グリット | 円形 | 円筒形 | 1.2前後 | (2.27以上) | 石臼（上臼） | 江戸期 |

### 出土遺物（第57図１～５）

１の石臼（上臼）は片減りが著しく、下面の擦り目は消滅している。２の擂鉢片は錆釉を施す。擦り目は一巾13条。胎土は淡黄白色。美濃系の大窯期の所産。３の土鍋片は、体部の立ち上がり部分に篦状工具による調整が施され、やや丸みを帯びている。16世紀以前の所産と考えられる。４は口縁の縁帯部片が欠損して詳細は不明であるが、N字形口縁以前の様相を呈すると考えられる。５の石臼（上臼）は全体の３分の１弱が残存する。下面の擦り目はほとんど消滅し、一部に砥石として使用されたと考えられる研磨面がある。火受けによる二次焼成で部分的に変色している。

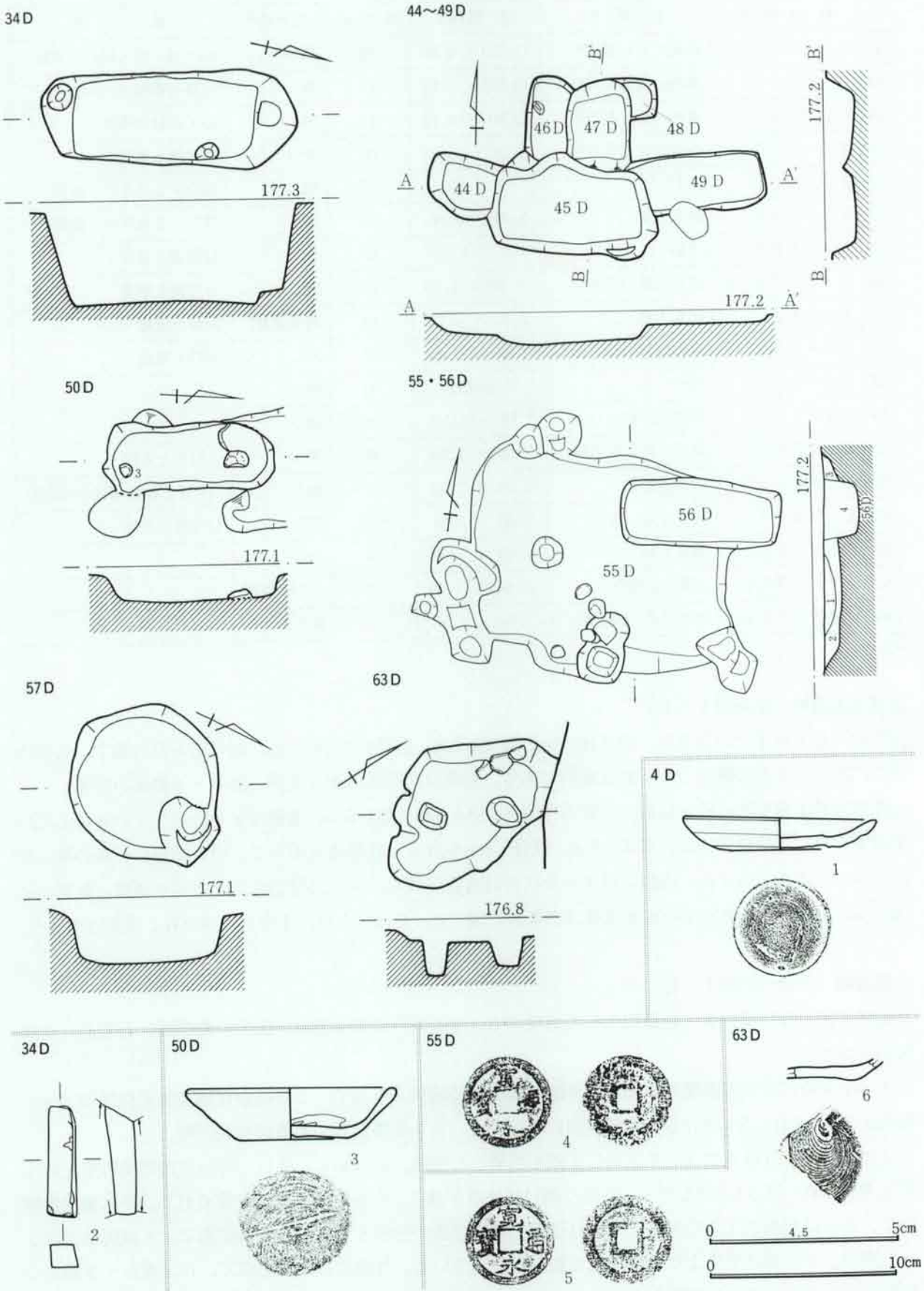
### 土坑（第58図）

形状が長方形を呈するものが圧倒的に多く、その大半が東西か南北方向に長軸を呈している。次に方形のものがあり、円形が続く。単独のものが多いが、７号溝の西に37～49Dの集中箇所が見られる。時期決定は出土遺物も少ない為に不明のものが多いが、中世～江戸期の所産と考えられる。

土坑一覧

| No. | 検出場所 | 平面形 | 規模(m) | 深さ(cm) | 出土遺物 | 備考 |
|---|---|---|---|---|---|---|
| 1 | P２グリット | 円形 | 1.40 × 1.50 | 40 | 無し | ４号住居跡と重複 |
| 2 | P・Q３グリット | 隅丸方形 | 1.15 × 1.00 | 40 | 無し | ４号住居跡と重複 |
| 3 | P２・３グリット | 南北に長い長方形 | 1.70 × 1.05 | 38 | 無し | ４号住居跡と重複 |
| 4 | P３グリット | 歪長方形 | 1.45 × 不明 | 10 | 美濃系丸皿 | ４号住居跡と重複 |
| 5 | Q３グリット | 東西に長い楕円形 | 1.50 × 0.85 | 25 | 無し | |
| 6 | P３・４グリット | 方形 | 1.20 × 0.70 | 23 | 無し | ７Dと重複 |
| 7 | P３グリット | 方形 | 1.05 × 0.80 | 15 | 無し | ６・８Dと重複 |
| 8 | P３グリット | 東西に長い長方形 | 1.35 × 0.60 | 26 | 無し | ７・９Dと重複 |

| No. | 検出場所 | 平面形 | 規模(m) | 深さ(cm) | 出土遺物 | 備考 |
|---|---|---|---|---|---|---|
| 9 | P3グリット | 東西に長い長方形 | 1.78×0.5前後 | 22 | 無し | 8Dと重複 |
| 10 | N2グリット | 南北に長い長方形 | 1.50 × 0.65 | 35 | 無し | 11Dと重複し、南に有段 |
| 11 | N2グリット | 南北に長い長方形 | 1.50 × 0.85 | 23 | 無し | 10Dと重複 |
| 12 | N3グリット | 円形 | 1.20前後 | 35 | 無し | |
| 13 | M4グリット | 東西に長い長方形 | 1.50 × 0.70 | 10 | 無し | 14Dと重複 |
| 14 | M4グリット | 東西に長い長方形 | 1.20 × 0.65 | 10 | 無し | 13Dと重複 |
| 15 | M3・4グリット | 南北に長い長方形 | 2.65 × 0.80 | 24 | 無し | |
| 16 | L1・2グリット | 東西に長い楕円形 | 1.15 × 0.85 | 27 | 無し | 17Dと重複 |
| 17 | K・L1グリット | 東西に長い長方形 | 1.30×0.45前後 | 13 | 無し | 16Dと重複 |
| 18 | L2グリット | 方形 | 0.95 × 0.90 | 25 | 無し | 19Dと重複 |
| 19 | K2グリット | 南北に長い楕円形 | 1.30×0.90前後 | 5 | 無し | 18Dと重複 |
| 20 | K3グリット | 円形 | 1.25 × 1.20 | 20 | 無し | |
| 21 | J・K3グリット | 東西に長い長方形 | 2.55 × 0.60 | 24 | 無し | |
| 22 | J4グリット | 東西に長い長方形 | (2.10)×0.60前後 | 14 | 無し | |
| 23 | K2グリット | 東西に長い長方形 | 1.45 × 0.55 | 9 | 無し | |
| 24 | K1グリット | 東西に長い長方形 | 1.23×0.50前後 | 13 | 無し | |
| 25 | K1グリット | 東西に長い長方形 | (1.70)×0.50前後 | 20 | 無し | |
| 26 | J3グリット | 南北に長い楕円形 | 2.60×0.55前後 | 20 | 無し | |
| 27 | I3グリット | 南北に長い長方形 | 2.05 × 0.75 | 25 | 無し | |
| 28 | J2グリット | 東西に長い長方形 | 1.00以上×0.50前後 | 34 | 無し | |
| 29 | I2グリット | 隅丸方形 | 1.25 × 0.90 | 25 | 無し | |
| 30 | H・I3グリット | 東西に長い長方形 | 1.96×0.80前後 | 80 | 無し | |
| 31 | H・I4グリット | 方形？ | 1.70 × ？ | 30 | 無し | |
| 32 | H4グリット | 方形？ | 1.70 × ？ | 20 | 無し | |
| 33 | H3グリット | 東西に長い長方形 | 0.95 × 0.45 | 45 | 無し | |
| 34 | G3・4グリット | 南北に長い長方形 | 1.85 × 0.65 | 70 | 砥石 | |
| 35 | H2グリット | 隅丸方形？ | (2.00)×(1.50) | 12 | 無し | 36Dと重複 |
| 36 | H2グリット | 南北に長い長方形 | (1.90)× 0.85 | 22 | 無し | 35Dと重複 |
| 37 | H2グリット | 東西に長い長方形 | 0.90 × 0.70 | 17 | 無し | 38Dと重複 |
| 38 | G・H2グリット | 東西に長い長方形 | 1.85 × 1.25 | 21 | 無し | 37Dと重複 |
| 39 | G2グリット | 方形 | 1.10 × 1.10 | 50 | 無し | 38・40Dと重複 |
| 40 | G2グリット | 東西に長い長方形? | (1.50)× 0.95 | 30 | 無し | 39・41～43Dと重複 |
| 41 | G2グリット | 方形？ | ？ ？ | 20 | 無し | 40Dと重複 |
| 42 | G2グリット | 南北に長い楕円形? | (1.50)×(1.10) | 10 | 無し | 39・40・43Dと重複 |
| 43 | G2グリット | 東西に長い長方形 | 1.80 × 0.85 | 20 | 無し | 40・42Dと重複 |
| 44 | H2グリット | 東西に長い長方形 | (1.10)× 0.90 | 25 | 無し | 45Dと重複 |
| 45 | G・H2グリット | 東西に長い長方形 | 2.40 × 1.45 | 38 | 無し | 44・46・47・49Dと重複 |
| 46 | H2グリット | 南北に長い長方形 | (1.20)×(0.70) | 14 | 無し | 45・47Dと重複 |


34D
177.3
44～49D
46D
47D
48D
44D
45D
49D
A
A'
B
B'
177.2
50D
177.1
55・56D
56D
55D
57D
177.1
63D
176.8
4D
1
34D
2
50D
3
55D
4
5
63D
6
0
4.5
5cm
0
10cm

第58図　土坑・出土遺物

| No. | 検出場所 | 平面形 | 規模(m) | 深さ(cm) | 出土遺物 | 備考 |
|---|---|---|---|---|---|---|
| 47 | G 2グリット | 南北に長い長方形 | (1.35)× 0.90 | 40 | 無し | 45・46・48・49Dと重複 |
| 48 | G 2グリット | 東西に長い長方形 | (0.75)× 0.60 | 15 | 無し | 47Dと重複 |
| 49 | G 2グリット | 東西に長い長方形 | (2.00)× 0.85 | 14 | 無し | 45・47Dと重複 |
| 50 | F 3・4グリット | 南北に長い長方形 | 1.25 × 0.60 | 26 | カワラケ | 7号溝と重複 |
| 51 | F 2グリット | 方形 | × 1.85 | 25 | 無し | 52D・5号井戸と重複 |
| 52 | F 2グリット | 隅丸方形 | 2.40 × 2.05 | 65 | 無し | 51D・5号井戸と重複 |
| 53 | F・G 1グリット | 方形 | ? × 1.10 | 17 | 無し | 14号溝と重複 |
| 54 | E・F 4グリット | 南北に長い長方形 | (1.30)× 1.20 | 27 | 無し | 9号溝と重複 |
| 55 | E 3・4グリット | 隅丸方形 | 2.45 × 2.10 | 18 | 寛永通寶 | 56Dと重複 |
| 56 | E 3・4グリット | 東西に長い長方形 | 1.65 × 0.65 | 33 | 無し | 55Dと重複 |
| 57 | E 3グリット | 円形 | 1.20前後 | 50 | 無し | |
| 58 | E 2グリット | 歪隅丸方形 | 1.10 ×(1.10) | 20 | 無し | |
| 59 | D 1グリット | 東西に長い長方形 | 1.95 × 1.30 | 40 | 無し | 8号溝と重複 |
| 60 | D 2グリット | 隅丸方形 | 1.20 × 1.05 | 13 | 無し | 12号溝と重複、縄文の可能性。 |
| 61 | C・D 2グリット | 南北に長い方形 | 1.60 × 1.00 | 不明 | 無し | 12号溝と重複 |
| 62 | D 3グリット | 隅丸方形 | 1.05 × 1.05 | 28 | 無し | |
| 63 | C 2・3グリット | 歪隅丸三角形 | (2.90)× 1.90 | 25 | カワラケ・寛永通寶 | |
| 64 | C 1・2グリット | 東西に長い長方形 | 1.20 × 0.60 | 10 | 無し | |

**土坑出土遺物**（第58図１～６）

１の４号土坑出土の丸皿は、口径10.2cm、器高1.7cm、底径5.2cmを計る。削り込み高台風で、底部内面に凸部を有する。底部の内外面は露胎である。釉薬は透明感のある灰釉。瀬戸・美濃系の所産。

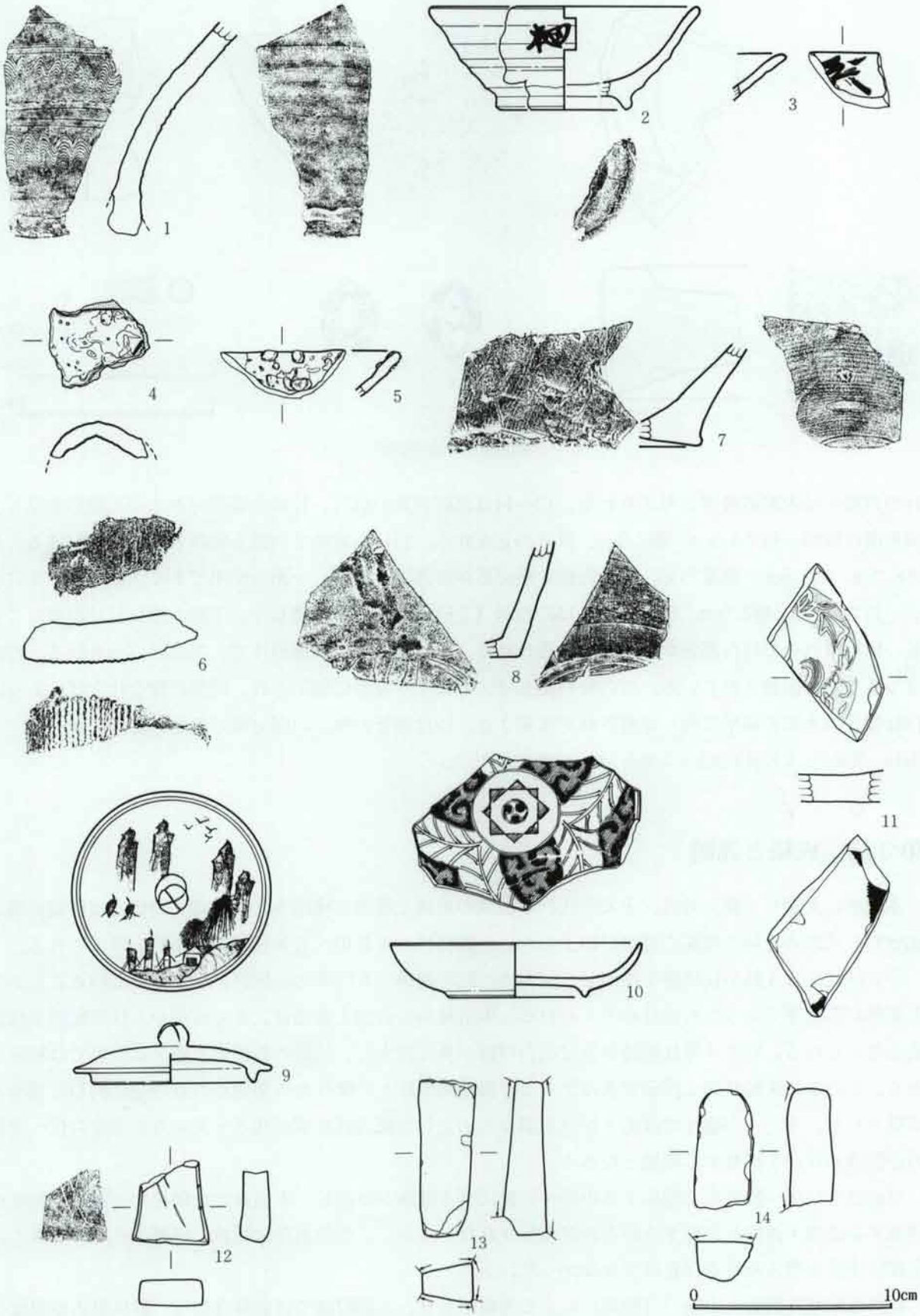
２の34号土坑出土の砥石は細長い直方体で、長さ6.1cm、幅1.5cm、重量22ｇを計る。３の50号土坑出土のカワラケは口径10.8cm、器高2.8cm、底径5.8cmを計る。底部は糸切りで、中央部分に一条の深い切れ込みが焼成後に施され、内面にはタール状の付着物が残る。４の55号土坑出土の寛永通寶は新寛永に属する。５の63号土坑出土の寛永通寶は古寛永に属する。６は同土坑出土のカワラケ片。底部は糸きり。

**一括遺物**（第59～60図１～19）

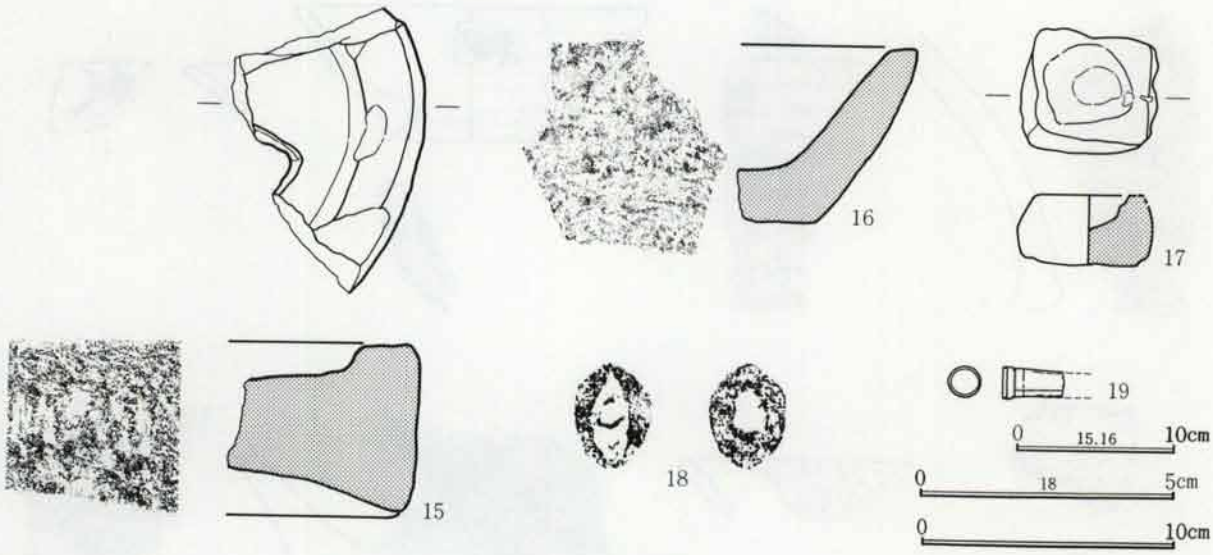
遺構に伴わない遺物を一括遺物として処理する。平安時代の須恵器片、瓦片、陶磁器、石製品、金属製品等がある。

１は平安時代の須恵器甕の頸部片で外面には二段に波状文を施す。２は高台付碗で復元口径13.5cm、器高5.3cm、底径6.5cmを計る。体部外面に？の墨書。３も墨書土器であるが判読不明。

４は羽口片。５はカワラケを使用して銅を溶解した坩堝。瓦（No.６）片は平安時代後期頃の平瓦の小片と考えられ、厚さ1.9cmを計り、内面に縄目状圧痕が残る。内外面に火受けが見られる。７は須恵質陶器で、外面は櫛歯状工具で調整。８～11は江戸後期以降の所産と考えられる陶磁器で、８は灰釉が施された陶器。９の蓋は中央よりややずれて鈕が付されている。外面には山水を描く。10は瀬戸・美濃系の磁器皿で内面に巴文や木葉状文を組み合わせた文様を銅版絵付けされている。明治20年代～戦前の所産。




第59図　一括遺物(1)




第60図　一括遺物(2)

11の青磁片は大皿の底部と考えられる。12～14は流紋岩質の砥石。12は先端部分が広がる撥形を呈し、使用面は四面。長さ4.5cm、幅3.9cm、重量35ｇを計る。(註) 13は直方体で四面を使用し、研ぎ痕が残る。長さ8.2cm、幅2.9cm、重量75ｇ。14は短軸の断面形が蒲鉾状を呈し、一面の使用であり、成形はノミによる。長さ6.1cm、幅2.9cm、重量66ｇ。15の石臼（上臼）は片減りが著しく、下面の擦り目は消滅している。供給口はその残存部分から四角形と思われる。16は安山岩質の搗臼片で、器高11.7cmを計る。内面はつるつるに研磨されている。17の軽石製品はノミにより方形に加工され、凹部は雑な仕上げである。18は煙管の火皿を偏平に潰した雁首銭で重量２ｇ。19は煙管の吸い口部分片で重量３ｇ。

（註）脱稿後に２号溝で出土した砥石と同一個体と判明した。

## 第３節　成果と課題

本遺跡は大別して縄文時代、平安時代、中近世の遺構と遺物が検出された。縄文時代では中期後葉の加曾利Ｅ式期の土坑と同期の遺物が出土した。土器様相からＥⅢ～ＥⅣ式期の終末的と考えられる。

平安時代では４軒の住居跡を検出し、同台地の殿町遺跡でも同期の住居跡が検出されていることからも集落が広範囲であった可能性が考えられる。本遺跡からの出土遺物は、その様相から10世紀前半代前後と考えられる。特に４号住居跡からは高台付碗が多く出土し、仏鉢と香炉形土器？は当町では初見である。その他に灰釉耳皿と図示できなかったが緑釉陶器片との供伴から事例からも寺院に拘わる遺跡と示唆される。また、小破片ではあるが11号溝から出土した縄目状圧痕が残る平瓦からも平安時代～中世の寺院等の存在を推察する根拠となろう。

周辺は大胡氏～牧野氏に関係する中世～近世に至る遺跡が存在し、本遺跡では隣接する養林寺館址に関係する遺構・遺物が存在するか否かが注目された。しかし、その大半は近世に帰属するものが多く、明確に中世と考えられる存在は少ななかった。

養林寺館址の構造は山崎一（前掲）による考察があり、大胡町誌では養林寺館址、群馬県古城塁址では大胡館の名称を付している。現状では内郭を区画する堀が本堂の北～西方にＬ字形に残るのみであり、

外郭を区画する状況は不明であった。

氏の考察によると、内郭は本堂の西～北方を鍵形に現存する堀から方60mとし、東は3mの石垣となり、その下に堀があったろうとし、南面は不明である。外郭は西側で内堀から25mの幅で現在の道路部分に堀があり、この空間部分を西曲輪と仮称している。この部分に牧野家の墓がある。堀は北西部分で直角に東に折れて土塁幅で直進する二重堀の構造となる。南側は現在の山門前の小道と推定している。

酒井家大胡城絵図を参考にして現在の地形図に当時の道を照合し(第10図)、養林寺の周囲を発掘調査結果等を踏まえて考察したい。道路は現道と比較しても寺を取り巻く状況と大差なく、当寺の南西部分と北東部分に新道が出来ている。

近年、道路を隔てた寺の南西で宅地開発に伴う試掘調査により、堀の一部が確認された。この結果、長善寺の山門に向けて東西に走行し、東方で直角に折れて現在の道路部分に続いている。山崎の推定した堀の存在が確実視さたが、養林寺館址の外郭なのか、長善寺の外郭を構成する堀址かは不明である。

発掘調査結果では、1号溝が現存する西側の堀の延長上か北西コーナーにに続くと考えられる。外郭内を細分する溝と考えられる。また、絵図に見られる寺域内を通過する水路は9号溝が該当する。遺物としては、知多系の焼締陶器と古銭が中世に帰属すると考えられる。

今後、当館址を中心とした解明が大胡氏並びに当町の中世史を解き明かす一途になろう。

**《参考文献》**


1957　本田夏彦他　伊勢崎藩士　長尾景範著　樽村紀行　すざく会誌　第2巻3号（第10号）

1976　山崎一　大胡城の構造　大胡町誌

1979　山崎一　群馬県古城塁址の研究　補遺篇　上巻　群馬県文化事業振興会

1983　山下歳信　殿町遺跡　（大胡郵便局局舎新築に伴う事前埋蔵文化財発掘調査報告）

1988　山下歳信他　大胡城跡保存管理計画書　大胡町教育委員会　大胡町教育委員会

1988　大西雅広他　上植木光仙房遺跡　一般国道17号線（上武道路）改築工事に伴う埋蔵文化財発掘調査報告書　群馬県埋蔵文化財発掘調査団

1994　中村　茂他　高崎城三ノ丸遺跡―高崎市役所新庁舎建設に伴う埋蔵文化財の発掘調査―　高崎市教育委員会

1997　松浦正美他　五万堀遺跡　建設省関東地方局霞ケ浦導水第1導水路建設に伴う発掘調査　茨城県新治郡玉里村教育委員会

1997　大胡町　大胡町水難誌

1999　樋口良夫　牧野康成と稲垣長茂　附大胡氏と牛込氏「大胡町歴史散歩」　大胡町教育委員会

2000　考古学から古代を考える会　古代仏教系遺物集成・関東―考古学の新たなる開拓をめざして―

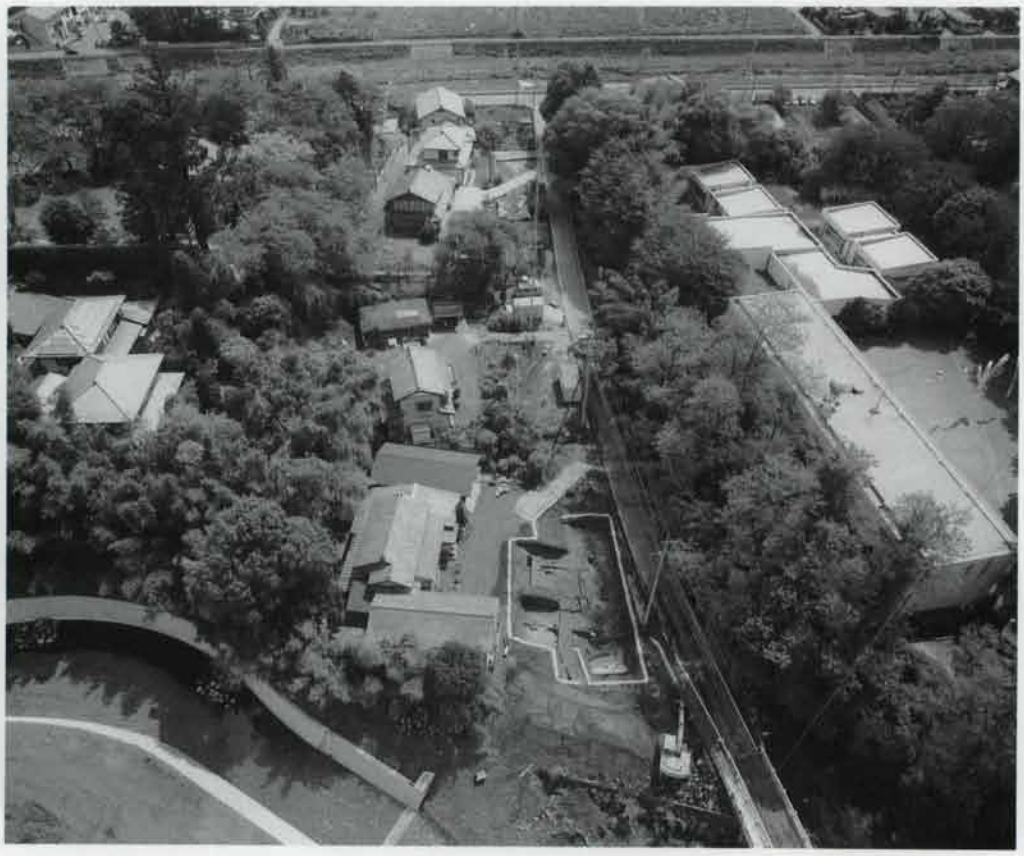
2000　群馬県立歴史博物館　第65回企画展　伝説の将軍藤原秀郷―武者と物怪の物語―

2000　九州近世陶磁学会　九州陶磁の編年　九州陶磁学会10周年記念

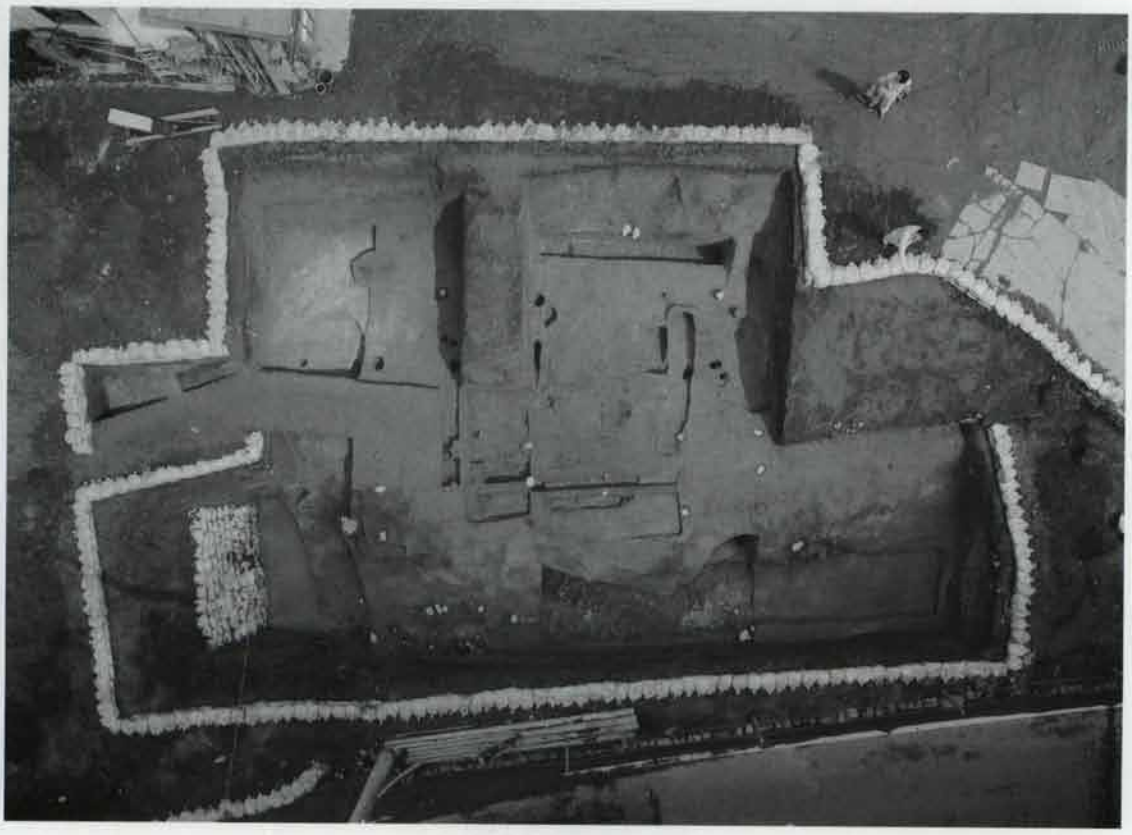
2001　江戸遺跡研究会［編］図説　江戸考古学事典　柏書房

1、堀越丁二本松B地点遺跡（南より）

2、同遺跡全景（真上から）



1、大胡神社前A地点遺跡（西より）

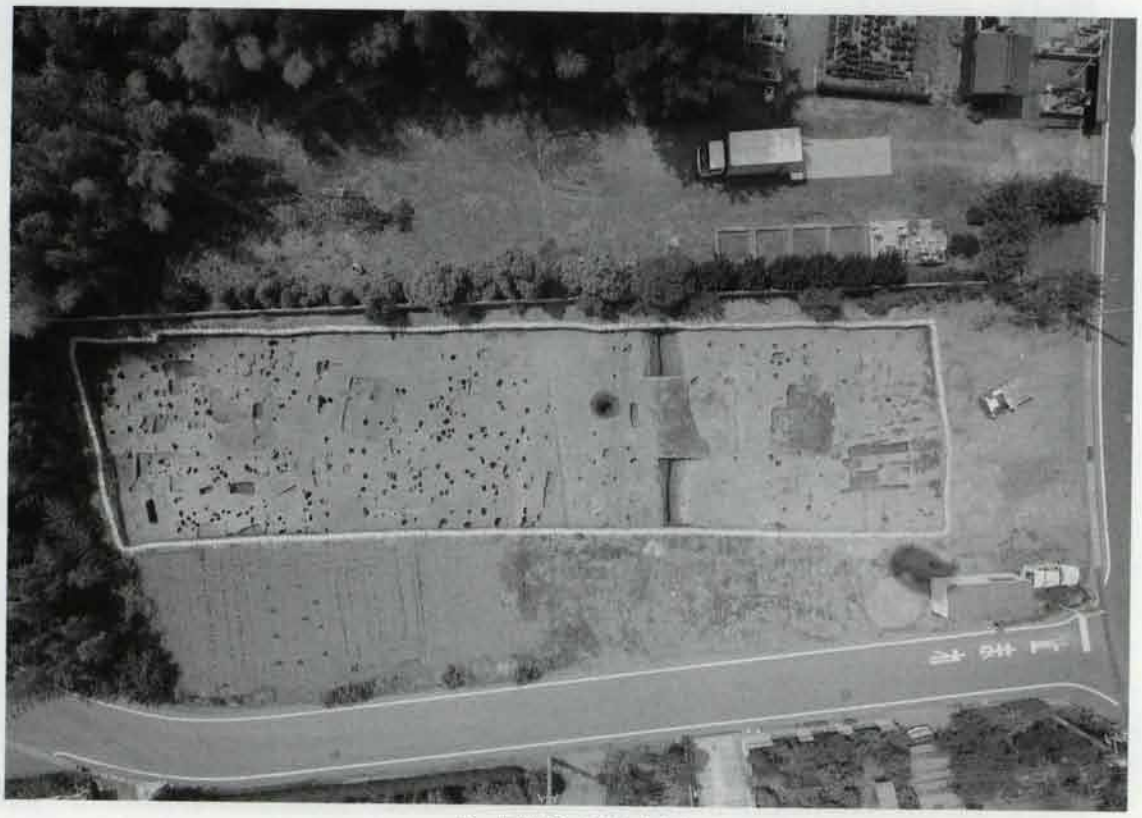


2、同遺跡全景（真上から）

1、大胡神社前B地点遺跡（西より）

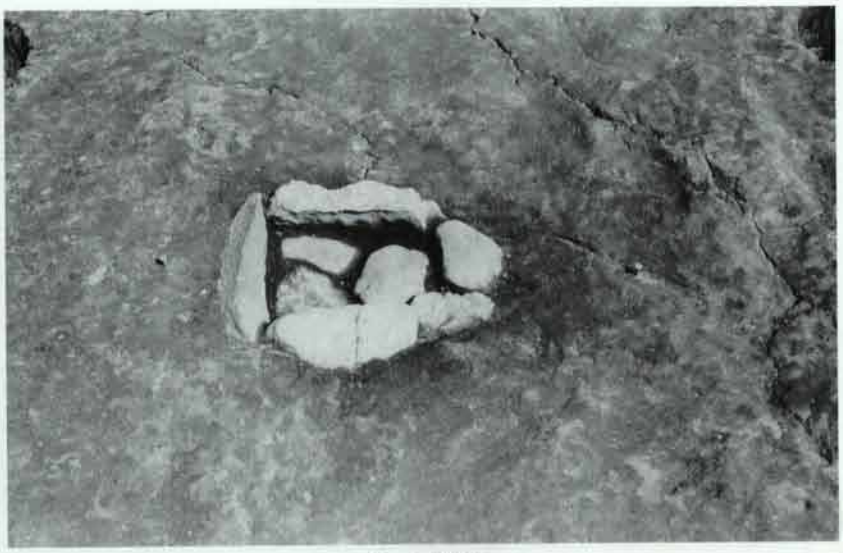
2、同遺跡全景（東から）

1、養林寺裏遺跡（南より）



2、同遺跡（真上から）

1、堀越丁二本松B地点遺跡1号住居



2、同炉跡

3、同住居小型深鉢出土状況

1、同遺跡竪穴遺構

2、同遺跡Ｊ４号土坑

3、大胡神社前Ａ地点遺跡調査前

1、大胡神社前A地点遺跡土層

2、大胡神社前B地点遺跡調査前

3、参道跡（西より）

1、同参道（北より）

2、養林寺裏遺跡東部分測量風景

3、同遺跡Ｊ１号土坑

1、同遺跡J２号土坑

2、同遺跡２号住居跡（北より）

3、同遺跡３号住居跡（北より）

1、同遺跡４号住居跡（北より）

2、同遺跡４号住居跡遺物出土状況

3、同遺跡55・56号土坑

町道関係遺跡埋蔵文化財発掘調査報告書

# 堀越丁二本松B地点遺跡
# 大胡神社前遺跡
# 養林寺裏遺跡

平成14年3月29日

編　集　群馬県勢多郡大胡町教育委員会

発　行　群馬県勢多郡大胡町教育委員会
〒371-0292
群馬県勢多郡大胡町堀越1115
☎027(283)1111

印刷製本　朝日印刷工業株式会社